それ故、經濟的障害以下の障害、經濟的福祉以下の福祉も各それ自づからに於ては無意味となる外はない。經濟的障害の除去は人間（それを全體として）の生存を充足するためであつて、人間の一部分たる經濟生活の充足には何の意味もない。經濟生活は人間生活の一部分としてその固有の缺陷を除去することによつて完全なる人間生活を實現せんとするのである。身體生活、精神生活、倫理生活、形而上生活も、それ自づから意味があるのではなく、人間生活を充足し、それを完成する目的に於て意味があるだけである。社會事業に於ては「人間全體」に意味があるだけであり、「人間生活」を目標とするから、その部分たる經濟生活、身體生活、精神生活、倫理生活、形而上生活を各充足しても、それが人間生活に綜合せられなければ、畢竟無意味となる外はない。經濟生活の故に經濟生活を改善するのではなく、人間生活を充足し完成するために經濟生活を改善するのである。その他の場合に於てもこれに同じ。

人間は不可分なものとして初めて社會事業の對象となる。これ社會事業に於て人間を歴史的に取扱はなければならぬ所以である。これまで、この關係が十分明かに分析闡明せられなかつたため、集團的困窮の出現に對して忽ち概念化の過程を行ひ、集團社會事業といふが如き人間救助の觀念と矛盾する構想となつて現はれたのである。「勞働者全體」だの「貧民全體」だのといふことは何の意味があるのではない。かくの如きものは正當に社會事業の對象たりえざるものである。社會事業の對象たるべ

きものは個性であり、人格であり、人間であつて、いづれも不可分といふところに意味がある。これ集團的困窮に對してさへも、それを、個別的集團的形態（統合形態）に置き換へて取扱ふを要する所以。それ故、社會事業の現業及學論が自己反省を始むる刹那、再び歴史的意味が鮮明となり、その本然の形相を恢復するであらう。

人間を對象とし、人間生活を目標とするものは、その部分に分斷することのできないものであるから、經濟的缺陷の除去は身體的缺陷の除去以下に關係し、心ず綜合しなければならぬ性質のもので、全體として人間的見地に於て社會的障害の除去を行ふ主義によらなければならぬであらう。人間的見地に於ては各種の困窮が綜合され、一體となつて存し、これによつて人間を全體として normality の狀態に達せしむるであらう。經濟的正常狀態、身體的正常狀態、精神的正常狀態、倫理的正常狀態、形而上學的正常狀態は彼此關連して一體となり、よつて以て、人間的正常狀態を形ちづくるであらう。人間的見地に於て正常狀態と言はるべきものは、たとへば經濟生活にのみ關するといふようなものではなく、それは他のものと不可分の關係をつくり、よつて以て、全的な人生として表現するものである。身體的缺陷と精神的缺陷とは必ず關連すべく、更に兩者は經濟生活に反映すべく、それは又倫理生活にも、形而上學的生活にも影響するであらう。缺陷として言へば、たゞ、人間的缺陷あるのみ。如實に存在する缺陷は人間的なものゝ外にはない。各種缺陷の分立は單に取扱の便利や學の便宜

に從ふに過ぎず。現實としては、各種の缺陷は錯綜關係をつくり、單り人間的缺陷を示現するのみ。福祉に於ても困窮の場合と同一で、經濟的福祉とか、身體的福祉とか、精神的福祉とか、倫理的福祉とか、形而上學的福祉とかいふ分斷的福祉なるものは存しない。これ等の福祉は綜合し一體として人間的福祉を形ちづくる。それ故、困窮と同じく、福祉も亦不可分で、個性、人格、歷史に對して言はるべきで、福祉の故に福祉といふような無意味なものではない。福祉は歷史的な人間の生活を示現するものたるのみ。

かくて、一切の困窮と福祉とは必然的に綜合狀態に達しなければならぬ。これ社會事業が概念社會事業として成立するのではなく、必ず歷史社會事業たらなければならぬ當然の歸結である。歷史社會事業に於ては個性、人格、人間、生命、全體、無限の結合、全一といふような歷史的對象を取扱ふから、經濟とか、身體とか、精神とか、倫理とか、形而上學的生存とかといふように分斷することはできない。分斷されたる困窮や福祉は全體の要素として、第一有機的結合をなすべきものであり、第二全一として一如的狀態に達すべきものである。

これによつて、社會事業の對象は綜合的のものたらなければならぬといふ斷定に達する。綜合形式としては、ある困窮及福祉を中心として綜合するもの(及びこれに類するもの)と、總ての困窮及福祉が人間的見地によつて全體として、彼此差別なく綜合狀態をつくる姿をとるものとに分れるであらう。

一つの困窮及福祉を基準とするものは左の如く分れる。

一、經濟的基準による綜合
二、身體的基準による綜合
三、精神的基準による綜合
四、倫理的基準による綜合
五、形而上學的基準による綜合

經濟的困窮及福祉が綜合する場合、經濟を中心としてその他のものを結合する形式をとり、よつて以て、人間的見地を示現するものがあり、又その他のものを中心として、他のものを結合する夫々の場合が考へられるであらう。但し、經濟と身體といふように二のものが主位を占め、その他のものを綜合することもあるであらう。これ等の場合はある困窮及福祉を基準として綜合するものに對し言はるべきものである。かくの如き形式の綜合はいづれも一以上を基準として人間的見地を示現するものである。

但し、人間的見地はかくの如き綜合形式より一歩を進めなければならぬ。それは總ての困窮と福祉とが彼此差別なく結合して人間的生存の態樣を示現するものである。こゝに人間的見地よりする綜合狀態が現はれる。

社會事業の究極對象は人間生活の完成であるが、綜合狀態に於ては未だ分斷的見地にあるから、一如として生命の姿を示現するにいたらぬ。これが綜合の姿を滅し、個性、人格、全一、人間、歷史として人間生活を完成する場合、初めて究極對象が現はれるであらう。

二　消極的對象と積極的對象

原理論に於ては各對象を精細に取扱ふことは能きぬから各對象については單に一般的說明を加へうるに過ぎない。

消極的對象以下いづれも分斷的見地に於て言はるべきで、人間的見地に於て言はるべきではない。たとへば、身體的に缺陷のあるものも精神的に缺陷のないものがあり、その反對の場合もあるから、人間的見地に於ては一が消極的であるらかとて總てがさうであると言ふことはできない。それは單に現業や學の便利に從つて一側面が消極である場合、それを消極的對象といふに過ぎない。

Sozialmiderwertigeには受動的のものと能動的のものとがある。受動的低格者は主觀的には有能で客觀的に無能なものと、客觀的に有能であるが、主觀的に無能なものとに分れる。前者は外的に障害をもつもので、後者は內的に障害をもつものである。これ等の部分的低格者は部分的に無能であるが、その他に於ては社會的價値ある生存をすることのできるものである。身體的に缺陷があり精神的に有

能なるものは疾病者、盲者、聾啞者であるが、かくの如きものは分斷的見地に於てmiderwertigeであるが、人間的見地に於ては必ずしもさうであると言ふことはできない。主觀的に無能で客觀的に有能なものは精神病者や、乞食、浮浪人、飲酒家などであるが、是又分斷的見地に於ての不能者で、人間的見地に於てさうであるとは言はれない。肺結核は遺傳によるものであるから陶汰すべしと主張する優生論者に對し、人道家は該患者の中には屢々精神力の優越な者を含むから、陶汰によつて優種を增すとは言はれないと言つて應酬する。前者は分斷的見地、後者は略人間的見地によつて立論するものである。

社會的低格者の中には能動的なものがある。社會に害毒を流す淫賣婦や、社會を脅威する犯罪人の如きものはそれであるが、これ等のものは矢張り消極的對象たるべきもので、消極的社會事業に於て取扱はるべきものである。

消極的對象は多くの場合分斷的見地に於て言はれるものであるが、人間的見地に於て言はるべきものは全體としてminderwertigeなものである。

消極的社會事業に於ては最小生活費を保證する。最小生活費をうることの能きないものは經濟的に缺陷のあるものと見做す。貧民が社會事業の對象となる所以のものは經濟的缺陷を除去することが社會事業の職能であるからである。

經濟生活に於て消極的對象たるべきものは生活標準(the standards of living)に達せざるものを ill-being として取扱ひ、これを標準生活に達せしむることを目的とする。然るに、標準生活なるものはいろ〳〵に解釋せられ、從つて混同せられてゐる。生活の標準は(一)理實生活の代表的なるもの(Customary, typical, representative standard)と、(二)理想的標準(ideal, aspirational standard)との二に分れる。社會事業に於て ill-being なるものは理想的標準に達せざるもので、理想的標準に達するものが normality であり、それ以上が福祉である。一般生活の改善は一と先づ代表的な實現的生活標準に達することを意味する場合もあらうが、社會事業に謂ふ生活標準とは望まれたる理想的標準である。

ストレイトホッフ氏の生活標準は as the expression is usually understood, consists simply of what men actually do enjoy で、實現如何なる生活をなすか、實現生活の露出がその研究の目標であり、また、その生活標準である。Comish 氏の the standard of living represents the number and character of wants customarily satisfied といふところのものも實現的標準に關するもの。D. Douglas 氏は Broadly speaking is such a sum of accustomed goods and services as they consider absolutely essential to their maintenace といふやうな生活標準を定めて居るが、氏の a sum of accustomed good and services とは實現生活に對して言はれて居ることである。かくの如き現實標準は低いにしても高いにしても一社會の現實上の代表的生活を表示するもので、それだけは生活點を確定すべき規範となることはできぬ。

それはたゞ現實一社會一國の代表生活が如何あるかを示すだけである。

社會事業に於ける標準生活は規範に關するから、標準生活とは ideal,aspirational standard のことで、それは actuality に關せず ideality に關するであらう。規範としての標準生活をたて、これを目標として進むものが社會事業である。社會事業に於ては理想的規範的生活に達しないものを ill-being と見做すから、經濟的障害を輕減除去することは ill-being としての困窮を輕減除去することである。理想的生活標準とは健康と精神能力とを維持し、自助によつて生活することをうる程度の生活を意味する。それは人間として生活することが能きるものでなければならぬから、所謂最小文化(kulturminimus)を維持するものたるを要する。ギリン氏は家族が社會に於て獨立して有用なる生活を營み、個人が生產者として體力と能率とを保持するに足るものを標準生活であるとして the minimum below which the consumption of the family must not fall, if that family is to function properly as an independent and useful group in the community. It is the measure of consumption which supplies enough to enable each individual in that family to sustain himself in health and efficiency as producer, and so be independent of the help of others と言つてゐる。バルメレイ氏は漠然と用ゐられる貧困なる語はその上の限度を定めることが困難で、通常他の助けによつて生活し、全く又は部分的に他に經濟的に從屬をなす pauper を含むとする。併し、この範類にはそれ以上を含むとなし、生活の標準に關し氏はかく

の如く言つてゐる。But it is customary to include in this class a much larger group of individuals and families who, which they may be able to keep alive without aid from others, are unable to attain to a standard of living wnich is deemed by those who have formulated it as being necessary for a normal human and social life. The exponents of a standard of living are usually in the habit of speaking of it as necessary for a decent and wholesame life and for maintaining the highest physical and mental efficiency. バルメレイ氏の標準生活は快適にして健全な生活のことで、最高の身體的精神的能率を保持するに足る經濟財に對當するものである。

かくの如き生活標準は單にドウグラス、コミツシユ、フエルチルド、ストレイトホツフ氏などの如き現實生活に關するものではなく、生活の規範たるべきものに關し、かくあるべきものであることに關し、個人と社會との福祉を目標とするものである。消極對象に於て、經濟的障害と見做すべきものは理想的生活標準に達せざるものを謂ふのであるから、かくの如き經濟的障害を輕減除去して理想的生活標準に達せしむることが經濟的消極社會事業の目的である。

オグバン氏は歐洲大戰後米國生活標準問題を研究したが、氏は minimum-subsistence standard と minimum-comford standard を區別し、前者を單なる生理生活(bare subsistence)に當るものとなし、後者を健康並に快適なる生活に當るものとして、それを health and decency minimum と呼んだ。歐洲大戰勃發す

るや、單なる生理生活以上、decencies and amenities of life を視野の中に收むる機運となり、オグバーン氏の最小快適標準ともなり、初めて minimum comfort budget なる文字を使用するにいたつた。一九一八年にオグバン氏の計算してゐる最小生活標準をなす費用は年千四百弗より少し低く、快適生活費は千七百六十弗であつた。快適生活に於ては食費は最小生活よりも減少するが、衣服及雜品の費用は却つて增加する(エンゲル法則に從つて)ルオントルイ氏の最小生活と稱するものは單なる生理生活を意味するが、チャピン氏の最小生活は健康の外に decency と normal social contact とを含む。この場合いづれにしても社會事業はオグバーン氏の最小快適生活に關し、チャピン氏の健康以上の快適生活に關するもので、ルオントリイ氏の生理生活、乃至、それ以下の生活を引き上げて快適な幸福な生活をなさしむることを目的とする。この目的に向つて經濟的障害としての生理生活以下の狀態を輕減除去するのである。オグバーン氏の快適標準が直ちに實施可能なものであるかどうかに關しては社會事業は何の關心をも有たぬ。

これまで研究されし生活標準はこれを左の四に分つことができる。

貧困生活(the poverty level)は慈惠金をうけ、收支つぐなはずして窮乏なる生活を送る程度より少しく上のもので、その收入に對し節約して生活するも當然生理生活をも保持することの能きかぬるものである。

最小生理生活 (the minimum of subsistence level) は單に動物生活生理生活をなしうるのみで人間としての欲望を充足しえぬものである。かくの如き生活は人間として文化生活をなすことができず、單に身體を保持するだけであり、食費を減少せずして他の費用に充當することのできぬ生活である。かくの如き生活は未だ以て社會事業の目標とするところのものならず、最小生理生活は經濟的障害として輕減除去しなければならぬものである。

最小健康及適正生活 (the Minimum of Health and Decency Level) は單なる動物生活以上のもので、たゞに食衣住を充足しうるのみならず、兒童敎育、娛樂、個性の發達を圖るに足る文化生活を表示する。最小生理生活を輕減除去するところの社會事業はそれを對象としながら、最小健康及適正生活に達するのであつて、經濟的障害を除去する意義の發現として社會事業は國民に對し最小健康及適正生活標準を目標として進まなくてはならぬ。すなはち、社會事業は經濟的障害を輕減除去して minimum of health and decency を實現することを目標とするものであると言ひうる。

快適生活 (the comfort level) 健康適正生活の標準を越ゆれば快適なる生活に達する。快適と贅澤とは時にはつきり區分することができぬけれども、快適生活は贅澤にいたらざるものである。

生活賃金の原則 (the principle of the living wage) の確立が喧しいが、living costs としての生活必需品の價と賃金との間にあまり差隔があれば無論生活に支障を起す。かくて生活の標準 (the standard of

living) が賃金の決定にも入り込むで來たのであつて、物價に頓着なく賃金を決ることはできないといふ風に進むできてゐる。歐洲大戰後の如き物價の變動が激しい時期には賃金と物價との間に動搖を惹き起し、その差隔が目立つてくる。ついに生活標準の觀念が導入されざるをえぬから、現實受くる賃金で生活することができるかどうかの問題が提起せられ、こゝに living wage の問題が出場せざるをえぬ。

最低賃金は無論各勞働者の取得能力を滅失させるものでない。普通以下の勞働者は最低賃金を受けるであらうし、普通以上のものはそれ以上の賃金をうくるであらう。從つて、最低賃金とは凡ゆる勞働者に對當するものにあらずして、一定の勞働者に對當するものである。この一定の勞働者とは average で、且つ normal のものであることを意味する。普通の勞働者とは中庸にある勞働者の謂ひで、その才能、技量、年齡、健康、道德が平均 (average) 線にあるものである。かくの如き平均的勞働者は觀念上の存在であるかも知れないが、兎に角かくの如き勞働者が存在することは肯定しえられる。その上、最低賃金取得は平均的勞働者 (average worker) である外、正常的勞働者 (normal worker) であるが、正常的勞働とは一般的な正規な勞働條件によつて固有の職業に常態的な賃金と時間とを以て働くものである。

かくの如き勞働者に對し最低賃金は保證されるが、この保證は一般賃率主義か生活費主義かによつ

てなされる。一般賃金主義による最低賃金とは普通で正當なる勞働者が同種の職業に從事し、それが他地方に於て働くものとの差隔ありたる場合、若くはそれと類似する職業に對し差隔のある場合、これをそれ等の同種並に類似勞働者の賃金程度に引上ぐることである。これに對し、生活費主義とは一定の勞働者が時と場所とに應じ需要する生活費を以て賃金を決定するものをいふ。一般賃金主義によつて決定せられる賃金は生活費を無視するもの、又それに關係のないものであるから、一般にこれによつて勞働者の生活を改善することは能きぬ。然らば、最低賃金は生活費に照應して決定さるべきであるが、これ卽ち生活費主義で、無論この方が望ましく完全である。たゞ、この生活費の決定を如何なる點にをくかゞ問題である。この主義によつて最低賃金を決定して居る國の傾向は單なる經濟的障害を輕減除去する方針より漸次積極的に福利を增進する方向を指して進んで居る。最低賃金の決定に於ても消極的な困窮の除去より積極的な福祉の增進の方向を指して進んで居り、私の言ふが如き人間生活の完成を陰に陽に目標とするものであることを示す。米國の諸州は多く生活費主義を採つて居るが、あるものは「生活」と「健康」とを目標として最低賃金を定め、他のものはこの二の外に福祉(welfare)を加へ、消極的な經濟的障害の輕減除去より、漸次、積極的な福祉の問題に轉向する性質をもつて居る。マツサチユウセツツ、テキサス、コロラド、ダコタ、ワシントン、オレゴン諸州は生活と健康とによつて最低賃金を定めて居るが、カリフォルニア州では「生活」と「健康」と「福祉」とに

よつて最低賃金を定めて居る。ウキスコンシンでは「生活費と福利」とにより、ミネソタでは「合理的なる健康と慰安」とにより、コロンビヤでは生活と健康とに加へ「道德を保持するに足るもの」といふように各規定してゐる。necessary living cost の定め方は區々であるが、これによつて、消極的な最低賃金より積極的な最低賃金へと向ひ、經濟的障害の輕減除去が經濟的福祉の增進に變つて行く實勢を窺ふことができる。

凡ゆる社會的障害は輕減除去されなければならぬが、單に社會的障害の故に社會的障害は除去されるものではないから、究極いづれの途より進むも、福祉更に人間生活の完成が目標とせられるであらう。

貧民及下層階級の經濟的障害を除去する目的によつても生活標準問題が研究せられた。家計の研究も亦貧民生活の實狀を知り、救助の標準を設定するために用ゐられた。勿論生活標準の研究は諸々の動機や目的から出發して居るが、これによつて生活點(the living point)を知り賃金をして生活可能なものならしむる要求より出て居ることも明白である。婦人勞働者に對する最小賃金の設定の要求は生活標準の觀念に照應するものである。生活標準を設定し、それに向つて賃金を確定する主義は生活標準を normality と解し、それ以下の賃金を abnormality と見て、過小賃金を正常狀態に接近せしめんとするものであり、社會事業に於ける經濟的障害の輕減除去に一致するものである。それが現實の生活

標準であつても同一で、人間として價値ある生活をなし得るは、いづれも生活標準を normality と解し、國民としてこれに接近せんとする義による。物價變動の激しき時期に於て特に生活標準の研究や、その設定が喧しいのは、これによつて、國民をして經濟的な正常狀態に達せしめ、これに接迄せしめんとする動機より出發するものでもあらう。この動機は社會改良的なもので、これによつて、國民生活を正常ならしめんとする義によつてゐるものである。minimum-of-subsistence level の生活は動物生活であるから社會事業に於てはかゝる生活を高めて行く、そしてそれを the subsistence-plus としての minimum of health and decency 生活にいたらしめなければならぬとする。これが社會事業に謂ふ經濟的障害を除去する義である。これが cost-of-living problem の目標とするところで、これによつて、一と先づ人間として生活をなさしめんとするのである。それが comford level の生活に達すれば、愈積極的な福祉の問題に一轉するのであつて、こゝに人類の幸福が開展せられるが、これ卽ち積極社會事業の課題である。

身體的障害を除去するにあらざれば人生の福祉を齎らすことはできない。E. L. Fisk 博士は疾病の要目を十二に分つてゐる。(一)遺傳は特殊の疾病を惹き起し、その死を招徠する。但し、それは多くの場合、疾病及死に對し間接の影響を與ふるに過ぎない。社會事業に於ては多く遺傳の問題を閑却し、優生學的方案に注意を拂はないため、みだりに劣者や惡質者を保護するが、それは保護の故に保護す

るといふような無意味なものである。劣者や惡質者を保護するため、その惡質を傳播し、救助はするが豫防はしないといふ結果となる。惡質者や劣者を救助しても、その救助せざるべからざる病源に注意を拂はないような社會的保護は無用の長物或は有害無益とも言へよう。(二)傳染によつて疾病を蔓延せしむる。(三)職業等に用ゐる有毒物によつて外部から疾病を惹起すが、又體内に發生分泌する有毒物によつても疾病を發生する。(四)ビタミンの缺乏といふが如きある食物の要素が缺けるために疾病を惹き起す、(五)過食によつて疾病を起す。人間は生命を維持するだけ食物をとればよいが、食を弄び過食は常態となつて居る。(六)空氣の缺乏及その異常なことによつて疾病が生ずる。酸素の缺乏、高熱、過度の濕氣、空氣の流動のないこと等によつて疾病が生ずる。(七)ホルモンの缺乏、未だその何であるか正體が分らないが、ある要素の缺乏によつて健康を整へることができぬ。(八)ホルモンの過分によつても疾病を起す、(九)打撲、墜落によつての失神、(一〇)産業のための筋肉運動の缺乏による無氣力狀態、(二)恐怖、憂鬱等精神的壓迫による不健康狀態、(三)身體的無氣力狀態に伴ふ精神的無氣力、これ等が疾病の原因をなす。

身體的障害の輕減除去に於ては、これ等病原因を排除することにつとめなければならぬ。フイツシヤア教授の計算によれば、米國に於ける一年間の疾病による經濟的損失は貳拾億圓であり、その半は勞働賃金、その半は醫療費である。フイスク博士の結論によれば一九二三年に於ける豫防可能なる疾

病による米國の損失は三、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇弗である。モーア博士は(一)醫療を要する程重患なるものに要する費用、(二)微恙による勞働能率の減少、(三)藥材費、(四)夭折による社會的の損害に分つて調査をしたが（一九二三年）この總費を一、七〇〇、〇〇〇、〇〇〇弗と計算し、醫師及び看護婦費を七八二、〇〇〇、〇〇〇弗、疾病のため勞働者の經濟的損失を一、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇弗としてゐる。かくの如き疾病によつて、惹き起されたる災害は如何なる人々に負擔せしめらるゝか、そして、如何なる種類と階級の人々の不幸を招くか。米國側の計算では一年一人に付三十五日より四十日間疾病がつゞくがその期間は人によつて異ふ。メトロポリタン生命保險會社の調査では、病者の中三九％は四週間以下、一〇％は一ケ月より二ケ月まで、四・八％は二ケ月より三ケ月まで、七・八％は三ケ月より六ケ月まで、六％は六ケ月より一年まで、二五・八％は一年以上、五・九％は不定である。勞働統計局とフイラデルフイア市調査局の計算によれば、勞働者家族は一年三二―五弗の治療費を支出するが、その外ゴールドウオータ博士の計算では、慈惠金より支出高年二二、〇〇〇、〇〇〇弗である。これ等疾病に惱される勞働家族は自づから貧困に陷つて行く。疾病は貧困の重大な一原因だといふことは今ではよく知れて來たが、ある研究家の計算では疾病の故に貧困となる割合を四〇％となし、他の研究家は五〇％、或はそれ以上と見做して居る。然らば身體的障害たる疾病を除去することは、社會の一大疾患たる貧困を減少し、それを豫防する所以となる。

單に疾病の輕減除去によつて文化を增進することが能きるかどうか分らない。Binder 教授の如く健康の見點から文明の進歩を考察するものにあつては(Prof. Binder, Health and Social Progress)社會的進歩は a surplus of physical well-being に原因するけれども、これは文明衰敗の原因を道德の衰頽、奢侈、政治的壓制、惡質の遺傳(優生學者の如く)などに歸し、夫々、自家の立場より强調するものと同じく、疾病を唯一の原因と見るものは同じ偏見に捉えられて居ると見るべきであらう。ビンダア氏は(1) Law of progress, (2) Law of Work. (3) Law of Social Personality. (4) Law of Civilization. (5) Law of General Development に分ち、疾病の排除を以て文明を促進する所以となして居る。

Pysical defect を輕減除去することは physical well-being を增進することゝ密接なる關係があり、彼と此とを峻別することはできぬ。衞生的方案に於ても治療より豫防に進んだが今や豫防は一轉して積極的に健康增進の方案となつて現はれてきた。衞生運動は治療に始つたが、豫防に移り、最近この兩者に注意を減ずることなくして、健康增進運動が行はれるやうになつた。我國に於ても先頃大阪每日新聞社が「健康第一」といふ標語を發表して、健康增進運動に盡瘁するにいたつたが、かくの如き運動は單に豫防につきるのではない。それによつて積極的に健康を增進せんとするであらう。ヴエール氏は最近積極的衞生方案を樹立するにいたつたとして well baby clinics, health teaching in the school, periodic examinations of adults, health insurance を擧げて居るが、身體的障害を除去することは

單に消極的なるものとして始まり、かつ、終るのではない。それは必ず積極的のものに轉成せられ「健康第一」となり、a surplus of physical well-being を目標とするにいたる。

社會事業の對象は經濟的のものでも、身體的のものでも一樣に消極的なものから積極的なものへと向ひ、彼此區分すべからざるものとして結合し融合しながら流れて行く。流れ耽る方向がいづれにあるかは第二の問題であるが、たゞ流れて行くといふような無意味のものではなく、河口を指して流れて行き、海に朝宗せんとして流れ耽るに外ならないだらう。右に左にたゞ流れる、方向を定めないでたゞ流れるといふような性質のものでは斷じてない。それは一樣に人間生活の完成を目標とし、それに朝宗するものとして經濟的障害の除去→經濟的福祉の增進、身體的障害の除去→身體的福祉の增進といふやうに Periodic な形をとりながら流れて行く。こゝに社會的障害は社會的福祉に轉成せられるのであつて、兩者はやがて綜合すべきものである。對象の性質として必ず綜合するのである。對象の進化は自づから消極と積極とを綜合することに究まる。對象の進化は竟に體驗となり全一となり、綜合的對象として現はれ出づるが、かゝる究竟地に旅立つ一里塚として社會的障害の除去だの社會的福祉の增進だのが始めて意味を得るのである。

この事は精神的障害の除去、その福祉增進、倫理的障害の除去、その福祉增進、形而上學的障害の除去、その福祉增進についても同一であり、經濟的身體的障害及福祉につい叙說せし如き順序と過程

とを以て對象が進化し行くべきものであるが、これ等については叙述の簡畧をはかるために省略しなければならぬ。

たゞ一般的障害と一般的福祉とについては尙多少の解說を加へなければならぬ。一般的社會事業は二種あると見られる。體驗的全一と、概念的全一と。

體驗的全一は哲學的意義によるもの、概念的全一は科學的意義に基くものである。體驗には主觀とか、客觀とかといふような分裂はなく、そこには生命の流動がそのまゝ行はれ、個性と變化と創造と偶然とが流れ耽り、Ganze Leben umfassende のものとして現出する。これに對し、その全一は無論體驗的なものである。併し、この體驗はその後主觀と客觀とを分ち、凡ゆる分裂と分斷とを經て、特殊的知識を構成するが、かくの如き特殊的知識は分業が竟に綜合に向ふが如く、細かく分斷したものはもう一度統合し綜合に向はなくてはならぬ。こゝに體驗的全一とは見做しがたいが、兎に角 Ganze Leben umfassande の姿がもう一度入來する。私はこれを概念的全一と呼ぶ。

人間の困窮や福祉は竟に綜合するもので、絕えて分斷をゆるさない。この事については今や十分明かであると信ずる。困窮と言ひ福祉といふも、その人間に關するものなる限り、經濟的だの、身體的だの、精神的だの倫理的だのといふような分斷的見地に於て續くことを許されない。それは物に對する見方で、人間に對するものではないから。かくて綜合的見地が生ずるがこの綜合は體驗的全一か科

學的全一かのどちらかである。

對象範類の相關々係の進化はいづれも綜合に向ふこと上述の如し。困窮も福祉も分斷されて取扱はれたが、いづれも竟に綜合せられ、消極と積極との側に生ずる凡ゆる困窮と福祉とはついに合一する。こゝに綜合的社會事業對象が生ずるが、綜合的對象は消極的對象と積極的對象との如く、それ自づから固有の對象を有つものではない。消極的乃至積極的なる一般的、經濟的、身體的、精神的、倫理的、形而上學的困窮と福祉とは悉く絡り合ひながら發展するのであり、綜合的境地に生ぜし綜合的對象それ自づから固有の對象を有つのではなく、消極的對象と積極的對象との關係の上にする關係的觀念であり關係的對象である。この關係的對象は相次いで一如觀念に到達しなければならぬ。この一如的觀念卽ち「人間生活の完成」である。これを逆に見れば、人間生活の完成を目標として、人生なるものが開始せられたのであるが、こゝに人生が分裂して諸問題が生じた。この諸問題卽ち困窮と福祉とである。人生なる全一狀態が分裂するや、一如的狀態は去り、既に困窮と福祉とが綜合せられるといふ分斷的見地(綜合は二以上のものを合せし分斷的のものであるから)となり、分斷尙一歩を進むるや、積極的諸對象、消極的諸對象が現はれ、ついに積極的社會事業と消極的社會事業とに分るゝにいたる。この分斷的見地をもう一度全一に戻すのが社會事業の目的であるから、分斷の方向を今度は逆轉して消極對象と積極對象とを合一して綜合對象をつくり、竟にそれを超越對象として一如の境地卽ち概念

的全一に達するのである(分裂前の狀態は體驗的全一で、分裂後は再び體驗的全一を容易に恢復しがたいから)體驗的全一が何故に分裂を始め又分裂を完了するかを知るものは、それが再び綜合を始むることについて聊かも疑念を挿まぬ。この事が十分明白になれば、分裂的境地に現はれて各種の困窮と福祉とが綜合的に向ひ、綜合的社會事業を起す次第について自づから勞せずして理解しうるであらう。なほ綜合せしものは元來人間性完成の原理が分裂したのであるから、一如としてそれに向ふことも自づから理解しえられる。

消極的對象と積極的對象との綜合しなければならぬ所以のものは對象そのものが綜合的のもので、分裂後大急ぎで再び全一に向ふ途中にあるからである。消極的對象だの、積極的對象だの、綜合的對象だの、超越的對象だの、全一だのといふように分离して思考するからその關係と意味とが明かにならないが、體驗的全一→なる型式と↑概念的全一なる型式とを同時に思ひ浮べ、その進化の全程と意義とを把握すれば、私の消極的概念↓積極的概念↓綜合的概念↓超越的概念(人間生活の完成)の理は自づから釋然たるものあるを覺えるであらう。

一般的困窮とか一般的福祉とかといふ觀念は對象が綜合的なる以上(この場合、對象は關係的觀念であるから)驀直に了解しえられる。孤立遊離するが如き困窮も福祉もないから、困窮と福祉とは各種のものが關係をつくり關係的なものとして存立する外はない。困窮の處置は身體的とか精神的とか倫理

的といふことはできず、一は他と關係しながら困窮を起して居る形ちで、困窮は凡て關係的なものとして取扱はなければならぬ。福祉も亦それと同じく、たとへば精神的福祉といふようなものはそれ自づから切り離して然るのでなく、身體的福祉を前提としてそれがあるのであり、また、精神的福祉は倫理的福祉や形而上學的福祉の助をえて精神上の怡樂となつて現はれて居る。こゝにも關係的觀念によつて福祉が解釋せられ、特定の福祉はそれ自づから固有なものとして分斷しがたきものなるを知る。かくて困窮も一般的のものとなり、福祉も亦一般的のものとなる。一般的は綜合的である。

綜合對象として困窮も福祉も綜合せられて一體となるが、綜合は未だ一體の全からざる狀態であるもとゝ、一體たるために綜合するのであるが、綜合的對象は混合であり併存であるから、未だ一體になり切らざるものである。困窮＋福祉は一體にいたる途中に生ずる形相で、それが困窮×福祉の觀念に進み一體に近くなり(未だ全く一體たりえぬから)それより一飛躍をなし一如の境地に達し「人間生活の完成」(概念的全一)に極まり始めて一體となり了る。

對象の範類は無意義に諸々の範類として存するのではない。それは竟に概念的全一に向ふ途中に生ぜし暫有的なものとしてその存在價値をうるに過ぎない。然らば、諸々の對象は始めより綜合對象(若くは全一)を豫想して現生するもので、それ自づからの存在は全く無意義である。こゝに概念的全一の姿が鮮明となる。

社會事業對象には綜合と全一との外何ものもない。綜合するための對象であり、全一となるための對象である。そこで、對象の範類は分斷的對象としての諸々の困窮と福祉とがあり、綜合對象としての綜合社會事業があり、最後に綜合對象を超越對象に移して概念的全一に達し、その進化の過程を終るのである。社會事業の對象たるべきものは static に見るべきものにあらずして dynamic の見地から眺むべきものである。それ自づから固定するが如き對象なるものは一も存しない。固定せしものはそれをMittelpunkt として暫く續けるだけで、やがてそれは他の中心に移動すべき性質のものである。社會事業にはそれ自身完了すると見做すが如き靜的對象なるものは存しない。社會事業は凡て動的なるものである。この動的なるものとしての存在の意義はそれは概念的全一を豫想し、それに向ふ見地からである。

一切の分斷されたる對象は人間生活の完成なる概念的全一に達してその進化を了る。對象進化の過程を概念的全一によつて完了し、そこに、完全なる姿を現はし、初めて究極的對象として存在するにいつたつて、進化は完了と見做される。

三　對象の綜合性

消極的社會事業は困窮に關し、積極的社會事業は福祉に關するが、困窮と言つても、福祉と言つて

も、その缺けたるところ(困窮に對し)その足らざるところ(福祉に對し)を補足し增加することに於ては同一である。困窮を救助するには、何づれにしても、notwendigen Lebensbedarf を充足しなければならぬ。「必要なる生活資料」を有つて居ないものを要救護者(Hilfsbedürftigkeit)といふ。ここで必要なる生活資料とは「文化的基準に則り、人間生活の完成」を實現する一手段である。目的としては「人間生活の完成」であるが、それに達する手段は「必要な生活資料」でもある。

人間の生活を完成するには素より經濟の一道よりのみ進むことはできず、又その無効無益なるは明かである。それ故、必要なる生活資料は單に經濟生活を充足することに關するのではない。社會事業の目的は困窮の救助、福祉の增進による人間生活の完成であるが、それを手段より見れば、必要なる生活資料を完備する事卽社會事業である。社會的救助として言へば、經濟的なものと誤解されるが、經濟的なもの以外の要因がそれに參加し結合しなければ、必要なる生活資料を具備するとは言はれない。必要なる生活資料の觀念露出はそれに含まれる要素、乃至、要素觀念を列擧し、これを集合して示す方法と、要素及要素觀念を綜合し一體としてこれを組織する方法との二がある。眞の救助對象と言はるべきものは集合的のもの併列的のものではなく、綜合的のもの組織的(化合)のものであるから眞に救助と言はるべきものは綜合的なもの組織的なもの以外にはない。經濟的救助なるものは必要なる生活資料の一要素であるに過ぎないから、この一を以て全き救助觀念を表すことはできない。眞

の救助觀念は綜合的のもので經濟を一要素とし、その他の要素と結合、乃至、化合せしものである。經濟的救助といふが如き分斷したものは、學の便宜に從つて設定したまでゝ、事實としては存在しない。事實としては、要救護狀態(これは經濟を初めとして凡ゆる要素の結合狀態)は經濟的のものか、教化的のものか、保健的のものか、いづれかを主要素としその他のものを從屬として結合するのであつて、その中一をかぎり、それによつて構成されて居るのではない。從つて、經濟的といふやうな要素は獨立せしものであるのではなく、また、經濟的といふやうな孤立した手段があるのでもない。この意義によつて、救助は單獨救助と綜合救助とに分れる。單獨救助は事實としては存在しないが、單に學の便宜に從つて設定せられしもの、乃至、諸要素中の一要素を抽出し强調する場合に用ゐらるゝものである。事實としては、何づれにしても、綜合救助が存し又行はれるのみ。

貧民救助は主として經濟的であるから、經濟的に貧民を救助するといふこともできる。必要なる生活資料として第一に數へらるゝものは生命保存に必要なる生活資料である。この種の生活資料は、居宅、食物、衣服、その他個々人の生存に必要と認めらるゝものである。居宅(Obdach)は一定の空間的保護(raumliche Unterbringung)を要件として生存する人間の生活には必要なものであり、食物も衣服も又さうである。居宅、食物、衣服、その他個人の生存に必要なるものは、個人的のもので、集團的のものではない。それ故、個人の生活資料としての居宅、食物、衣服は相對的觀念であつて、絕對的觀念

ではない。どの位食べるかといふことは、無論、個人によつて異ふもので、豫め法によつて一日男四合女三合などゝいふやうに決められるべきものではない(恤救規則の如く)どれ程の居宅がいるか、衣服がいるかといふことについても同樣である。そこで、相對的觀念により、これに對應して救助するもの卽ち個人的な慈善事業となり、共通な標準を設定して救助するもの卽集團的な社會事業となる。必要なる居宅、必要なる食物、必要なる衣服は相對的のものではあるが、生理生活をなすに缺くべからざる生活資料は略萬人に同一であると見ることができる。そこで、notwendiger Lebensbedarf なるものは抽象的に概念構成をなすことができ、必要缺くべからざる居宅と食物と衣服とといふものが現はれてくる。この種の居宅や食物や衣服は絕對的觀念である。そこで、「絕對的生存資料」(absolute Existenzminimum) なる觀念が生れる。これに應じて、日、週若くは、月分けにして若干の一定生活資料を給與することゝなる。その量及方法は法律によつて決められ、全國一齊に、一もあまさず、その瞬間より施行せられて効力を生ずる。この形式卽私の社會事業(概念的な)と稱するものである。社會事業の救助方法は分斷的なもの、人爲的なもので、自然としては存在しない。自然としては綜合的なもの、自然的な慈善事業の對象と方法とが存在するだけで、救助は單に居宅、食物、衣服といふが如き經濟的なものに關するばかりではない。それは人間生活を完成することを目標とするから、無論、單に經濟的に止ることのできるものではない。救助とし言へば、經濟的のものと考へられるが、救助に

して一度び少年に及べば、この觀念は卽刻破綻を暴露する。少年の保護は經濟的なると共に敎育的である。敎育は少年保護の重要な手段である。少年保護に於ては敎育は必要なる生活資料に含まれる。たゞにそれのみではない。少年の保護には敎育の外に、生業能力の獲得をも含まなくてはならぬ。生業能力とは一定の生業によつて自から生活資料を獲得する能力である。生業能力(Erwerbsbefähigung)といふことゝ職業能力(Berufsausbildung)の造成といふことゝは異つてゐる。生業能力は如何なる職業に關しても一般的に言はるべきことであるが、職業能力とは一定の職業に對應する能力を意味するだけである。兎に角、兒童保護の中には經濟的なるものゝ外、敎育とか、生業能力とか、職業能力とが加入する。かくの如き救助觀念は無論經濟的のものではない。少年保護に關しては經濟と敎育と生業と職業とが合流する。一層適切には、集合といふよりも、綜合であり、組織をつくるので、少年保護は單獨救助にあらず、綜合救助であると言ふべきである。こゝにも、救助の單獨的のものでなく、綜合的のものであることが露出せられる。

妊產婦保護なるものも純粹經濟的のものではない。妊產婦を何故保護するかと言へば、乳兒死亡率の減少が人口政策に關係するからである。然るに人口政策なるものは無論人口政策につきるのではない。更に、妊產婦の保護は人間生活の完成といふ觀念に含まれ、それに應じて、必要なる生活資料を供給するものに外ならぬ。それ故、如何なる種類の保護でも、その目的たるや、人間生活の完成を目

標とするのであつて、單なる經濟生活の充足といふ狹小な觀念によつて表示することのできるものではない。

疾病保護も亦必要なる生活資料の中に含まれる。疾病は特殊の要救護狀態である。疾病を閑却することは如何なる社會如何なる國でも不可能である。そこで、病患保護が集團政策として現はれる。集團政策は卽ち社會事業、乃至、社會政策である。病患は保健政策(Gesundheitspolitik)として取扱はれなければならぬが、保健政策は社會事業政策の一部分である。國民病たる花柳病や肺結核を撲滅することは保健政策としても社會事業政策としても必ず勵行しなければならぬ。

かくの如く救助として言はるべきものは單純に經濟的なることはできず、更に、單獨救助なるものは抽象的には存在するが、事實の上では存在せざるものなることを知る。よつて、一切の救助は綜合的なものとなり、單獨救助は事實としては絕滅に歸する。何故、單獨救助が亡び行くかと言へば、救助の對象が綜合的なものゝ外何ものでもないからである。更に、それは綜合といふよりも、全的なもの生命そのものであるから、その苦み惱みも體驗的なものとして存する外はない。かくて、對象としても、全一に進むことによつて生ずる生命に究るばかりでなく、如上の論究によつて、手段としても(救助として)單獨救助なるものは事實として有りえず、それは性質として綜合的なるが故に竟に體驗や生命に歸入しなければならぬことを知る。こゝに私の社會事業學論の明かな表現がある。

〔社會事業は集團的なる限り、慈善事業にその所をゆづらなければならず、それは又體驗社會事業に堕まもなければならない。この事は今や明白であると信ずる。

社會事業は對象としても、手段(救助)としても、體驗形態に究まるとすれば、これが經營についても現今の如き孤立經營若くは集合經營たることができず、統合經營若くは融合經營に進まなければならぬ理由明白である(社會事業經營論に關しては「貧民政策の研究」第三編第四章「經營主體」四〇三—四二三頁參照)

單獨經營を以てしては、綜合的社會事件を救助することはできない。對象より見れば、それは「無限の結合」たるか「全一」たるかであるから、對象は始めから綜合的である。この綜合的な對象を分斷し、經濟とか敎化とかといふやうに一側面となし、集團化して取扱ふ所以のものは、困窮の集團現象に對應する意義に基くものに外ならない。對象が既に綜合的であるならば、救助方法も亦綜合的でなければならぬ。それ故、或は經濟、或は保健、或は敎化といふやうに、分斷的な救助方法を以てしては、その目的を完全に達成すべからざるは明白である。救助方法は經濟的保健的敎化的といふやうに綜合的なものでなければならず、更に、それは全一の見地によつて融合されなければならぬ。これに應じて經營亦單獨若くは孤立たる能はず、綜合經營たらなければならぬであらう。綜合的對象及綜合的救助に照應して經營亦綜合的なるものとして漸次發達しつゝある。

社會事業分枝は綜合して綜合救助若くは統一救助(Einheitsfürsorge)たらなければならぬ。統一救助に於ては、一局所に總ての分枝が綜合する。かくて、經濟、保健、教化といふやうなものが一體として綜合し、經營亦これに應じて一體として綜合的なものとなる。マリイ、ボーム女博士はDie Zahl der Städte, in denen die drei Hauptgebiete der Wirtschafts-Erziehungs und Gesundheitofürsorge in einem Dezernat vereinigt siud, ist äuserst gering, in meinen Material nur Düsseldorf, Pforzheim und Guben と言つてゐる。ボーム女史の經濟と教化と保健とを一纒めにする構想の基調は卽ち綜合的經營論であり、更に、それは綜合的對象と、それによる綜合的救助に基く。

ミュンヘン市は一九二六年以來統一的經營方法を採用するにいたつた。ミュンヘンでは、既に歐洲大戰前、在來の貧民救助の外に、兒童保護が獨立して居たが、時恰も獨逸國兒童保護法成立の豫備時期であつたから、愈〻兒童保護を貧民救助より分立する機運となつた。兒童保護に於ては、孤兒保護と保護教育(Fürsorgeerziehung)とがそれに附屬するにいたつた。併し、貧民救助と兒童保護との分立は事態を惡くした。貧民救助と兒童保護の分立が續く間は、顯著なる弊害が現はるゝことを見出した。貧民救助はそれ自づから獨立して存在し、兒童保護を回顧せず、家庭を無視し、兒童の保護を沒却し、たゞ經濟的手段をもつて貧民を救助することに專念した。貧民救助と兒童保護とは併存關係若くは對立關係にあり、それがため、二重施設となり、或は兩者互に他を障害するが如き事態を惹き起

し、徒らに資金の濫費となつた。

綜合形態は經營方法として必ず現はれ來らなければならぬもので、單獨若くは孤立經營主義をとれば重復となり、併立(nebeneinander)となり、若くは對立(entgegenarbeiten)となるを避くることができない。これは獨立せし社會事業團體の關係であるが、一組織一機關內に各種の社會事業分枝が何等の連絡も統一もなく存在する場合に於ても或は併立となり或は對立となる。ミュヘンに於ける貧民救助と兒童保護とでは一機關一組織內に二の施設が雜居するため、或は併立となり、或は對立となつて現はれた。併立と對立とを回避するものとして、ミュンヘン市は綜合的方案に達した。一九二四年以來、保護を全體として一組織體內に織り込むことゝし、强固なる經營組織をつくることにつとめた。一九二六年以來、殊に、貧民救助と兒童保護とに統制を加へ、これを連繫することにつとめ、兩者をできるだけ綜合する主義をとつた(eine möglichste Verwaltungsvereinheitlichung in der Organisation, des Wohlfahrts-und Jugendamtes herbeiführen)ミュンヘン市では、保健局は別個の機關として構成せられず、社會事業局と兒童局との範圍に抱擁せられるものとした。かくて、社會事業局も兒童局も保健局も一機關の下に統一せられる主義によつて構成せられ、できるだけ機能並に組織に統一を與へる方針をとつた。これによつて、ミュンヘンの社會事業經營が綜合的のものであることを知る。

ミュンヘンの社會事業組織は社會事業局と兒童局とを含めて、十個の中央廳と十二の支廳とをもつ

て構成した、中央廳では社會事業に關し、地區聯合の事務を處理し、國家的兒童保護法(R. J. W. G.)を施行し、都市兒童聯合の事務を司掌する。中央廳の分擔は一般的統一的な事務で、團體の監督も亦中央廳の分掌である。個々の保護に關しては、地區駐在の吏員若くは地區官廳(Wohlfhrtsbezirksamt)の司どるところである。これによつて、ミュンヘンの社會事業經營は集中機能と分散機能とを統合する私の所謂統合形能による經營主義をとつて居ることが解る。地區に分つことによつて、機能を分散し、個別化の作用を導入するものとなし、これを中央廳(Hauptamt)に纏めることによつて統一し、かくして、分散と共に集中機能を導入せしを見る。こゝに、分散と集中とは併立若くは對立關係にあるのではなく、統合關係にあるのである(統合形態的關係)。

地區官廳は國家救助義務法(Reichsfürsorgepflichtverordnung)による集團的保護(Gruppenfürsorge)を處理するのみならず、特別なる部として一般的保護(Allgemeine Fursorge d. h. die frühere Armenpflege)社會保險及少額保險をも取扱ひ、また、獨立なる部として戰傷者及孤遺をも取扱ふ。家庭をも部に於て取扱ふが、これには貧民登錄制を設け、家庭及その關係者の施與を重復ならしむることを防止し、中央廳にも同樣なる登錄所があり、各地區に於て救助せしものを重復して施與をしないやうにつとめて居る。地區に於ては、各種の社會事件の取扱は地區在住者によつて處理する方針をとつて居る。方面委員は定住關係と近隣關係とによつて、その職務を執行するが、ミュンヘンの地區に於ても

近隣關係と定住關係の機能を導入してゐる。これは經濟的保護と教育的保護と保健保護とを通じて同一であるとする。地區の救助は家庭を全體として保護する主義を採り、たとへ、それが家族を個々として救護する場合と雖も、家庭全體救護の見地に於てする。この事は救助と豫防とを通じ同じであるとする。保護に關する外勤(Ausendienst)は女子社會事業學校出身の社會事業吏員によつてなされる。女社會事業吏員は地區の區分たる地域(Unterbezirk)を擔當する。地域は今のところ八千の人口を抱擁するが、將來これを六千より七千とする計畫である。女吏員はその司掌する取扱ひの何であるや、また、如何なる方法によつて處遇するやに頓着なく、總て調査する主義をとる。獨逸の社會事業學校では、經濟的保護、教化的保護、及び、保健保護について一樣に教授してゐる。併し、ミュンヘンの經驗では、一層保健保護に關し知識を授くる必要があり、その上、一定の教育と共に、病院、乃至、乳兒院に於て經驗を積む必要があるとする。學校卒業後は半年位公私社會事業團體に於て實際的な練習を積まなくてはならぬ。年齡としては二十五歳以下のものは不適當であり、又四十歳以上のものも採用することができぬ。ミュンヘンでは有給な女吏員の外に無給な特志名譽吏員が參加してゐる。名譽吏員の社會事業取扱方法も亦特殊保護者(Spezialpfleger,-Pflegerinnen)としてゞなく、家庭を全體として救護することに向けられてゐる。特志者は私的社會事業と兒童保護との中間を行き、その連鎖となつてゐる。地區と、地域と、地域擔當者としての女吏員と特志家とは、何を表示するかと言へば、何

づれも、救助を分散し個別化する表徵ならぬものはない。分散と個別化とは歷史社會事業を可能ならしむるもので、歷史的なものとして社會事業を轉成するものなることを表示する。

女社會事業吏員は地區官廳監督者の指導の下に事務を運行するのであり、また、中央官廳には學校教育を受けた女上級救護吏員(Oberpflegerin)があつて、女吏員を監督し、現業の成績を省察する。この上級女救護吏員は公私團體を連絡統一する役目をもつて居る。これによつて、分散と個別化的機能が導入せられ、公私社會事業の連絡によつて、綜合的機能が現實せられて居ることが分る。女吏員、殊に、若年の女吏員だけでは、救助事務の能率をあげ効果を期することが能きないので、これと共に、男子吏員を採用する考案に達した。女吏員では各種救助事務に適正なる判斷を下し、これを處理することが能きないし、また、男子要救護者を取扱ふことができないので、女子吏員の外、男子吏員を置くことゝなつた。そこで、地區には女子吏員の如く一定教育を受けし男子を配置することゝし、たゞ、乳兒や幼兒の如く男子に適せざるものは女子に讓ることゝした。但し、地域に於ても、女子の分擔として適當でないものは、これを男子に委ねてゐる。かくの如く、女子吏員の外に、男子吏員を導入せし所以のものは、分業の觀念によつて社會事業を規律したからである。社會事業に於て、概念的なものは男子の分擔、體驗的なものは女子の持分といふが如く、分業の觀念を定立することにより、社會事業に於ける綜合的觀念は一層明確となる。

ミュンヘンでは、その外、地區聯合によつて、乳幼兒の取扱や、結核撲滅や、學校醫師、公私分擔の病患看護、精神病者取扱、飲酒家取扱に對し、一定の組織をたてゝ處遇するが、ミュンヘンの社會事業經營の特色はいづれも綜合的であり、更に集中機能と分散機能とを併合することである。

ミュンヘンの社會事業組織の中には、地區官廳と共に地區委員會(Wohlfahrtsbezirksausschus)があり、地域官廳に附隨して地域委員會(Wohlfahrtsunterausschus)がある。これ等の委員會では內外の社會事務を特志家によつて運營させる仕組であり、地域委員會には女社會事業吏員及內勤の吏員(Verwaltungsbeamte des Innendieustes)が參加し、經濟的保護、敎化的保護及び保健保護を一樣に取扱ふ。委員會には經濟委員會、敎化委員會、保健委員會といふやうな特殊なものはなく、一般的委員會があるだけで、綜合的見地から救護事務を取扱ふ方針を採つてゐる。それ故、たとへば、兒童についても、單に兒童保護といふ狹隘なる見地より見られずして、一般的見地より兒童の範域を特殊化して見ることゝなつてゐる。こゝに、綜合見地があり、救助は分枝に從つて、分斷すべきものでないとする方針が示現される。

これを獨逸全體について見るも、綜合見地は經驗的に、若くは理論的に獲得せられ流通するを見る。救助の各範圍が孤立するものでなく關連するものだといふことは既に戰前に發達した思想であるが、戰後にいたつて、殊に濃厚になつた。歐洲大戰は獨逸に深刻なる打擊を與へ、一世紀の退步を見

たと思はれたが、獨逸人は組織的に固有の忍耐をもつてこれを恢復し、新獨逸を再造せんとした。人口の損失を補ひ、精神的身體的倫理的に國家の建て直ほしを行ふことを目標とした。但し、獨逸では、戰前既に身體と精神と倫理とは分離してあるのではなく、一體としてあるのであるとする見地を生じて居たから、戰後に於ては、特にこの綜合見地に基き國力を恢復し、國家を再造せんとする方針をたてた。この方針や意志は獨逸人にあつては國家の再造よりも大切なものであつた。國家を再造せんとする意志作興は國家再建の前提であると考へた。併し、この思想や意志は身體と精神と倫理とを分離して得られるのではなく、これを綜合して一體とすることによつて得らるゝものと考へたのである。戰後の獨逸社會事業は單に貧民事業といふやうな面影を存せず、統一的見地よりの、國民及國家の總括的再造を目的とした。そこで、戰後に於ては、獨逸諸州の Ministerien für Volksgesundheit, für soziale Fürsorge などの名稱を以て呼ばるゝものは、何づれも、たとへば保健若くはそれを中心とするのではなく、身體的の脅威は精神にも倫理にも及ぶとし、その上、救助よりも豫防を大切として畫策するところがあつた。この思想の發達は untrennbaren Zusammengehörigkeit der einzelne Zweige der Wohlfahrtspflege に據つたもので、獨逸の社會事業は社會事業分斷不可能の原則によつて進轉した。これが戰後殊に獨逸社會事業の基礎になつてゐる。プロシヤに於ける五年間の實驗は益々この原則の價値を認めしめ、一層密接なる綜合をつくつた。(immer engere zusammenarbeit der einzelnen Abteilungen)

社會事業分枝間に引きわたす網狀態は年と共に多く且つ繁くなり、これを分斷することは漸次不可能になりつゝある。綜合經營はかくして發達し來り、單獨經營不可能となり、一が他に關係せずしては、社會事業は經營せられざるものといふ思想に達しつゝある。こゝに於て社會事業は單獨經營につくるべきものでも、また、單獨經營の可能なものでもないといふ思想を生み出す。綜合的な觀念と綜合的組織とは表裏して發達し來る。綜合的組織方法をとらずしては社會事業は成立せぬのであり、かくて、綜合的觀念も生ずるが、他方、綜合的觀念明確となり、益々綜合的組織を招徠す。

たとへば結核の撲滅はたゞに保健に關するのみならず、總ての分枝へそれからそれへと波及する。結核の撲滅は無論黴菌を撲滅することであり、保健事業に關するが、結核の原因の中には貧乏が含まれ、營養不良がその一原因をなす。そこで、それは次に、收入の不足を改むるところの經濟事業に關係することにならう。なほ、收入不足のため、狹苦しき百軒長屋に住ふことが感染にいたるものとすれば、百軒長屋がその原因をなし、不良住宅に住ふため健康を損じ、それがため體力衰へ、抵抗力を失ふとすれば、住宅の不良が又結核蔓延の原因とならう。暑苦しく、然かも、アスフハルトで布き詰めた道路に面する家に住む結果として、益々事態を惡くし、それに乳兒死亡といふ一副產物を伴ふとすれば、原因はそれからそれへと順次に波及するであらう。通路に面せし暑苦しい不良な住宅に住むを餘儀なくされるため、身體の障害を惹き起し、乳兒死亡率の增嵩となつて現はれる。不良小住宅

に犇き合つて居るため、結核も傳染するが、經濟的に不安なる生活の犧牲として、兒童を學校に送り教育することができない。百軒長屋の雰圍氣からは不良兒や墮落婦人を生み出さゞるをえぬ。夫婦共稼のため、兒童の教育や職業練習が防げられる。かくの如き貧困な生活は冬期にいたり一層結核の感染力を高める。冬期には、戸締りをして、狹くるしい家に目白押になつてゐるから、それからそれへと結核が感染しよう。百軒長屋の路次に迂路付きまわつて居る小供達ちの遊戯場は通路であるため、轢殺負傷が多くなる。これに對し、急救施設をもつくらなければならぬ等、結核患者の原因結果は紛綜して錯綜關係をつくる。そこで、結核の撲滅なるものは單に保健に關するのみならず、更に、それは經濟にも、精神にも、倫理にも關するものであることが分る。從つて、結核の對策は保健政策といふようなものであるよりも、一般社會事業と、經濟社會事業と、保健事業と、教化事業と、兒童事業とを含むところの全範圍にわたる廣汎なものであるといふ結論に達する。この結論の指示するところのものは綜合的救助と綜合經營とに外ならぬ。

プロシヤに於ける五年の實驗は一層切實に經驗の上より理論の上より社會事業の各分技は弧立することのできぬもので、綜合して不可分なる一體をつくるものであるといふ見解に達した。墺地利の社會事業に於ても諸種の原因の綜合して發生せし社會事業に對しては强ひてこれを分離し一々治療を施しそれを無目的な無効なものとならしめず、綜合的に一體として取扱ふ主義をとつてゐる。(Wo die

Not oder die Gefahr aus mehrfachen Ursachen stammt gilt es, statt zweckloser, ja schädlicher, zwersplitternder Hilfsarbeit, zusammenfassende gleichzweitige Fürsorge zu leisten, Deutsche zeitschrift fur Wohlfahrtspflege, Februar 1929) 各分枝は學の便宜に從つて分斷され孤立することのできるものではあるが事實としてはこれ等はいづれも不可分なる關係にあり、錯綜關係に終始するものである。

綜合的社會事件の觀念は私の學論に對し光を投げるもので、それはこれまで諸學者の提出せし集團的困窮や、概念社會事業や、社會政策や、抽象的分斷的救助方法のいづれも誤れるものであることを指示する。救助と經營とは綜合的でならなければならないのは對象が既に綜合的であるからである。困窮及福祉の對象は無限の要素によつて成り立つて居るが、この諸要素を分斷するもの卽ち概念社會事業であり、社會政策である。一要素を類型にまとめ、これを他の要素より分離分斷して概括的なものとなし、これを集團として救助せんとする。その救助たるや、單に學と取扱との便宜に從つて作爲したまでゝ對象としてあるがまゝのものでは無論ない。更に、これを種別に從つて、保健とか、經濟とか、教化とかに分つものも似而非なものである。然らば、これを係と課と部とに分ち、各孤立して、孤立の狀態に於て、單獨經營を進めんとすることの誤りであることも明白である。これ等の對象論、救助論、經營論の究極はいづれも「無限の結合」若くは「全一」の觀念に究まらなければならぬ。

こゝに於て、社會事業は概念ではなく、類型でもなく、要素でもなくこれ等を結合し、更に還元し

て本源狀態に達するところに現はるゝ純眞な體驗であると考へなくてはならぬ。それ故、社會事業は概念的なるものではなく、心情的なるものであり、生命につきるものである。心情社會事業若くは生命社會事業は社會事業の究極の相である。

四　對象の結晶と流動

社會事業の研究は分析によつて進むことはできぬ。それは綜合の姿に於てその研究を進めなければならぬ。社會事業に於ては、all its different aspects at once の主義によつてのみその對象を捕捉することができる。大戰以來、社會事業學者の一樣に社會事業に對し豫定して居たところのものは社會事業は生物學の如く綜合的合成的な連續的過程の部分たるべき現象について研究するものであるといふことである。それ故社會事業に於ては、最初分析的に研究が進められたが其部分的な研究は最後に綜合的なものに取り纏められなければならぬと考へられた。そこで社會事業に於ては部分や細密よりも全體であり綜合であつて生物學の如く綜合的知識によつてその實體に接近せんとする。それは諸部分を別々に研究するとしても、最後にはこれを綜合して一度に諸部分を見且つ取扱ふ主義に依る。

社會事業學に於ては部分といふが如きものは全體に歸屬せしむることによつて初めて存立するものである。部分は全體に依屬することによつて初めてその部分たる價値が生ずるのである。「部分」といふことは社會事業に於ては無意味であり、「その部分」といふことだけに意味がある。それ故、社會事業研究は分析によつて死せるものとせし困窮及福祉について企畫されるのではなく、困窮及福祉が生けるものとしてあり、唯一それが upon the living の上に企畫される場合にかぎる。體驗的困窮や體驗的福祉は全體の見地に依るものであるから、體驗の部分を分析し、それを概念化しやうとも、それは全體の見地により、それが一定の結合形式によつて生けるものとせらるゝにあらざれば、部分としての困窮や福祉は全然無意味たらざるをえぬ。

社會事業現象は結晶して固定するものと、流動して暫有的なものとに分れる。結晶して固定するものは全體と切り離して比較的容易に分析研究することができる。院舍とか、公私社會事業團體とか、施與の手段(金品)とかといふやうなものは客觀化して固定し、physical technical structure を形成するから、これを機能と切り離して分析し研究することができる。かくの如く結晶し固定して客觀化するものは生理的關係を無視して純粹解剖學的に研究し表示することができる。社會事業現象に於ては、多く構造と機能とは分離されずして一體をなすから、解剖と生理とは結合して彼此分斷することができない。社會事業現象は living のものであるから、それは機關だの手段だのといふやうに客觀となつて特殊化することはできず、生ける、ありのまゝの具體的表現として、乃至、生命として、その機能を表示しつゝ進行する體驗そのものに外ならない。それ故、社會事業の對象は同時に構造であり機能

であつて、解剖的構造から生理的機能を切り離すことができず、また、その反對をも考へることができない。社會事業の研究方法は生物學に於けるが如く解剖的研究と生理的研究とに分離するが如きものではない。生物學に於ては、生物の構造とその物的要素とを生理的機能から切り離して研究することができるけれども、社會事業に於ては、かくの如きことを期待することはできない。たゞ、結晶して固定する對象にかぎり、構造と機能とを切り離して研究することができるだけである。その他の社會事業對象では構造と機能とが併合されて居り、彼此分離することができない。

流動して暫有的なものは社會事業制度の如きものである。これはある程度の固定性をもち、限定することができ、指呼することができる。それは社會事業對象の無限の變化の中に規定と組織とを與へ、準據たるところのものを知らしむる。社會事業制度は機能と分離して多少客觀化することができる。それは困窮及福祉に關する行動より直接形成せられるものではない。制度は意識的な構造をもつ。

流動する對象のもう一の形は無意識的で自發的である(unconsious and sponteneous)かくの如き對象は機能の續く間だけ存在するから、それは機能によつて構成せられて居ると言ふことができる。それは機能の生起と共に初り、又それと共に終り、機能の程度に應じて存在し進行する。たとへば、官公私團體の施行する救助の如きものはそれである。救助する者と救助せらるゝものと、救助團體が互に關係し交渉することによつて、そこに一定の社會事業的對象がつくられる。かくの如き對象は無論無

意識的に進行し自發的である。

流動する對象はそれが制度たると救助活動たるとを問はず、客觀化して機能と分離し、それ自身存在を保つことができる。制度は明かに限定され、それ自身捕捉されるが、それは機能と分離して客觀化することができる。救助活動と雖も機能より遊離して、それ自身の存在を保つときは、流動より固定に轉じて客觀化する。勿論、制度を以て代表せらるゝ流動的對象は、彼此推移出入して明確に彼と此との間に一線を引いて區別することはできない。救助活動は流動的な對象であるが、それが救助者と被救助者若くは各救助者及特志者間の救助規約の如き形をとれば固定して客觀體となる。又それ等の救助活動が機能の邊より眺められずして、構造の邊より見られる場合、若くは一時的の規約となる場合には、暫有的であり、時に ephemeral であるが、それでも流動を止めて固定すれば客觀體となるか、また、その趣をもつことが能きる。

社會事業の對象は構造と機能とを融合することによつて成立し、解剖學的構造と生理學的機能とを彼此分斷することができない。よつて、それは部分的に究明することのできるものでなく、その究明は必ず全體的見地よりするものでなければならぬ。社會事業の對象はその生命に於て求むべく、それを概念的なものをして分斷し固定するときに、その面影は直ぐに喪失されて了ふ、生きたありのまゝのものとしてにあらざれば社會事業に謂ふ對象たることはできない。それは構造と機能との融合する

ところに生じ、兩者を合して全的の見地より眺むるところに初めて瞥見され靜觀されるものである。

社會事業に於ける對象は獨特(unique)なもので、他によつて置き換へられぬものである。それは歴史的なもので、偶然と變化と創造とによるものであるから、これを概念化して因果關係によつて構成することはできない。對象としての困窮も、福祉も、人間性の完成も、歴史的なもので因果的のものではない。それ等は各それ自づからにのみ依存するのであり、他の困窮や福祉に置き換へられ、共通なものとして概括されることのできるものではない。對象は概念化されるのではなく、乃至、無限の結合の上に成立するのでもない。無限の結合によつてやゝ生命としての全的光景を模寫することができるけれども、それは全一の境地にいたらなければ、惱みは全一のものとなり獨特のものとなるをえず又全一のものとし、獨特のものとして享樂することができない。他と共通なものとして繰り返へす如き困窮や福祉は自然科學的のもので、社會事業に所謂對象たることはできない。Unzalige Kombination に於ける困窮と福祉とは社會事業に於ける對象たるには未だ不完全なるものである。(「社會事業概論」八九—九二頁參照)

社會事業に於ける救助はその部分に於て企畫せらるべからず、必ず全體の上に企畫されなければならぬ。無限の結合と言つても、その部分を一々切り離して救助する如きものは、部分を固定し、これを生命より離して器械的に取扱ふもので、無論完全なる救助方法ではない。それは生命によつて救助

を進むる觀念の發生により忽ち不完全なものとして捨て去られて了ふ(「社會事業概論」九四—九五頁參照)。特殊の獨特な困窮はその人かぎりその者かぎりとして存在し、生命に對し有機的結合を造るからその困窮は—例へば勞働意志のないこと、墮落すること、貧乏することなどは—固有の生命と有機的全體をつくり、よつて以て對象となるのであつて、それ自づから對象たることはできない。對象の觀念が確定せられなければ救助の對境は生じない。それ故、救助の前提は對象の確定にあると言はなければならぬ。然るに、部分的なるものは、縱へ、それが無限の結合體であり、困窮と福祉とが各有機的全體をつくつて居ても、未だ以てそれを究竟的對象に轉化することはできない。いづれにしても、社會事業學に於てはその對象を「全一」として限定する外はない。この全一にあつては素より構造と機能とを切り離しうるものではなく、また、解部と生理とを區別することの能きるものでもない。ここに對象は綜合的のものであるといふ斷定に達する。

社會事業に於ては、客觀として存する因窮や福祉をそのまゝ體驗に移し、主觀客觀の形相を滅して生きたありのまゝの個人的人間的な事件に變化する。こゝに初めて對象も明かとなり、救助すべきものゝ何であるかを指呼することができる。反省によつて破碎し、概念によつて分解したる對象は、既に對象たる意義を失つてゐる。社會事業に於ける對象は具體的なもので、抽象的なものでなく、倫理的感覺の豐かなるものである。それは要素でも、機能でもなく、兩者の融合である。社會事業學に於

ては構成的研究と機能的研究とは不可分の關係にあり、それは竟に歴史の中にその姿を見失ふ。

社會事業現象は複雜で雜多で紛糾して居り、かつ、自他錯綜して交互關係をつくつて居るから、餘儀なく一體として考察すべく取扱はざるべからずといふのではない。社會事業の對象は單り錯綜關係に於て求むべく、これを部分化することが能きないからである。困窮や福祉の研究が進むに連れ、一體としてある困窮や福祉は必ずその要素を分離し、各要素についてその原因結果を定むるにいたる事であらう。錯綜關係のうちより、一々要素を分離し、それに基き、この原因はこの結果を齎らすといふやうな關係を露出し設定するであらう。併し、これは單に思惟經濟に基く論理的遊戯であつて、實體そのものとは何の關りもないことである。社會事業に於て對象の研究が不完全なる間は、要素を分離することに成功しないから、全體的に取扱ひを餘儀なくされ、錯綜關係の上にその對象を見又取扱ふであらう。併し、これと彼とは別であつて、對象の研究が不完全なるため未だ要素の遊離されざる故に全體的に取扱ふのと、有機的結合若くは全一としての生命による錯綜關係の故を以て全體的に見又取扱ふのとは全く別である。この兩者は彼此區別されなければならぬ。

社會事業學に於て對象の分析は二の方向をとるであらう。一つには、分析によつて、あらゆる要素は遊離せしめられ、概念的一方的に因果關係を確定するであらう。かくて、社會事業は定型社會事業若くは概念社會事業として成立するであらう。併し、分析露出せしめられる總ての要素は結合形式を

通じて再び全一の境地に還元されて行くであらう。こゝに、社會事業の學としての究竟地があり、對象も亦こゝにその完全の姿を呈露する。この見地に於て、社會事業の對象が完全に確定せらるゝにいたれば、一方には分析によつて要素の分離となり、他方には綜合によつて生命への還元となるであらう。分析と綜合とは同時に進行すべく、かくて社會事業は初めて完全にその正體を露出するであらう。要素の分離なき場合には一般的な特質や錯綜關係に注意が向けられ、その中の特殊的性質を見失ふ。そこでは、一般的性質に注意を向けるから、異質たるにいたらず、同質たるのであり、變化と雜多たるにあり、流動と統一とを見るだけである。要素の分離によつて特殊現象に關する因果關係が吟味さるゝ場合、一般的體驗や一般的知識は特殊的法則や特殊的知識に轉化される。これと同時に、分離されたるものは再び別の意味での一般的なる全一や生命に還元され、こゝに完全な知識に達し、對象は初めて社會事業に謂ふ對象たるにいたる。この事を私は「概念的全一」と「體驗的全一」といふことで表示し區別して居る。要素の無限に分析遊離する場合に於ける全體は「概念的全一」であり、本然の姿に於ける究竟的全體は「體驗的全一」である。前者はその本質として科學的であり、後者はその本質として哲學的である。

歴史社會事業に於て社會事業はその究竟地に達する。概念社會事業に於て社會事業の眞の對象を求むることはできない。そこには、單に器械的な抽象化されたる本然の姿とは似てもつかぬ似而非なる

ものがあるだけである。定型社會事業にいたつても、未だ生命の躍動する對象に達することはできない。社會事業に於ける困窮や福祉その對象は歴史の中にその姿を沒し、歴史社會事業として取扱はるるにいたらなければ、その究竟地に達することはできない。偶然と變化と創造との中にのみ社會事業の對象は求めらるべく、それは概念や法則とは何の關係もないものである。法則たり、また、法則化するところに眞の社會事業なるものはない。社會事業は概念社會事業たることはできず、また、定型社會事業でも足らず、竟に、歴史社會事業たらなければならぬ。眞の社會事業は歴史のうちにのみ求めらるべく、歴史社會事業の外眞の社會事業なるものはない。

科學に於て、全體が部分化し、それが特殊の要因に轉成せられて特殊化する過程と、一度特殊化したものが更に一般化する過程とは、同時に進行するのであつて、彼此矛盾するのではない。最初、渾純として分離しがたき全體があるだけで、この中より漸次特殊の要因が分離されて行き、それによつて因果關係が設定せられ、かくて細より微に及ぶが、この特殊化は再轉して更に一般化に向ふ。これが科學一般の過程であつて、紛糾錯綜する全體より特殊化し、特殊化したものは更に一般化して行く。前者は躰驗的全一の過程であり、綜合によつて進み、後者は概念的全一の過程であり、分析によつて進む。かくて再び全體的見地を恢復して本源體に還沒する。それ故、一般的法則は特殊化の過程を經て漸次に綜合することによつて現はれるもので、最初に出現するものでも設定せらるゝもの

でもない。たとへば、コントの神學時代より科學時代に轉化する一般法則の如き、ロリヤの人口法則の如き、タルドの模倣の如き、いづれも最初に一般法則として設定せられ、これより特殊法則を引き出す主義を採つて居るが、かくの如き一般法則なるものは最初に設定せらるべきものではない。それよりも、特殊法則より漸次に一般法則が設定せられる順序をとる。最初に特殊的な結果に關する特殊的法則が設定せられ、次にこれが第二の要因に關係せしめられ、更に第三、第四の要因に進み、次にこれ等を包括する法則の設定となり、かくして漸次一般法則が設定せられる。この一般法則は概念的全一となつて再び全體の中へその姿を沒する。

社會事業の對象はつねに全體的見地によつて取扱はるべく、全體把握を以てせずして、對象としての困窮や福祉に接近することができない。特定の困窮が身體に關するとしても、それは又精神に關し、心理關係を通さずしては、それが如何なるものなりやを把握することができない。たとへば、貧民の如何なるものなりやの分析に於ては、それは、Einheitの見地より接近すべく、貧民の身體はどうか、その心理はどうかといふやうな分斷的見地より接近すべきものではない。貧困は身體的であると共に精神的であつて、兩者を切り離すところに貧困現象は失はれる。身體的缺陷が貧窮の原因をなすと見る場合には、これを基點として、他をこれの外周部に附帶せしめて眺めるのである。心理的缺陷を原因とする場合には、その他のものをそれに附帶して眺むるのである。身體的缺陷のみの貧窮や、精神

的貧窮に限るが如き貧困現象なるものはない。いづれも、それは Einheit より眺めらるべきもので、ganzheitlichen Auffassung des befürsorgten Objektes といふ見地により全體把握によつて、一原因一要因と雖もその位置その歸着を定めるのである。それ故、社會事業の對象としての困窮は全體把握によるべきもので、その要素の上に於て言はるべきものではない。身體的の缺陷と勞働意志のないことは現實としては錯綜してゐるのであつて、彼此分斷されて存在するのではない。飢えて居るとか病氣であるとかといふことが貧窮に現はれて居るとするも、それは又怠情とか放漫とか浮浪とかといふことと關係のないものではない。それ等は學の便宜に從つて分斷することができるが、實際としては錯綜して居る。斷片的に對象を取扱ふことは許されがたきことである。全體としての對象を特殊化し、これを部分として取扱ひ、病患を癒さうとするが、缺陷そのものは全體より發し錯綜關係より現はれるものであるから、特殊的取扱や斷片的の處遇では救助客體に對しては何の利益にもならない。Gesamte Lebensystem に生活體の側面が關係せしめらるゝことによつて部分が全體化せられ、よつて以て、全體把握たるにいたり、部分も生きたものとなり、組織の中へ織り込まれることゝなる。救助客體は全一として取扱はるべく、部分として取扱はるべきではない。現時社會事業の對象が如何なるものであるかの分析が不完全なるため、いづれも als stückhafte に取扱はれて居るに過ぎないが、救助客觀は gesamten のものとして存在するのであるから、部分が一々分離して存在して居るが如きものではな

い。こゝに於て、現時に於ける救助客體の取扱は極めて不合理不完全なものと言ふことになる。

對象は要素の相互作用によつて成立する。それは要素を加重して生ずるのではなく、その Wechselwirkung によつて成立するものである。身體的缺陷、精神的缺陷、經濟的缺陷などはいづれも相互作用によつて存立するのである。身體的缺陷を基點とする場合には、他の要因はそれにはたらきかけながら、身體的缺陷を中心とするものたる義による。その他の場合に於ても同樣である。それ故、各種の困窮は單に集合するのでなく、相互作用によつて交互に影響し合ひ作用し合ひ、Lebenssystem として存立するのである。對象のかくの如き有機的觀念に出入せずして對象の實相を披開するをえず。また救助客體に接近しその困窮を輕減除去することもできない。身體と精神とが交互作用をなすといふ見地に於ては對象としての貧窮は注意が其相互作用による錯綜關係にのみ向けられる。貧兒に於ける貧窮現象は主として客觀的なるものとして現はれる。主觀的貧窮現象はやうやく青春期に入つて現はれるに過ぎない。貧困兒童は經濟的客觀的な貧窮を示す外、主觀的に貧窮すると認めらるゝものに乏しい。言はゞ、貧兒は客觀に於ける困窮で、主觀に於ける困窮ではない。これが成人貧民と貧兒との異なるところである。併し、貧兒とても、經濟的に困窮することによつて、餘儀なく經驗するところの如き體驗はその心理を壓迫するから、これによつて精神的困窮は漸次現はれざるをえぬ。精神的困窮の中には勞働意志の缺乏も含まれるが、貧兒には未だ勞働意志の喪失は明かに現はれない。それ故、

貧兒は經濟的困窮を救ふことによつて助けられるが、精神的變調を呈する成人貧民は同じ方法によつて助くることはできない。この場合、成人貧民に對しては客觀的なる救助と共に主觀的なる救助を同時に遂行しなければならぬ。經濟的困窮の除去は勞働意志を恢復することを目的とし、强制勞働と平行するであらう。成人貧民に對し客觀的にのみ取扱ひ、主觀的關係を無視するが如き救助方法は眞の救助たることはできない。成人貧民に對しては時に單なる經濟的救助は一層それを深淵に投ずるのみで、自助の能力を恢復せしむる所以ではない。貧民の救助はこの義により身體と精神と、客觀と主觀との錯綜關係の上に成立するものなるを知る。

社會事業の對象はその全體の上に求めらるべく、部分の上に求めらるべきでない。要素を遊離し、部分を概念によつて固定するは餘儀ないことであるけれども、これによつて對象のありのまゝの姿を呈露させることはできぬ。對象の如實に顯示せられざるところに、困窮の輕減乃至除去も福祉の增進も企圖せらるべきでない。社會事業に於ける人間性完成については、先づ對象の究竟的意義の限定を前提としなくてはならぬ。

參考文獻

(1) Wolf, Die soziologischen Grundlagen der Fürsorge und Wohlfahrtspflege.
(2) Albrecht, Städtische Wohlfahrtspflege.
(3) Göbel, Das Woalfahrtsamt, Zweck, Einrichtung und Richtlinien für den weiteren Aufbau.
(4) Krautwig, Oaganisation der Wohlfahrtspflege der Städte.
(5) Folligkeit, Äusere und innere Gliederung der Kriegswohlfahrtspflege.
(6) Maier, Städtische Wohlfahrtsamt.
(7) Stegewald, Wege der Volkswohrfart.
(8) Stegewald, Vom Arbeitsgeist des Wohlfahrtsamtes.
(9) Baum, Die Wolfahrtspflege, ihre einheitliche Organisation und ihr Verhältnis zur Armenpflege.
(10) Polligkeit, Die Frage der Kommunalisierung der privaten Fürsorge.
(11) Blaum, Das Zusammenarbeiten des Wohlfahrtsvereine.
(12) Frank, Wohlfartspflege in Volksstaat.
(13) Bolzau, Fürsergerecht und Caritas.
(14) Altmann-Gottheimer, Wohlfahrtsamter.
(15) Richter, Kreiswohlfartsamt und ländische Wohlfahrtspflege.
(16) Bolzau, Wohlfahrtsamter.
(17) Memelsdorff, Der Aufbau des Wohlfahrtsamts in einer gröseren Stadt.
(18) Muthesius, Wohlfahrtspflege.
(19) Appelius, Die Zentralisation der Privatwohltätigkeit.
(20) Jastrow, Die Gestaltung der Wohlfahrtspflege nach dem Krieg.

(21) Flotho, Das grosstädtische Gesundheitamt.
(22) Hirtsiefer, Die staatliche Wohlfahrtspflege in Preussen.
(23) Meyer, Wozu brauchen wir einer Wohlfahrtsamt?
(24) Putter, Die Vereinigung der Fürsorgebestrebungen in einer Gemeinde.
(25) Weber, Akademiker und Wohlfahrtspflege.
(26) Wirz, Einheitliche Organisation der Wohlfahrtspflege.
(27) Laureck, Glundlagen heutiger Gemeindewahlfahrtspflege.
(28) Wronsky, Die Vereinheitlichung der Wohlfahrtspflege in Deutschen Reich.
(29) Salomon, Sozialen Frauensbildung und soziale Berufsarbeit.
(30) Goez, Grundris der Wohlfahrtsamt.
(31) Simon, Aufgabe und Ziele der neuzeitlichen Wohlfahrtspflege,
(32) Levy, Vom Wesem der Wohlfartspflege.

第八章　獨逸社會事業の綜合性

一　福利局の綜合的機能

獨逸社會事業の現狀に於て目立つことは社會事業の諸機能が綜合する趨勢、從つて分枝が綜合し、これ等の運載者たるべき機關も亦綜合する形勢にあること之れである。私は既に「貧民政策の研究」に於て貧民事業が個別的救助の方向を辿る所以のものは、やがてそれが無限の綜合形式によつて救助すべきものであり、諸々の要救護狀態を綜合するからである意を述べてをいた。但し、その機能が綜合的であることを明白にするには更に社會事業の史的發展の跡をも辿らなければならぬ。

獨逸社會事業の機能は三に分れて居る。(一)經濟的保護(Wirtschaftliche Fürsorge)(二)教育的保護としての兒童保護(Jugendhilfe)(三)保健保護(gesundheitliche Fürsorge)がそれである。この三の機能の運載者は救護局(Unterstützungsamt)兒童局(Jugendamt)保健局(Gesundheitsamt)であるが、これ等獨立する運載者は融合して福利局(Wohlfahrtsamt)に歸一する傾向がある。この傾向は無意義なものではなく、社會事業の諸機能が必ず綜合すべきものであり、その對象は必ず綜合的ならざるべからざる所以を表示するに外ならぬ。

Wohlfahrtsamt とは何であるか。メンメルドルフ氏は Unter einem Wohlfahrtsamt versteht man die

orgnische Zusammenfassung der in einem destimmten Bezirk vorhandenen Stellen und Einrichtungen der Wohlfahrtspflege だとしてそれを確定して居る。そこで、獨逸の福利局は社會事業の總ての機能を運載するものとして、これに關する諸機關とその諸施設とを有機的に併合するものといふことになる。福利局は社會事業の一分枝一分野を收むるところでなく、福利的規範の一部分を掌るところでもない。この意味では、社會事業は經濟的福祉にのみ關するものでもなければ、兒童の福祉にのみ關するものでも、國民の保健的福祉にのみ關するものでもない。それはこれ等の總てを抱擁するもので、福利的規範の總和(die Summe der Wohlfahrtsnormen)を代表するもの卽社會事業であるといふことになる。これに對し、福利局は救護局でも、保健局でもなく、それ等の一切にわたるといふ見解とならう。それは同時に經濟的であり、教育的であり、保健的である。たゞにそれのみではない。經濟的と教育的と保健的とは有機的に結合するのである。通常社會事業一般といふようなことは考へられず、社會事業とは經濟保護であり、兒童保護であり、保健保護であると解せられる。但し、それは現業の便利に從ひ、又、學の便誼によつて分斷せらるゝまでゝ、現實としては社會事業はたゞ一般的形體に於て存立するのみ。卽ち社會事業の對象は organische Verbindung として存在するのみで、その諸相を分斷して、或は經濟的となし、或は教育的となし、或は保健的となし、もつて、特殊の諸相として存立するのではない。それに從つて、福利局も亦 organische Zusammenfassung として存在するにいたらざるをえぬ。これ獨逸社會事業の發展に於て、救護局、兒童局、保健局が福利局にまとめられ、その上有機的に結合するにいたりし所以である。

獨逸の社會事業は經濟的と教育的と保健的とに分斷進展して居り、經濟的種別として貧民救助等、教育的種別として兒童保護、保健的種別として肺結核保護等に分たれる。獨逸戰前の公的社會事業と言はるべきものは單に食民事業の一あるのみであつたが、戰後にいたり救護活動(Fürsorgearbeit)の範圍が擴大せしのみならず、その內容も著るしく增大した。戰時及その後に於ける集團的困窮は急に增加し、貧民救助の外に、社會事業として從軍者家族の保護、戰傷者救護、孤遺保護、捕虜及逃走者の取扱、社會年金等となり、著るしく分岐して行つた。これによつて獨逸社會事業は分斷に陷り、統一に困難を感ずるにいたつた。救護活動が激增せしのみならず、救護方法も變化し、都市及國の財政も窮迫したから取扱方法にも新機軸を出さなければならぬやうになつた。そこで、救助よりも豫防が安上りだとして、豫防的方法を講ずるやうになつた。

戰後に於て急に多事多端となり國家社會事業を收拾する必要に應じ、機能の集中化、組織の導入、諸々の機關を併合する機運をつくり出した。それによつて、たゞに公的社會事業に於て機能の結合を促したのみならず、公私社會事業結合の機運をもつくつた。獨逸社會事業に於ける機能と各機關との結合は各種機能と各機關との特殊性を殺し、その獨立を奪ふことなくして成し遂げなければならぬと

する主義によつた。すなはち、分散化と集中化との共に必要なる原則を認めたのである。この二の機能の關係は私の個別的集團的形態としての統合形態にいたり、その完成を見るのである。獨逸では總ての機能を收結し、總ての機關を統一して、諸種の活動を行ひながら分散的にこれを集中化する方案をたてたのである。Wohlfahrtsamt なるものかくして出現する。

福利局はたゞに公的社會事業を收結するのみならず、それは又私的社會事業とも連絡をとり、公私社會事業を統一するのである。戰後に於ける獨逸社會事業のこの趨勢は單に分斷する諸機能諸機關をまとめる見地よりするのみならず、それは又各機能と各機關との特殊性を認め、これを併合することにより、一層高度の進化を成し遂げんとする思想によるものである。公私社會事業の連絡の如きも、たゞにそれを統一する趣旨の表現ではなく、それによつて、公私機能の補充關係をつくり出さんとするのである。そこで、法律によつてこの主義を採用するにいたり、救護法（§5 Abs. 4 R F V）には Das Wohlfahrtsamt soll Bindeglied zwischen öffentlichen und freier Wohlfahrtspflege sich zweckmäsig erganzen und Zusammenarbeiten hinwirken, das öffentliche und freie Wohlfahrtspflege sein und darauf と規定し、公的に公私社會事業の連絡を認むるにいたつた。社會事業終局の目的は個々人の困窮を輕減除去し、その福祉を增進するにあるから、個々の救助と個々の處遇とに適切なものたるを要し、かくて、私的社會事業の機能が大切なものとなる。但だ、私團體が勝手に孤立して出動して居ては、社會

を一體として救護することができぬ。

社會事業の運營には個別的機能と共に集中する作用を併せ要するから、Sammelpunkt となるものがいるが、これ卽ち福利局である。統一的意志と交互的信頼とにより planmasiges hand-in-hand arbeiten をなすには一の Arbeitsgemeinschaft がなければならぬ。福利局は單に個々の機能と團體とを併合するものではなく、もう一の意義としての個々の機能を殺さずして併合する主義を採るものでなければならぬ。よつて、私的社會事業は福利局によつてその獨立を奪はるゝが如きものであつてはならぬ。獨逸では私的社會事業は公的社會事業と同格のものであると認められる。公私社會事業の有機的な共同作業が現はれなければ、公私社會事業は各地を損傷することになる。

福利局の出現は社會事業の對象が綜合的なものであるとする意義の表現である。特殊な範域は各孤立することができず、一體として綜合し、そこに無限の結合や全一を形ちづくらなければならぬ。

二　救護局、兒童局、保健局の統合

獨逸社會事業はその發達によつて、經濟的なるものと、教育的なるものと、保健的なるものとに分れる。それに對して、救護局、兒童局、保健局がつくられる。

經濟的保護は一切社會事業の基礎たるべきものであるから、貧民救助などを司どる救護局（Unterstu-

zungsamt)は最も基本的なものであると言はなければならぬ。救護局はブランデルブルグやライプチッヒではFürsorgeamtと呼ばれて居るが、メメルスドルフ博士は教育的、乃至、保健的保護にもFürsorgeなる用字をするから、それはUnterstuzungsamtと呼ぶ方が宜いといふ意見である。救護的では主として經濟的保護を司どる。

救局と兒童局とはついに統合すべきものであらう。兒童保護法(RJWG)では兒童局と救護局との統一を法的に認めて居る。たゞ統合の成績に關しては都市の大さによつて異る。都市があまり大で、その抱擁する人口が最大なる場合には、その取扱ふ要救護者の數あまり大にして個別化することができず、標準化形式化の作用大となり、實効を伴はざるにいたる。この場合、兒童局は獨立なものとして開設する方が宜いといふことになる。但し人口十萬内外の都市ではWohlfahrtsamtとして救護局と兒童局とを統一することができ、その實績を損傷することなく、それを增大することができる。

保健局も獨立のものとして開設するよりも福利的に統一する方が宜いといふ意見が生ずる。Dr. Krautvigは保健局を福利局の一部となすべしといふ意見で、それによつて救護機關を統一し、その活動を齊整することが能きると考へてゐる(Wohlfahrtsamt und Familienfürsorge, S. 9)ポウリヒカイト氏は保健局と福利局は密着しなければならぬといふ意見である。保健局を福利局に併合すれば、その分擔があまりに大となり事務が多端となつて形式化を免れないといふけれども、ニュウルンベルヒの

如き大都市にあつても保健局の福利局への併合は何等の故障を惹き起してをらぬ。兒童局にしても、保健局にしても、福利局へ併合の是認は各機能の獨立を脅かしその特殊作用の圓滑なる行使を防げぬことを條件とする。獨逸の實驗では保健局と兒童局との福利局への併合は何等この點に關して顧念すべきものがないといふ。人口十萬の都市では勞働局(Arbeitsamt)住宅局(Wohnungsamt)保健局(Versicherungamt)は福利局の圈外にある。

社會事業諸分枝の一局に統合する所以のものは社會事業對象が綜合的なものであるからである。社會事業はその性質として竟に統合する外ないものである。

三　保健局の綜合社會事業

獨逸社會事業は對象の綜合的性質に從つて自づから綜合的なるものとして開展しつゝあるが、これについて保健社會事業を通じてその綜合性を一層明白ならしむることができる。

Dr. Elemens Flotho は保健局を限定して Eine von einer Groststadt ins Lebens gerufene Organisation unter ärztlicher Leistung mit dem zwecke planmäsiger Zusammenfassung aller gesundheits polizeilichen und gesundheitfürsorgerischen Arbeiten in threm Gebiet と言つてゐるが、氏のいふ gesundheitspolizeilichen なるものは法に關する政策的なるものであり、gesundheitfürsorgerischen と稱するものは任意動

作に基く保健事業のことである。傳染病撲滅、消毒、食物衞生、給水といふが如きものは法的保健政策であるが、病院の施設及經營、體操及遊戯の如きものは任意的動作に含まれ、從つて私的保健事業となる。öffentlichen Gesundheitpflege なる用字を以て表示するものは法的强制を通じて行はるゝ警察的なもの政策的なものである。これに對し、Gesundheitsfürsorge なる文字を以て表示さるゝところのものは任意的な保健事業である。クルウナツヒ氏は保健局の事業を限定してDie heutige gesundheitliche Not weiter Schichten der Bevörkerung.....verlangt die planmäsige Ausbildung und Zusammenfasung aller gesundheitlichen und gesundheitsfürsorgerischen Arbeiten in Stadt und Land と言つてゐるがこゝに gesundheitlichen といふところのものが法的保健政策、gesundheitsfüssorgerichen といふて居るところのものが任意的保健事業に當る。

そこで、保健局なるものは醫師指導の下に一定の管轄區域内で法的政策と任意的保健事業とを併せ行ふものであるといふことになる。保健政策と保健事業とを含む保健局は獨立のものとして他と關係せず施行することが能きないので、保健局なるものは福利局の一部とする外ない狀勢を生み出したのである。すなはち、保健政策と保健事業とは sozialen Fürsorge の一部とする見地に於てそれを取扱ふようになつた。社會事業を總括するもと總覽するものを Wohlfahrtsamt とすれば、保健政策と保健事業とは一般にその一部をなすと認められる。但し、實際の上から大都市では保健局は福利局に合併す

ることが能きないといふ。大都市と雖もデイスブルヒや、キイルヤや、ミュンステルや、ザアルブルツゲンなどでは、保健局は福利局に併合せられ、好成績を擧げて居る。よつて、大都市に於ても、保健局を福利局に合併する時何等の支障を發見することができぬ。この事は兒童局の場合と雖も同樣であるべきで、救護と教育と保健とは如何なる都市に於ても支障なく合併することができる。また、三の機能は對象の綜合性に從つていつかは自然に併合せられるべきものである。

獨立なものとして保健局を經營すべきか、將又、福利局の一部となすべきかについては議論があり、實際についても十分明白ではないが、その一般的傾向だけは確に合併を可とすることに傾かう。フロット氏は Hierzu gehört nach neueren Erfahrungen aber unzweifelhaft, das sowohl aus ökonomischen als auch fürsorgerischen Gründen eine einheitliche Leistung der drei hauptsächliche in Frage kommenden Ämter, das Jugend amter, des Gesundheitsamtes und wirtschaftlichen Fürsorgeamtes auf irgendeine Weise erreicht werden mus と言つて居り、救護局と兒童局と保健局とは實務の上からも財政の上からも合併して統一經營をなす方が宜いといふ意見である。マイエル氏によれば、兒童局は獨立なものとしてか、福利局の一部として運營すべきか、一に都市の大さによつて定まるが、保健局の場合の如く都市の大さによつて兒童局の福利局への合併がその實務を空疎にし形式化するやうなことはない。メメルスドルフ氏は都市が十萬以上となれば形式化の過程を生ぜずして兒童局を福利局に併合することは困難で

あるとする意見のやうであるが、恐らく保健局の場合の如く、その方法と經營とさへ合理的なれば、この場合に於ても形式化の弊を生せずして合併しうるであらう。獨逸には私の如き形態論の研究が未だ開始せられないから、この事は十分明かでないかも知れないが、私の場合、形態は集團的機能に個別機能を加へ、後者を以て如何に大なる機關と雖も個別化をなし得る仕組みであるから、都市人口の過大によつて兒童局を福利局に合併することの不可能となるやうな何等の理由はない。獨逸の保健局に於て略明白になつた事情は兒童局にも繰り返へさるゝのであつて、兒童局と保健局とは竟に何等支障なく福利局に併合せられるであらう。救護局が福利局の一部たるべきは初めより當然であり、經濟的保護が福利局の要部を占むるは何等疑ひのないことである。若し、救護局が獨立なものとして存在するならば、經濟的保護は基本的なものであり、教育的、乃至、保健的社會事業にも密接の關係があるから、たとへ兒童局と保健局とが福利局の部分となると雖も、救護局が合併せられなければ、かくの如き案は畢竟骨拔きとなり了るであらう。經濟保護に關係をもたない教育保健保護もないわけだから、救護局の加入せざる福利局なるものは救助能力の微弱なるものとして廢案となる外はなからう。

そこで、何づれにしても、救護局と兒童局と保健局とは一の家根の下へ來るべき性質のものである。兒童事業と言つても、純粋にその部門に專屬するようなのはなく、たゞ現業と學論の便誼に從つて分

つものに過ぎないから、實際は彼此出入交錯しよう。これを一刀兩斷によつて分離するが如きは實務を處理する所以でもなく、また、正當なる學論をやる所以でもない。いづれの側面より接近するも、社會事業分枝は分斷の不可能なるを見出す外はない。フロット氏は Die Aufgabenkreise der drei Ämter überschneiden sich an vielen Stellen, eine klare Abgrenzung ihrer Kompetenzen ist nicht möglich, sie sind daher auf engste Zusammenarbeit angewiesen と言ひ、三者分斷の不可能なるを述べてゐる。

社會事業の對象は或は經濟或は教育或は保健といふが如く分斷されるものではなく、これ等は一體として統合し對象をつくるものである。如何なる要救護者と雖も單に經濟的救護を要するとか、單に教育的保護を要するとか、單に保健的保護を要するとかといふが如き簡單明瞭なるものではない。要救護狀態はいつでも綜合的である。綜合的要救護狀態に對應するものとしては、救護局も兒童局も保健局も綜合的機能を有ち合さなければならず、然らざれば救助と名づくべき程のものを行ふことが能きない。獨立の局制では、いつでも各局に於ける機能は交錯し、局間に重複の弊を生ずるであらう。要救護狀態はいつでも Vielseitigkeit であるが、これは對象が綜合的なるより來る自づからなる現象である。

獨逸に於ける社會事業の發展は綜合的な福利局案に達して居るが、尙ほ廣汎なものとして Sozialamt に到達するのである。種々の機能や機關を一層大規模に併合せんとするものが Sozialamt である。戰

後にいたり、社會保險や、軍事救護や、救護や、兒童保護、保健、妊產婦保護、少額年金、失業保護、職業紹介、貧民救護が地平線上に現はれ出て、各機關の事業は交錯し重複し亂雜なものとなり、これ等諸種の救護を併合する必要を感ずるにいたつた。これ等社會的保護の全領野を併合する案は福利局案によつて蔽ふことが能きなくなり、茲に社會局(Sozialamt)案となつて現はれた次第である。フロット氏は社會局の事業を二の主義によつて區分すべきだとし、社會事件(Sachgruppen)と人(Personalgruppen)とによつて左の如く區分してゐる。

社會事件	人的範類
(a)保健保護	(a)兒　童
(b)經濟保護	(b)社會被保險人
(c)年金及財產管理	(c)少額年金受領者
	(d)戰傷者、孤遺
	(e)その他被保護者、殊に、盲者、啞者、不具者

福利局案、乃至、社會局案によつて社會事業分枝とその運載者とを收結する試みは社會事業の對象に照應するものであり、その綜合性を露出するものに外ならぬであらう。

四　機能の綜合

獨逸社會事業の機能は悉く綜合の過程をとつて居る。獨逸一部の學者は Bezirksfürsorge なる文字を以て fachliche と解し專門的分化的保護となし、Familienfürsorge なる文字を以て Gesamtfürsorge と解し、全體的又は綜合的保護と見做してゐる。マリイバウム女史は Spezialisierung hat ihre Berechtigung an vielen plätzen, nicht aber in der Fürsorge. Bei ihr handelt es sich nicht um eine riesige Reparaturstätte für kranke, Gebrechliche und Entgleiste, in welcher bei weitstegehender Arbeitsteilung das Höchste erreicht würde, sondern um Menschen und Menschenschicksale, die zu beeinflussen nur von einheitlichen unverrückbaren Standpunkte möglich und erträglich ist. Wir Vertreter der Familienfürsorge kämpfen hier für die heilige Unteilbarkeit des Lebens と言つてゐる。バ女史の「神聖にして不可分なる生命」を對象とするものが社會事業である。これに應じ、專門的な分化する機能や機關に對し、綜合的な全體による機能や機關がなければならぬ。社會事業の究極は heilige Unteilbarket, des Lebens にあるから、それを分斷し概念化する刹那、對象は死んで了ふ。

Familienfürsorge は綜合的な全體救助(Gesamtfürsorge)である。一九二〇年以來、キールでは、その十四地區(Bezirk)に家族的保護を實行したが、救助の效果に於ても財政的見地に於ても好結果を收めた。

Kiermayr氏のいふところに據れば、これによつて現業に於ける人員の節約をはかることが能きるといふ(Beitr. Klinik d. Tuberkulose, 56. Bd., S439)地區の事情を知悉する一人の女救助吏員が擔當すれば、家族に含まるゝ諸種の社會的障害を同時に共通なものとして處理することができ、人員の節約となるのみならず、資金をも節減することができる。家族的保護としての全體的救護はいづれの分枝にも有效であることはできない。社會的衞生的範圍にはその效果は疑はれて居るけれども、現業として技術としてゞなく、原則としては一般に全體的救助は最も優れたる救助方法であると言へる。社會衞生に對する家族的保護の効果については、ベルグハウス、クルウトウイツヒ、ウエンデルブルグでは不成績としたが、コートスタインなどでは好成績と認めた。社會衞生に於ける敎化相談は女救護員が要救護者に人格關係を結び、かつ、それが技術的衞生的でない場合には、家族的救護は効果のあるものだといふことが證明せられた。醫師側からの反對にかゝはらず、家族的救護は漸次採用せられる傾向があり、かくて、資金を節減しつゝある。一九二一年ニュウルンベルグに於けるDeutschen Vereins für öffentliche und private Fürsorgeは家庭保健を以て將來の保護方法だと推稱し、一九二二年、七十都市を調査せし結果によれば、その中三十六都市は家族的救護方法に左袒し、他の多くの都市も該方法を採用せんとしてゐる。家庭的救護は單に技術と費用とに關し如何なる關係があるかについて、獨逸社會事業界では注目して居るに過ぎないやうであるが、それよりもその救助的特質の何であるやを明か

に認識し、それが社會事業對象に對し如何なる關係があり意義があるかを確定する方が一層重要である。

獨逸社會事業の現業が分化的な地域的救助より綜合的な家族救護に向ひつゝある所以のものは、同じく社會事業對象の綜合性と聲息相通ずるものがあるであらう。

獨逸の實驗の示すところに據れば兒童局と保健局との間に一線をひくことは困難である。社會的救助はその性質として人間を中心とするのであり、人間の困窮と福祉とは綜合し一體としてあるべきで、彼此分斷されるのではない。社會的に保護するといふことは或は身體或は精神を保護する義にあらずして、ein Menschとしての綜合的な保護を意味する。この人間的保護に對し、兒童局でも保健局でも專門としてそれ等の分擔事項を取扱はんとするのであるが、元來、社會事業にあつては對象が綜合的なるため、兩者の分掌と歸屬とを明確に決めることができない。兒童局では法律によつて社會事業全體にわたり、一定の年齡を基準となし、精神的に、倫理的に、經濟的に、保健的に保護することを規定してゐるが、これでも無論他の範圍にわたり、交錯とも重複ともなる。兒童局では(一)相談、(二)產前產後の母親保護、(三)乳兒保護、(四)幼兒保護、(五)學校以外の學齡兒童保護、(六)退學せし兒童の保護を取扱ふが、この中の半ばにわたり保健的性質を帶んでゐる。これでは一には保健局の仕事をして居るのであるし、二には社會事業を總括する福利局との區別がつかなくなる。兒童保護法(R J W G)によれば

法の中心意義は統一的見地に基く教育であり、これを兒童保護の目標としてゐる。統一的見地に基く兒童保護者は第一家庭となるから、兒童保護法は家族保護を第一義とするもの。それは家庭で保護することのできない兒童に限り公的保護を加へる主義をとつてゐる。現時に於ては家族はその機能を他のものに讓り、分解作用を起し、教師、醫師、職業相談者などが專門家として兒童の教養及保護を分擔するにいたつた。教育は父母に代つて學校がなし、卒業後の就職相談は父母ではなくして、その專門家たる職業相談者や職業紹介所となつた。但し、兒童の保護は分斷的見地に於てなすことができないから、統一的見地によらなければならぬ。統一的見地に於て諸々の側面を統合するものは無論父母であるが、父母に代つてこれを行ふものが兒童局である。もし、獨逸兒童保護法の中心意義を以て統一的見地による兒童保護であるとすれば、兒童局の任務は綜合的のものとならざるをえぬ。統一的見地に於ては兒童の個性發達を目的とするから、教育も保健も經濟も同格のものとなり、いづれも個性發達を目標として綜合するにいたる。兒童保護の目的は人間をつくるにあつて、單に保健、單に教育、單に經濟ではないから、これ等を無雜作に分斷することはできぬ。それ故、兒童局と保健局との仕事も任務も交錯して來るのであつて、素より社會事業對象が綜合的なる限り、かくあるべきは自然の勢であらねばならぬ。保健局として兒童局として分斷するの困難はかくの如くして生じ、統合機關として福利局が現はるゝは避けがたき次第。この場合、福利局は兒童局、保健局などを交互的關係のもの

となし、それ等の Arbeitsgemeinschaft たるのである。いづれにしても、Zentrum der Mensch als Objekt der Fürsorge の主義により、綜合的意義に極らずば、社會事業の究竟地に達することはできない。家族的保護(Familienfürsorge)なるものゝ現れなければならぬ理由もこゝにある。家族的保護は綜合的保護として要救護者の全體を保護し、それを人間として救護する主義による。

五　統合的機能の綜合作用

保健局に於ても、集團的機能の外に個別的機能を必要なりとして、これを體現し、また、併合する主義を採るが、これは個別機能が綜合的なるものであり、救助の究極はいづれの途より進むも、竟に綜合的境地に達することを示すものに外ならぬ。個別的形態は人間を無限の結合として、乃至、全一として取扱ふものであるから、それは綜合的救助に終始するものたらざるをえぬ。福利局の成立も家族的保護もこの義の體現で、人間に對する救助は竟に歷史的たるものとなり、綜合的なものとならなければならぬ。

保健局に於て取扱ふ保健政策は法的なものであり警察的なものであるから、集團形態に終始するものであり、保健事業(Gesundheitsfürsorge)は主として任意的なものであり、個々に應接するものであるから個別形態によるものである。保健局は集團形態と個別形態とを統合するものであり、統合社會事

業を行ふものである。

保健事業は個人的で人格的であり、個人の養護とその個性の恢復とを目標とするものである。個人的であるからには、個々に卽して救助しなければならず、また、その救助は分斷的であつてはならず、必ず個性を表現するに足る綜合的のものでなければならぬ。よつて、それは一々嚴密なる調査をなすことにつて成立する。嚴密なる調査はエ法及ス法の場合の如く都市を地區に分斷することを要するから、それは何づれにしても、地區的な救助となるであらう。個人より個人へ、人間より人間への救助は分散的救助であつて、地區地域と救護員との前提によつて行はるべきものである。保護事業の施行にあたり分散的機能と機關とは大切だが、また、これを統一する必要が生ずるから、集中機能と集中機關とは欠くことができぬ。エ法及ス法に於ては貧民救助に對し地區を區分するのだけれども、かくの如き貧民地區(Armenbezirk)は保健を含むことはできぬ。その後、エ法ス法の貧民地域は綜合的な福利地區(Wohlfahrtsberzirk)に擴大されてゐる。福利地域では貧民救助と共に保健保護をも含むけれども、貧民地區の外に保健地區を區分するところでは兩者は併立併存する。たとへば、グルセンキルヘンでは貧民地區の外に二十二の保健地區(Gesundhitsfürsorgebezirk)があり、一人の救護員(Fürsorgerin)に付八千の人口を分擔してゐる。所によつては、救護員一人につき三千より一萬九千の人口を受持ち、平均一救護員八千といふことになつて居る。これ等の地區を總括する集中機關は兒童局である。地區

による救護は最初經濟的救護に適用されたものであるが、その後、それが保健にも導入された。地區組織は中央局(Zentraktelle)と地區との組合せであるが、副中央局としてWohlfahrtsbezirkなるものを導入するものである。一九二三年、エッセンでは八の福利地區をもち、一人の醫師によつて取扱はれ、一定數の女地區救護員を配置してゐる。

保健局なる集中機關の外に、保健地區なる分散機關を設けなければならぬ所以のものは、保健事業に於ても人間を保護するのであり、その部分なる個人の疾患を救護するものではないからである。綜合的救助は無限の結合によつてなされるか、若くは、全一によつてなされるかであるから、集團救助の如く量的で、抽象的形式的であり、所謂部分的救助であることはできない。貧民救助に於ける地區々分の意義は「貧民政策の研究」に精細取扱つてゐる。

地區により分散的機能と分散的機關が貧民救助に將又保健事業に導入せられし所以のものは、社會事業對象が綜合的のもので、救助は如何にして綜合的たらなければならぬからである。無限の結合や全一に對しては個人より個人へ人間より人間へといふ形式に於て救助を進むる外はない。部分的救助は眞の救助ではないから、人間を全體として個人を全體として統一的見地に於て救助を進めなければならぬ。統一的見地に於ける救助卽全體救助である。全體救助に對しては集團形態によつて之に應ずることは能きず、個別形態によらなければならぬ。個別形態による救助は人間より人間へ、個人より

個人へといふ形式に於て救助する全體救助たるべきものであり、地區救助となつて現はれる。地區救助に於ては個別的意義の表現たる地區地域と、救護員(特志的)と、調査と、訪問とによつてその目的を達するのであるが、これ卽ち綜合的救助に外ならぬ。地區的救助として貧民事業や保健事業が組織せらるゝことについて、それが對象の綜合性を豫想するものだといふことを獨逸社會事業界は明かに意識しないだらうが、それは明かに對象の統合性に照應するものに外ならぬ。

對象の綜合性によつて社會事業は凡て個別化し、人間的救護を目標とするにいたる。これについて Montaigne 氏はいふ、Es ist nicht ein Geist und nicht ein Körper, den wir erziehen sollen, sondern ein Mensch, und den dürfen wir nicht teilen モンテーン氏は救護の中心は人間であり、人間は不可分のものであるといふ意を明かにするのであつて、これによつて、全體的救護の外、眞に救護と名づくべきものはないと言ふのである。諸機關として分立し分裂するものも竟に gemeinsame なものとしての機能をつくり、また、それを表現する共同的機關を造らなければならぬ。兒童局と保健局と救護局とを總括して福利局を造るにいたつた理由もこゝにある。家族的保護の成立するにいたりし理由も亦こゝにある。共同的な機能及機關の成立は社會事業對象が綜合的なものとであるといふ表現である。それは人間的であり、無限の結合であり竟に全一に極るから。

保健局は法的な保健政策と任意的な保健事業とを合せて居るが、保健局の主たる任務は任意的保健

事業とならざるべからざるべく、現業は任意的な個別的なものとして實施し、たゞ、これに方針を與へ組織を與へるものとして法的政策が加へられるであらう。獨逸に於ける保健政策の發展も大體この理に從つて進行して居るが、その本然の職能を達せんには、この原則を究極にまで押し進めなければならぬ。この事は兒童局の事業についても救護局の事業についても同一であり社會事業は一律に私の所謂統合形態によつて運營せられなければならぬ。(「貧民政策の研究」に述べたるが如く)獨逸保健局は保健政策として保健監察(Gesundheitsaussicht)をなし、保健事業として救護(Gesundheitsfürsorge)をして居る。前者は法的なもの、後者は任意的なものである。保健監察は國家意志の發動により、保健事業は自助の形式によつて行はれる。この場合、集中的機能は集中的機關これを分掌し、分散的機能は分散的機關これを分掌する。このことは最小の機關より最大の機關にいたるまで同一である。私は「貧民政策の研究」に於て複合經營主體說を唱へ、集中機能と分散機能の組み合せが最小の組合せ機關より最大の組み合せ機關にまで及ぶとした。町村を集中機關とする場合、特志家、社會事業委員は分散機關であり、町村が分散機關である場合、府縣は集中機關となり、かくて國家を集中機關としての組み合せまで及ぶが、更に將來國際機關を設置するが如き機運ともなれば國家は再び分散機關を以て眺められるであらう。

獨逸保健政策に於ても同じことで、國家が保健政策を管掌すれば、都市は保健事業を分掌すべきで

あるとし、都市は個別的保健的救護を擔當してゐる。獨逸保健局の事業に於て、國家と都市との分擔は法的と任意的と言ふように明かに分割せられて居ないようであるが、集中的機能は國家、分散的機能は都市これを分掌すといふ原則に外づれて居るようなことはない。國家は大なる範圍に於ける抽象的形式的側面を取扱ひ、都市は個別的な具體的な側面を取扱ふ原則に照應してゐる。兩者の分掌範圍は量に於ても質に於ても異つて居る。集團的救助には量の界限があり、分散的救助には質の界限がある。この界限を補充して完全なる救助にいたらんとするのが統合組織論であるが、この事は獨逸保健政策にも繰り返へされて居る。國家の保健政策は形式的な方針や原則を基準となし、都市はdie individuelle, persönlicher gerichtete Gesundheisfürsorge を主義として、なるべく保健警察に觸れないやうに努めて居る。保健は兩機能を體得するものとなし、一には、都市に於ける個別的人格的で具象に卽した救護事業、二には、技術的基準と法的强制的な保健警察を遂行せんとす。そこで、保健政策に於てはmehr technischer となり、保健事業に於てはmehr fürsorgerischen となり、かつ、後者が前者よりも重要な役割を演ずるところに個別的具體的な保健的救護の特色がある。この事は一切の社會事業に於て繰り返へされ、兒童事業も救護事業も個人的なもの、具象的なものとして基礎づけられるべきであるが、かくの如き組織論は統合的形態を基準とするものである。個人的具象的な機能は集團的形式的なる機能と統合しなければならぬ。それは機能としての分散機能と形態としての集中機能とが統合するのである

から、集團的個別形態にあらずして、個別的集團的形態でなけらねばならぬ。（「貧民政策の研究」第三篇第八章）

六　獨逸社會事業の綜合經營

以上獨逸に於ける保健局を中心としその他の社會事業（兒童局救護局に管掌の社會事業）の史的發展の跡を述り、社會事業對象が如何なる性質のものであるかを考察したのであるが、これによつて、獨逸社會事業は一律に綜合的なるものとして開展しつゝあるを知つた。兒童局、保健局、救護局が各單獨經營たりえずして、福利局に併合せらるゝ過程を見れば、明かに獨逸社會事業の綜合的開展の跡を見ることができる。獨逸福利局出現の原因は、社會事業範圍の擴大とその雜多たるにいたりしことと、社會事業分斷の弊に苦めらるゝにいたりしことであつて、これ等の理由が綜合して社會事業のZentralstelleを必要とするにいたつたのである。然るに、この集中化はそれに併合せらるゝ各單位（救護、兒童、保健）の獨立性を抹削せざることを原則として居り、如何なる點に於ても對象の綜合性を認識してゐる。諸機能の併合は對象が綜合的なものであることを認めし爲であり、各局の獨立性を保證することは個人的な具象的機能を認めし爲で、是亦、對象の綜合性に照應するものである。

獨逸福利局の成立とその使命、救護局と兒童局と保健局の機能の併合はいづれも獨立たりうるとの

原則を捨てゝ、綜合的見地に據るものである。保健局を中心としてその他の局を回顧する場合には竟に綜合的運營に進まざるをえざる實勢を示す。heilige Unteilbarkeit des Lebens の主義による綜合的な家族的保護、einheitliche Gesichtpunkt の主義による兒童保護法(RJWG)の精神、分散的なる貧民地區、保健地區等の設定、集中的な保健政策と分散的な保健事業とを區分し再び併合する主義をとり、なほ、それは個別的具象的なるものを基準とする思想の發達など、獨逸社會事業の現勢は一切の Sammelpunkt として綜合的對象がその中心位置を占むるを見る。

獨逸社會事業の研究に於て如實に知りうるところのものは、社會事業對象の綜合的なるものであるといふことである。私の學論では集團的を個別的に對立せしめ、個別的なるものに先優權を與へ、一切を體驗社會事業に還元せんとするものであるが、歐米及我國の社會事業の發展は着々これを現實なものとして證明して居る。

參考文獻

(1) Albrecht, Städtische Wohlfahrtspflege.

(2) Gobel, Das Wohlfahrtsamt.

(3) Maier, Städtische Wohlfahrtsamt.

(4) Baum, Die Wahlfahrtspflege, ihre einheitliche Organisation und ihr Verhältnis zur Armenpflege.

(5) Vgl. die Ausfahrungen von Dr. Luppe, Dr. Levy, Dr. Polligkeit, Buno, Dr. Weber, Dr. Baum, Dr. Zahn, Dr. Altmann, Dr. Schlosmann, Dr. Marr, Dr. Meyer, Dr. Sievking, Dr. V. Erdberg, auf der 10. Konferenz der Zentralstelle für Volkswohlfahrt.

(6) Bolzau, Fürsorgerecht und Caritas.

(7) Bolzau, Wohlfahrtsamter.

(8) Memedsdorff, Aufbau des Wohlfahrtsamtes in einer groseren Stadt.

(9) Muthesius, Wohlfahrtspflege

(10) Flotho, Das grostädtische Gesundheitamt.

(11) Hirtsiefer, Die staatliche Wohlfahrtspflege in Preussen.

(12) Wirz, Einheitliche Organisation der Wohlfahrtspflege in der Grostädten.

(13) Laureck, Glundlagen heutiger Gemeindewohlfahrtspflege.

(14) Wronsky, Die Vereinheitlichung der Wohlfahrtspflege in Deutschen Reich.

第九章　社會事業研究の方法

一　社會事業の本質と研究方法

社會事業は個人が社會の一員としてこれに屬するが故に、社會や全體を調整する意味に於て個人を救助する主義をとる。社會事業に於ける保護は個人が社會に屬する單なる事實に基く。すなはち、社會事業に於ては、Zugehörigkeit zur Gemeinschaft といふことで救助するのであつて、救助は被救助者より提供せらるゝ勞働の對價の形式をとらない。それは單に社會に歸屬するが故に救助せられる。

これによつて、社會事業の救助形式は社會そのものゝ調整といふことになる。すなはち、社會事業にあつては、社會そのものを調整することを目的とするのであつて、個人の救助は社會調整なる目的を達する手段たるに外ならない。この場合、目的はあくまで社會で、個人は手段である。

社會事業は歴史的なる心情社會事業と因果的なる知的若くは概念社會事業とに分れる。心情社會事業は bewegende Sinnlich-Real を對象とするもので、これを概念化することも類型化(typisieren)することも能きない。それは單に感得し洞察し直觀するだけである。私の社會事業學は學としての概念社會事業と直觀的な歴史社會事業との二を含む。學の對象たるべきものは單り定型社會事業あるのみ。

社會事業の對象はそれ自づから類型として客觀化する意志 (das typisch sich objektivierende Wollen)

であるところの Soziale に基く總體福祉(Gesamtwohl)である。總體福祉はこれまで社會事業研究家が主張し來りしが如き消極的困窮につくるのではなく、それは又、積極、綜合及超越を含むものである。社會事業の對象は無論 Soziale なるものであるが、この社會事業對象なるものは「それ自づから類型として客觀化する意志」である。この類型として客觀化する意志が總體福祉を目的とするもの卽ち社會事業であり、それが又社會事業の對象となる。更に、總體福祉とは生存原理を體現するものである。

總體福祉は社會的なものだが、總躰福祉は個人を個人とする見地によらず個人を社會に從屬せしむるのであり、之が Typen として客觀化する意志に關するものである。それ故その關係が個人的見地より社會的見地に進まなければ社會事業たり得ず、又社會的な總體福祉たり得ない。そこで社會事業に所謂總體福祉とは社會的見地によるもので、それが如何樣にでも類型化されて客觀的意志となつたものでなければならぬことゝなる。學の對象としては心情的な einmalige な福祉は類型化することが能きないから、社會事業學に於て取扱ふ意志は繰り返へすものとしての wiederkehrende Wollen でなければならぬ。それ故、個人的なる福祉は社會事業の對象たることはできぬ。純粹な個人的にはたらく意志は非合理的なるものである。純粹な絶對な個人は客觀化し類型化することはできぬ。それは心情社會事業として體驗し直觀することができても、これを學の對象とすることはできない。社會事業は typisch wirkenden Wollen を排除した純粹な絶對な個人の單に集積した若くは絶對個人によつて成立

する如何なるものをも思考することができない。

社會事業に於ける福祉とは社會的な福祉であつて、社會と關係するものであるから、社會事業に於ては個人の福祉といふが如きものは nonsense であり、また、思考することができぬ。社會事業の福祉は社會的のもので、それが客觀化され類型化されなければ社會事業に於ける福祉たることはできぬ。社會事業に於ける福祉は社會的に確定せられ了解せられるもの以外にはない。

社會事業に於ける福祉は同樣性(Gleichformigkeit)と規則性(Regelmächtigkeit)によつて成立するものであるから、Tendenzen や、Typen によつて現はれ來るものでなければならない。然らば、社會事業に於ける傾向や類型は如何に解釋すべきか。

社會事業に現はれる傾向や類型は自然科學に於けるが如き同樣性や規則性ではないのであつて、それは概念に結晶沈澱させることはできない。歷史的に現はれ、かつ、進むところの人間の社會事業的行動は概念によつて捕捉するには餘りに複雜で多樣である。この複雜多樣にして、端倪すべからざる人間的の困窮や福祉(困窮といつても、それを輕減除去し人間の福祉を增進することに關するから、畢竟、社會事業の對象は福祉となる)を概念化することはできない。歷史科學は偶然に始終する人間的活動に關するけれども、社會事業はこの偶然を Wahrscheinlichkeit の統制の下に置き、これを傾向化し類型化する。それ故、社會事業は人間の歷史的行動に關するけれども、單に偶然であり、多樣多角

な捕捉すべからざるものより更に一進し、これを傾向化し類型化する。社會事業は人間の意志に關し、それの祕密を披開することに力めるけれども、その奥祕の實相は心情として感得し洞察せられるだけである。それ故、眞の社會事業的對象は心情として直觀しうるのみである。私の學としての社會事業は純粹歷史的なる心情社會事業と、經驗的因果的なる概念社會事業とを含む(嚴密な意味での Reselmächtigkeit として用ゐらるゝ學としの社會事業は定型社會事業である。これを廣義のものとして用ゐる場合には社會事業は心情社會事業と定型社會事業との二を含む)學としての社會事業は無論因果的のものではなく、たかゞ Stabilität と Typizität の上に成立する社會法則に基くものである。この社會法則は因果的なるものではなく、Tendenzen に基くものたるに過ぎない。それ故、社會事業では確實に繰り返へす困窮も福祉もあるのではなく、たゞ傾向として類型として繰り返へすものであるに過ぎない。こゝに社會事業の歷史的法則の意味がある。歷史なる概念と法則なる概念とは無論適合するものではないが、法則を傾向として類型として解するに於て、歷史的法則なるものは考へ得られざることではない。

社會事業では人類の意志によつて規制される傾向(dürch ein menschliches Wolln bedingsten Tendenzen)を研究するのであつて、それを傾向や類型として結晶する人間行動の範類(Typen menscllichen Handelns)に沈澱せしむるにある。心情はかくの如く類型化することが能きないから、これに對しては

感得、體驗、直觀を以て應ずる外はない。社會事業學は社會的法則卽ち類型によつて Einmaligkeit を驅逐し、それの Typizität を實現することを目的とする。社會事業の類型は少くも社會に於ける人間に生ぜし關係によつて現生するもので、その救助は社會に歸屬することによつて生ずる。客觀化する意志は類型にまで進む約束のものである。心情は捕捉することが能きないがそれを能きるだけ抱括的な類型に變化することによつて總體福祉が社會法則的なものとなる。個人的行動を繰り返へすものとし、能きるだけ包括的な類型に形成する努力によつて、社會事業は學として成立するにいたる。個人的な行動をくり返へすものとして設定しそれから類型が現はれ意志を傾向化することによつて、心情を客觀化することができる。この心情の客觀化は人間の inneren Welt から價値的要素を驅逐し、Wertfrei なものとすることによつて成立するのであるが、無論人間の內界より現實として價値を驅逐することは能きず、從つて、價値を除外することは能きない。併し、內界の客觀化を行はなければ、學の對象としての類型は竟に現はれて來ない。そこで、意志の客觀化する類型は方法論的原則(Methologische Prinzip)によるものであつて、事實的可能性によるものではないといふことになる。それ故、社會事業的思惟の特徵は方法論的原則によつて心情を類型に結晶することにあると言ふべきである。心情を組織的に類型化することによつて學としての社會事業が生れる。心情は愛と思慕との世界であるが、この體驗的な情景から法則を引き出すことはできない。心情社會事業は詩歌であり藝術であつて學とはならない。これによつて、學としての社會事業の對象は心情ではなく、類型であるといふことになる。たゞ、心情を類型に結晶するところに學が成立する。心情は一度かぎりのものであるから、これを方法論的原則によつて繰り返へすものとなし、wiederkehrenden typischen Merkmale によつて定型社會事業を起す。心情を類型として表徵として形成すれば、そこに科學的な類型なるものが得られるであらう。心情は價値的なるものであるから、社會事業の對象は無價値なることは能きないが、方法論的原則によつて普遍化すれば客觀的なものとすることができる。人間は歷史的なもので、價値を除外することは能きないから、心情のうちより價値を全く除くことはできない。併し、それを方法論的に客觀化し類型をつくることが能きるのであるから、學としての社會事業は心情社會事業の外に分立するといふ斷定を覆へすことはできない。社會事業的思惟は方法論的なもので、心情を類型に結晶させるもの、これが社會事業學の思惟となり對象となる。

二　直觀的方法

心情社會事業に對しては直觀的方法を以て涖む外はない。心情は自然科學の如く主觀を除き去ることによつて研究することはできない。自然科學では量的に對象を分析すれば宜いのであるから、直接に與へられたる知識の內容より主觀を除くことができる。かくして、客觀化せし知識が成立する。知

識は認識主觀よりその部分を抽象することによりて成立するにいたつたのであり、かくて、それはたゞ量を捕捉する客觀的なものとして存立するにいたつた。それ故、知識によつて質を捕捉することはできぬ。知識は客觀化の道具たるまでゝある。主觀を去つて量的な廢物として實在を顯示するものが一般的知識であるから、知識によつては直接的な存在としての內界の情景を知ることはできない。

心情は量によつて表示することはできないから、質によつて表示しなければならぬ。それは客觀によつて知識として捕捉することは能きないが、また、主觀によつてその情景をつくすことも能きない。それは主客兩觀末分の狀態による直接的な純粹な認識によつて知る外はない。そこで、たゞ直觀のみが心情を捉えうるものとなる。

直觀は直接的に與へられたる經驗を質の邊から捉へるから、それは唯一質的な主觀的な情景を模索し洞察する方法である。內的な實在は主觀と雖も內的經驗をつくすことができないから、それは具體的にありのまゝのものとして、體驗によつて知る外はない。然るに、體驗は主客兩觀を滅する本源狀態であるから、この本源現象を自然科學的に概念化し法則化して知ることはできない。量的なものは無論法則化することが能きるが、本源現象を量に換算することはできない。

社會事業にあつては、人間の困窮や福祉を取扱はなければならぬが、困窮や福祉は凡て歷史的なもの個別的なものとして現はれるから、これは具象に於て捕捉しなければならぬ。具象による困窮や福

祉は凡てありのまゝのもので、部分を抽象するようなものでもなければ、これを知識として表示するが如く、情意の脫出するようなものでもない。それ故、これを自然科學的に量によつて捉へることは全く無謀であり不可能である。同類の困窮や福祉は自然科學的方法を以て絕對に近接し捕捉することができない。それは、客觀も主觀も分裂しない本源狀態であるから、これを概念化することも、嚴密には類型化することもできない。同類の困窮と福祉とは最初には主觀によつて模索するが、次には、これを直接的經驗として感得する外はない。直接經驗は全く抽象を離れた具象であり、Subjektivität であり、Unmittelbaren である。認識主觀たる同類は直觀的な具象的な認識によつて知りうるのみ。同類の困窮や福祉は單に客觀的に部分抽出によつて表示されるだけでなく、それは同時に思惟するものであり、感得するものあり、欲求するものであり、行爲するものであり、更に、それ等の融合する渾一體でもある。

社會事業に於ても、概念的なるものは知識に分解し、量に換算することが能きるけれども、心情的なるものは分析をいれないから、知識に依ることはできず、また量に換算することもできない。それは知りうるものではなく、感じうるものである。それは客觀化しうるものではなく、意欲するものである。それは知識として表示されるものではなく、行動することに關するものである。從つて、それは概念的に取扱ふことは能きず、これを集團化することも全く不可能である。これ、私の力め頁、困

窮や福祉を歴史的なものとして取扱ひ、集團的救助を排斥する所以である。救助は歴史的なもので、因果概念ではない。救助は物に向はずして、人に向ふ。人間の救助は集團的なものとして部分を抽象し、これを概念にまとめることはできない。概念にまとめられた救助は集團的なものであるが、集團的救助は物に向ふもので、それは人間を取扱ふ所以ではない。こゝに於て、救助とし言はるべきものは、いづれも、歴史的のものとなり、これが救助の方法は具體的なもの、體驗的なもので、これを捕捉する方法としては直觀的なものであるといふことになる。心情社會事業に對しては唯一直觀的方法があるだけである。

量に對しては知識、質に對しては直觀である。これに對し、量による概念社會事業及定型社會事業と、質による心情社會事業とが分れる。直觀的な心的科學としての社會事業學の究竟對象は生命である。生命は無限の結合により成立するが、無論、無限の結合は生命ではない。生命は全一の姿に名付けられるものであるから、結合的觀念からは生命は生れぬ。それ故、主觀と客觀とを分離し、無限の要素に分つ職能と使命とを有つ知識から、如何に結合すればとて全的な生命は現はれない。要素にはぐし、また、結合に轉ずる刹那、生命は死んでしまふ。知識は生命を物化してこれを殺す。知識に對するものは物であつて、生命ではない。物を取扱ふ知識を用ゐて生命を闡明することは無意味である。物的方法によつて、直觀であり具象である生命をほぐすことはできぬ。自然科學的方法によつて實在

に接近し生命を捕捉することはできぬ。自然科學的な量による研究方法は全體を部分にほぐし、それを無内容なものとして生命を殺すから、それは直接的認識の對象たる體驗に接近することはできぬ。内容の充實と、それの空虚とが社會事業學と自然科學とを對峙させる。自然科學に於ては物的研究としての lebose Natur があり、社會事業學に於ては生命研究としての lebendige Natur がある。

全體や生命は ans haulich に現はれる。我の困窮も福祉も汝の困窮も福祉も、内的な全的なもので、全一としてのみ存しうる。これを概念により、物によつて、破碎するところに、純粋社會事業の情景が失はれる。純粋社會事業は心情的のものである。我の困窮や福祉は汝の困窮や福祉ではない。汝の困窮や福祉も亦我には何の關りはない。我の思惟や感情や意欲は我もので、これが全的なものとして、不可分の生命をつくり、自分であるとする獨特な情景を生ずる。汝も亦その通りである。かくの如き具象的な全的な不可分なものでなければ、心情社會事業の對象たることはできない。

すべて經驗は經驗せらるゝ客觀(Erfahrungsobjekte)と經驗する主觀(erfahrende Subjekt)との不可分なる統一的結合體 zusammenhänge)であるが、自然科學は統一的結合體のうちから主觀を除き、客觀の本質並に交互的關係を規定することを目的とする。それ故、自然科學的認識方法は間接的で、統一的結合體としてあるありのまゝのものから、抽象概念的なるものとして客觀を抽出する方法を採る。結合體そのものは unmittelbaren Wirklichkeit である。統一的結合體を對象とする心情社會事業は主觀

的要因と客觀的要因とを超越して、兩者を彼岸に結合する。それは直接的實在を對象とするものであるから、心情社會事業、乃至、生命社會事業の認識方法は自然科學的認識方法と異なり、直接的で具象的實在を對象とするものである。心情社會事業にあつては抽象的補助概念(abstrakter Hilfsbegriffe)を用ゐて具象的實在を破碎することなく、全一としてこれを直觀する主義をとる。それで、心情社會事業は具象的で、anschauliche であると言へる。心情社會事業に於ては、自然科學たる物理學や生理學などのように、表徵の組織(ein System von Zeichen)によつて實在の假象を作り出すのではなく、その感覺は實在の模寫であるのではなく、それは何づれにしても、直接的な具象的なありのまゝの實在を對象とするものである。心情とは具象的なる所與として(als das gegebene)ありのまゝに存在する實在と同心一體なるものである。それは概念的形成によつて變形され、實在とは似てもつかなくなつたものを取扱ふのではなく、具象的實在には感覺も思惟も感情も融合して一體をなす。それは、一つに直接的な經驗的內容である。直接的經驗內容は體驗そのものであるが、これが認識作用を生ずるにいたり、分れて主觀と客觀との二となり、物と我とが生ずる。konkret Gegebene は全一としての體驗であり、begrifflichen Gedachten としての抽象的な物はそれより分化したものである。

概念社會事業は概念的な抽象物であり、作爲したものであるが、倫理感覺の豐かなる人間的な生命社會事業や心情社會事業の本質は概念的に接近しがたい。それ故、心情社會事業の研究方法は體驗的

であり、主客の不可分に結合する統一結合體を捕捉するに堪へられる直觀的方法であると言ふことになる。直觀的方法によつて、直接的實在を捕捉するのでなければ社會事業の對象たる困窮や福祉の眞の姿を認めることはできぬ。困窮や福祉の究極の姿は量に關するものではなく、質に關するものでなければならぬ。量に關するものは、自然科學によつて把握することができるけれども、質の範圍ではそれは全く無力であり無能である。質的認識は心情社會事業の認識である。それは體驗の eigenen Wissen であり、それの固有なる存在も Taten もその中に求むることができる。それは概念社會事業に於けるが如き表徵により量によつて表示される存在ではなく、symbolfreie und quantitätslose Wissen である。社會事業の求むべき究竟地の認識はかくして得られる。その究竟に於て發見するところのものは認識主觀と認識客觀との融合する渾一體である。概念社會事業は客觀的であり、慈善事業は主觀的である。客觀的と主觀的とは各事物の一側面を認めうべきのみで、眞の Wissen は主觀と客觀との融合によつて生ずる生命社會事業若くは心情社會事業によつて達しうべきのみ。主觀客觀融合の認識は直接的認識であつて、質的認識であるが、更に、精密には、質的認識と量的認識とを併合したものである。それは同時に量であり質であつて、全體を抱擁するところの全的なるものである。質的認識は全一のうちより量を抽出排除して得られたものであり、量的認識は全一のうちより質を抽出除外して得られるものである。因果的な數量的な認識は實在を血のない圖式に仕上げるもので、それは空虛な

無内容な量的認識であるに過ぎない。物理學や化學の如き量的科學は單に計算の道具に過ぎないもので、それは質的實在の姿を見失つてゐる。

概念社會事業は集團を基準とする量的なものであり、また、それは量的な研究方法をとりうるが、社會事業の純眞なるものは（救助及福祉は凡て歴史的概念なるが故に）體驗的であり心情的であるから、量的研究方法によつてこれを blutoses Schema として取扱ふことはできぬ。類型により、更に、これを體驗として取披ふところに究極的な生命社會事業把握の方法がある。心情なるものは質的なもの、一層精確には量と質との融合する究竟地にあるものであるから、兩者を超越する直觀の世界に於てこれを感得し洞察しなければならぬ。これ質的認識に基く心情社會事業や生命社會事業の認識方法が直觀的となる所以である。集團といひ、集團的困窮といひ、抽象的社會事業と云ひ、量的救助といふような數量的な計算にこれに基く概念社會事業が純眞なる究極なる社會事業にあらざる所以のものは、人間が量的認識のみに集中するものでなく、同情も反情も愛も憎惡も善も惡も有たなければならぬ存在物であるからである。こゝに於て、概念社會事業と心情社會事業とが對立する。

かくて、心情社會事業と生命社會事業との研究方法は直觀的であるといふことが結言せられる。ここに、社會事業は直觀的研究方法によつてその究竟的存在を分解せんとする方案に達する。

三　心理學的方法

社會事業の研究は物理學や化學のように客觀的因果的方法を用ゐることは能きず、それは何づれにしても心理的解釋に進まなければならない。すなはち、社會事業は研究方法として心理學の助けを借らなければならない。社會事業を正しく解釋し建設せんとするならば必ず心理學に出入しなければならぬであらう。

心理的に接近するをうる對象は客觀的因果的に接近することはできない。一切のものは自然であるとすれば、自然も精神も社會も悉く自然であり自然に統一せられる。けれども、統一されたる自然の形相は多種多樣であるから、異つた形相に對し同一の方法を以て接近することは能きぬであらう。外的な客觀的な比較的持續固定する靜的な自然科學的現象を内的な主觀的な絶えず流動する動的な精神現象と同一に取扱ふことはできぬ。自然科學的現象に對しては、外的經驗や客觀的統制を以て向ひうるけれども、精神現象に對しては内省や體驗によらなければならぬ。この二の現象を取扱ふ方法は何づれにしても異ふものとして現はれるであらう。社會事業を學として成立せしむるには、(一)社會事業の獨特な對象又は獨特な Standpunktes を確定すること、(二)社會事業現象の法則を設定すること、(三)獨特の研究方法を發見することの三の條件を充足しなければならぬ。然らば、社會事業を學として確定

するためには、その固有な獨特な研究方法を發見し、認識の形式を定めなければならぬ。諸科學の研究方法としては、總ての科學を通じて同一の方法を用ゆべきであるとするものがあるが、研究方法は科學の對象の異なるによつて異なる方法を用ゐなければならぬから、社會事業はそれ自づから獨特にして固有の研究方法を有つであらう。リール氏は方法論的一元主義をとり、自然科學と精神科學とに共通な研究方法があることを主張する。認識の統一を實現するには方法の一樣なことを要するが、この一樣現象に統一を與ふる要求をもつ。認識の一樣なことは意識の一樣なることを表示し、精神は多樣な方法によつて多種多樣の對象を統一し、雜多な立場をまとめてeinem Ganzen とするといふ。けれども、同一の方法を以て、總ての對象を捕捉することの能きないことは論爭の餘地のないことで、對象の異ふことによつて、又研究方法も異はなければならぬであらう。社會事業は自然科學の如く客觀的法則的に把握することはできず、直觀によつて捕捉する外なかるべからざるべく、また、心理的方法にも依存するであらう。

自然科學者は外界に對し因果的に把握することによつて概念や法則を確定することができるけれども、社會事業學者は同じ研究方法を用ゐてその對象を露出し、概念や法則を結晶させることはできない。自然科學的現象と雖も嚴密には繰り返へさないものであるけれども、大體齊一なもので、變化の中に統一を求めることが容易であるが、社會事業現象の如き雜多なもの、變化するもの、無限に結合する

もの、更に、絶えざる進動と創造とをなす現象にあつては、これを自然科學的方法によつて固定することが能きるとは考へることはできない。自然科學に於ては、實驗をなし、材料を調整し統制することができるけれども、社會事業に於てこれを企圖することは無論できない。かくの如く、研究方法はその對象によつて異はなければならぬから、自然科學の對象と異ふものであるところの社會事業の研究に對し、自然科學的方法を襲用することの能きないのは明白であると言はなくてはならぬ。

自然科學にあつては、Objektivitätを標準として對象を把握する。何づれの科學に對しても客觀性を維持することが必要であるとするも、これを一切の科學の共通な研究方法とすることはできぬ。社會事業は體驗であり、心理現象であり、それに加へて社會現象であるから、自然科學よりも複雜な多樣な方法を以て對象を固定把握しなければならない。然らざれば、自然現象としての社會事業の部分だけの把握はできるけれども、體驗や生命は竟に逸脱してその姿を見失つて了ふ。社會事業は歸納法と共に演繹法によつて把握しなければならず、心理的方法にも、歷史的方法にも、直觀的方法にも依らなければならない。かくて、初めて、自然科學の如く觀察と實驗と分類と概括とに終るものより以上の複雜多樣な現象を固定把握することができる。社會事業には概念社會事業の如く外的なものもありこれに對しては自然科學的に一般的知識によつて把握することができるけれども、心情社會事業の如く體驗的なものに對しては同一の方法を襲用することができない。人間の困窮や福祉や救助は凡て歷

史的觀念であるから、たか〳〵定型によつて把握する外はない。自然科學的方法と社會事業の研究方法とは明かに異つてゐる。

社會事業の對象は體驗であり、心情であるから、それは心理的なるものであり、絶えざる創造によつて成り立つものである。體驗や心情を對象として研究する方法は何づれにしても心理的なものでなければならぬ。それに社會事業の對象は社會學的のものである。社會事業は社會學的な總體福祉を對象とする。この社會學的な總體福祉はそれ自づから定型として客觀化する意志であるところのものである。社會事業は個人の福祉に關するものではなく、個人の歸屬する社會の福祉に關する。個人の福祉は社會の福祉に關係するものとしてのみ、社會事業に於て意味をもつ。單なる個人は社會事業には何の關係もない。然らば社會事業の對象は再び社會學的のものとなるが、社會そのものは psyclische Gemeinschaft であるから、社會事業は社會的過程を探求しなければならず、究極それは心理學的方法によらなければならぬ。個人の動作が一般に關係するにいたれば、その動作は社會的のものと言はれる。すなはち、個人の動作が他の個人に關係をもち、Beziehung として表示さるゝにいたれば、初めて、社會的なものとなる。それ故、社會的過程は二人若くはそれ以上の個人間に關係をもつことによつて生ずる現象である。社會そのものは eine Gesamtheit der Beziehungen である。社會的過程は objektive Materie & Substanzではなく、substanzisierte psychische Relationen であり、eine Totalität der menschlichen

Beziehungen である。この關係は無論心理的なるものである。關係は個人意識の心理的內容をなすのみならず、それは外的に存在するものとしてそれを强制する。社會現象は個人の外に、個人の中に存在し、外的存在としては總ての個人のうちに同時に存在するのであつて、個人の外にあるのではない。それ故、Beziehungen は心理的なものであるが、同時に個人を强制する外的な存在物として存立する。關係が個人の外に在り、それに强制を加へうるのは、それが個人を超越し、外的形態をもち、als etwas Objektive として存在するからである。

關係形象は個人の外にも、それと共に、又、それを越えて存在するのではなく、個人の意識のうちに存在する。それは最初個人の lebendige Beziehungen であつたものであるが、それが型式となり外的存在物となつたのである。社會的過程は個人間の關係であつて心理的事實であるが、これから外的なものとして制度が發生する。制度は心理的な所產であるけれども、それは個人の外に立ち、個人を制遏する。制度は精神の所產であるが、それが客觀化して實體化し、非人格的性質を帶ぶれば外的に存在し、社會を構成する個人を强制するにいたる。社會は個人の外にある。文化價値は個人の心理的なる所產であるが、これが外的なものとして强制的作用をもつにいたるは以上の過程による。ジンメル氏の Konkret gewordene Abstruktion der Gruppenfunktion 又は substanz geworne Sozialfunkionen なるものは外的に存在し强制作用を加ふるにいたりし社會過程の謂ひである。かくて社會は客觀化せる關

係の總計といふことになる。ヴイーゼ氏は制度を以て ein Komplex von menschlichen Beziehungsformen, die für längere Dauer bestimmt sind und den zweck haben, den zusammenhung von Menschen und Menschengruppen im einem Gebilde im Interesse oder Festigung dieses Gebildes aufrecht zu erhatten と言つてゐる。社會現象は個人の外にあり、同時に個人の中にあるのであつて、總ての個人意識に存在するといふのがその外的に存在する所以となる。それ故、凡て社會關係は心理的なものであるといふことになる。併し、それは主觀的過程に消解さるゝのではなく、客觀的な存在として結晶し、外的なものとして强制作用を及ぼす。個人の外に在る場合、それは客觀化して外的存在に轉成せられる。外的存在となりし社會過程は objektivierte und Konkret gewordeue menschliche Beziehung である。科學、法律、藝術及宗教といふが如き制度は個人の意識的若くは無意識的に外的なものとして生產し、個人を超越するものとして實體化したものである。客觀化する制度は具象化し客觀化して外物となつた個人關係の所產である。制度は外的な客觀的なものとして在るけれども、その本質を了解するには、心理的方法に依らなければならぬ。社會意識は超個人的でそれ自身獨立に存在するものであり、たゞ心理的方法によつて研究せらるべきものである。社會學の研究方法としては主觀的のものでなけらねばならず、歷史的社會的過程は精神に依繫するものであるから、心理的方法を以て探究を進めなければならぬ。社會過程は因果的に探明することはできず、目的論的に接近しなければならぬ。精神的文化的現象にあつては自然科學的方法を以て進むことは全く不可能である。自然科學的現象は無論因果的に說明せられるけれども、歷史的社會的現象はそれを生產せし精神によつて說明する外はない。この意味に於て、一元的研究方法をとるの誤りであることは明白である。歷史的社會的現象は自然科學的方法によつては說明することはできぬ。社會は客觀的に眺むれば心的交互作用の實體化したものであり、具象的な制度に物化したものに外ならない。それ故、客觀化せし社會は意識的に了解する外、眞の理解の途なく、社會を生產せし精神を除外してはそれを說明することはできない。ブーグレ氏は「心理的生活なくしては社會生活はない」と言つてゐるが、心理學を度外して社會學を說明する方法はないと言つて宜い。soziale Mentalität はたゞ心理的方法を以て分解闡明する外なく、制度の研究はたゞその外的な表徵に關するばかりでなく、その本質に突入しなければならぬ。社會は器械的な物的な所產ではなく、人間の Mit-und Wechselwirkung であり、それは客觀化して制度の形をとるけれども、心理生活がその基本をなすものである。それ故、社會學の研究は外的因果的なる方法を用ゐることができず、必ず心理的方法に依らなければならぬこゝになる。從つて、社會的なる社會事業の研究方法も亦心理的でなければならぬ。

一切の經驗を認識するには自然科學的なる一方的方法を以てつくすことはできぬ。器械學や數學の方法を以て人間の認識を悉く露出することはできない。人間のあらゆる認識は器械的數學的に露出す

ると共に、心理學的に顯出しなければならぬ。器械的數學的型式の認識と心理學的型式の認識とは對立し、兩者によつて初めて人間的經驗を捕捉するにいたる。それ故、社會學的なる社會事業は器械的數學的なる一方的方法によつてその形相を露出することはできない。原子を捕捉するが如き方法を以てしては社會事業を分析することはできない。器械と意識とは全く別の範類に屬し、數學や物理學と心理學や社會事業學とは表裏關係にある。それ故、心理學的な社會事業及びその現象を器械化して、數學によつて表示することは全く不法であると言はなければならない。社會事業は人間の意識に關する心理學的なるものであるから、それは心理學に依存し、數學や物理學には關係がないと思はなくてはならぬ。意識は因果說や數量說による自然科學に關係のないもので、それは物理化學的乃至生理的現象を單に外的に記述するに過ぎないものと全然異つてゐる。それ故、意識に關する社會事業に對しては、外的に因果的に、量によつて、數學的に記述するに過ぎない自然科學的方法を以てしては如何ともする能はざるものであるといふ斷定に達する外はなからう。意識はこれを量によつて外的に捕捉することは能きないから、別の方法によつてそれに接近しなければならぬ。別の方法卽心理學的なるものである。意識の分析は心理學によらなければならぬから、意識現象に關し物理化學に關せざる社會事業は又心理學によらなければならぬといふ斷定に達する。意識を以て動物と共通なものとすれば、それは自然の斷片となるから、自然科學の對象となり、外的に量的に記述することが能きるけれども、

これを Ziele setzende Bewustsein とすれば、器械的な盲目的な勢力によつて支配せられる自然科學によつてその形相を捉へることはできない。人間の意識は單に自然としての意識（動物と共通なる）より、文化として、乃至、文化的產物としての意識に關するから、これを自然科學的に取扱ふことは何づれにしても失當である。意識は一つには外的量的に取扱ふことができるけれども、他では、それは心理的に研究せられる。かくの如く、自然科學的研究方法としては外的な數學的方法と心理的自然研究方法とがあるけれども、これが一步を進めて Menschenpsychologischen な研究方法としての固有な心理學的方法に依らなければ社會事業の正體を露出することはできない。

社會事業は社會の物質的法則を對象とするよりも、社會の Mentalität に關するから、その研究方法としては自然科學的なることができず、必ず心理學的でなければならぬことゝなる。社會事業の對象は心理學的社會學的であつて、自然科學的ではない。こゝに社會事業の固有な研究方法が現はれる。社會事業は心理學的手段を用ゐて、その內祕を披開し、その本質を露出しなければならぬ。

社會事業の心理的分析は內省法によつて遂行することができる。心理學的な內省法は社會事業の分析を進めうる方法である。それによつて社會事業對象を露出することができる。內省によつて得るものを他の同類と比較し、これによつて同類の社會的な困窮や福祉の何であるやを如實に指呼し知得する。他のものも亦同樣な方法によつて自他互に明かにし合ふ。かくの如くして、社會事業の對象たる

社會的なる困窮及福祉の形相及び內實をつくすことができる。極度の利己が存するところには絕對に社會事業の相助若くは相互保險が現はれない。かゝる場合には、社會的なる困窮及福祉に對應する社會事業的の動作は現はれない。相互的關係が生じ、それが相互扶助の意義をもつに至り、初めて、社會事業が出現するが、實は如何なる場合にも絕對的に社會事業的動作の缺けて居るものはない。人間は絕對に利己のみによつて居るのではないから、程度の差こそあれ、利他があり、從つて、社會事業的動作は遍在である。それ故、人間社會と社會事業的動作とは同大であると見うるであらう。

同類の認識は自己先づ實在し、同類の存在を假定するから、內省は社會心理學的に進行すると言はなければならぬ。社會に於ける個人は互に牽引し反撥して居り、各自に感情を動かし、意志をはたらかせ、或は愛し、或は憎むである。こゝに、社會事業的動作が間斷なく生滅起伏しつゝある。社會事業的動作なるものは、孤島に於けるロビンソン、クルーソーの境涯では全く起りえないものである。社會事業は個人的現象にあらず、社會的現象である。その困窮も、その福祉も、個人的なるものにあらずして、社會的なるものである。社會事業の對象はそれ自づから客觀化する意志であるところの「社會的なるもの」に基く總體困窮若くは福祉である。社會的なるものといふ義は無論「間の關係」によるものである。かくて、社會事業の對象はどこまでも個人的なるものにあらずして、「社會的なるもの」として出現し進行する。然るに、この「社會的なるもの」は如何にしても個人的に存在することを

得ないものである。個人の存在と言つても、その認識は同類の認識を前提としなくてはならぬ。他の同類なくしては自己意識も生ずるにいたらない。社會に於ける一切の個人は他の個人の存在をまち、その存在を假定することによつて、初めて自己の存在を首肯しうる。他の個人の認識なくしては、如何にしても、所謂自覺なる個人なるものは發生しない。種的個人を前提として、個々人が存在し初めて。すなはち、個人は種の代表者としての意義をもつに過ぎぬ。それ故、自己意識の認識は社會心理學的事象であると言ふことになる。

個人の「間の關係」によつて社會的なるものとなるのであるから、社會事業は間の關係によらなければならぬ。間の關係に於て困窮と福祉とを觀、個人的困窮と個人的福祉の觀念から離脫しなければならぬ。すなはち、社會の困窮及社會の福祉を企圖するものが社會事業の職分であつて、個人の困窮及福祉には一と先づ何の關係もないのである。社會事業にあつては、個人は社會に歸屬する意味に於て救助せられ關係せしめらるゝに過ぎない。間の關係によつて成立する社會事業はそれに附帶する物理的なる地理的なる生物的なる環境に主として關係のあるのではなく、間の關係たる社會を構成する個人の心理に關係を有するのみ。それ故、社會事業に於ける間の關係たる困窮や福祉は凡て社會を構成する救助意識や福利觀念のうちに求められ、それによつて解決せられなければならない。これ、社會事業の研究方法が心理的なものとなつて現はれる所以である。內省によつて分析を進める社會事業

の研究方法は自然科學の如く外的な間接的のものではあり得ない。それは內的な直接的なものである。社會的なる困窮や福祉は內的な直接的なものとして把握せられ、これを反射して外的な抽象的な物として把握するを餘儀なくさるゝ自然科學よりも實在それ自體に接近しうる性質のものである。被救助者の心理はそのまゝ內省によつて救助者の心理にうつり、實在によつて、完全に他を把握し理解することゝなる。こゝに、社會事業の研究方法の心理的なるより來る如實な直接的なる困窮及福祉の把握がある。

これによつて、社會事業の研究方法は自然科學的のものでなく、內的な直接的な心理的のものであるといふことが斷定せられるであらう。

四　歷史的方法

救助は歷史的觀念であつて、因果的觀念ではない。人類の困窮は一度限りのものであり、個々人に對し獨特のものであるから、これに對し同一の方法を以て救助を遂行することは能きぬ。同一の方法を以て救助するもの卽概念社會事業（全體を對象とする）及び社會政策（階級を對象とする）であるが、概念社會事業と社會政策との集團主義により、これを集團的困窮として救助するものは、物として救助するので、人間に對して救助するものではない。こゝに於て、人間に對する救助の觀念となつて現

はれるが、これ卽ち歷史的な社會事業である。

個人の惱みは獨特のものであるが、この獨特のものは卽ち無限の結合體であり、更に、全一である。無限の結合は complex whole として存在するが、これに參加する要素は無限であり、その結合樣式も亦無限に異なるから、一人以上の困窮が再び同じものとして他人に繰り返へさるゝことはない。なほ、それは whole としてあるのであるから、他にそれと同一なものを求むることは不可能である。然るに、集團的救助は無限に繰り返へすものといふ假定の上に集團的救助方法を設定し、概念社會事業だの社會政策だのといふものを提起してゐる。併し、これは便宜上實在を假象として集團的に取扱ふまでゝ實際かくの如き集團的な幽靈は存在しない。それ故、眞に人間的な困窮を取扱ふものとしては歷史的方法あるのみといふことになる。

これによつて、概念社會事業の外に、個人社會事業や、體驗社會事業が分岐することが解る。救助方法としては(一)體驗的救助方法、(二)個人的救助方法、(三)集團的救助方法、(四)概念的救助方法の四に區分しうるが、體驗的救助方法及び個人的救助方法は歷史的方法であり、集團的救助方法は因果的方法に依り、統合的救助方法は歷史的なるものと因果的なるものとの合流である。但し、統合的救助は竟に歷史的たるべきものである。統合形態は後に分析闡明するが如くそれには二つの形式がある。集團的個別的なるものと、個別的集團的なるものとがそれである。「個別的集團的形態」と「集團的個別的形

態」とは、いづれも統合形態に含まるゝが、兩者は各別なるものとして區別せらるべきである。「集團的個別的形態」は機能的なる集團と形態的なる個別とが結合せしもので、形態が主であり、機能が從である。それは、個別的意義をいるゝ集團事業であり、更に、變裝したる集團事業である。それは個別的意義をいれ、歴史的方法によつて救助を遂行するものとするも、それは畢竟名目上のものに過ぎない。集團として因果的に救助するもの卽ち集團的個別的形態である。これに對し、個別的集團的形態にあつては、個別的機能が主で、これに形態的な集團が附加せらるゝに過ぎないから、集團を通じて救助はするが、その救助方法はあくまで個別本位であり、歴史的である。そこで、統合的救助と言はるべきものは、「集團的個別的」と「個別的集團的」との二を含むけれども、純眞なる統合形態は竟に個別的集團的なるものだと言ふことになる。かくて、統合的救助は歴史的方法に投歸する。

そこで、因果的なる集團的救助と、歴史的なる體驗的救助、個人的救助、及び統合的救助が對立するにいたる。若し、救助を歴史的なるものとして設定せんとすれば、因果的なる集團的救助を絶廢し、體驗的か個人的か統合的かに救助を歸入せしめなければならぬが、この事蓋し可能なりや。

困窮は現時の形相としては集團的なるものとして出現するから、集團的困窮を取扱ふことは回避することができぬ。それ故、もし、個別的な歴史的方法に於て、この難點を克服することが能きなければ、救助を凡て歴史的なものに還元することが難づかしい。併し、これは統合形態によつて克服しう

る。統合形態は個別的集團的であるから、個別的歴史的でありながら集團的困窮を取扱ふことができる形式である。この統合形態の個別的でありながら、集團的であることをうる特質によつて、集團的救助は絶廢に歸せしめられる。個人的困窮は慈善事業時代のものであり、集團的困窮は社會事業若くは社會政策時代のものであるから、集團的困窮の瀕發する現時に於ては、何等かそれを個別的なものに還元する方法が發見せられなければ、一切の救助は因果的なものになる危險がある。然るに、統合形態の發見によつて、個別的にてありながら、集團的なるをうるに至つたから、個別形態以外、別に集團形態を豫想し、これに依賴する必要なきにいたつた。こゝに於て、集團形態と集團的救助方法とは絶廢に歸せしめられる。

かくの如き論理を通じて集團的救助方法を癈止し、個別的なる體驗的救助方法と個人的救助方法と統合的救助方法とを殘すが、これ何づれも歴史的なる救助方法に外ならぬ。かくて、一切の救助は歴史的なるものとなり、救助は因果的觀念にあらずして、歴史的觀念であるいふことになる。

社會事業の公企業は集團的救助方法に依り、私的社會事業は個別的救助方法に依る。動的な變化をいれうる任意的社會事業(freier Wohlfahrtspflege)は集團的困窮に當ることはできぬ。そこで、社會事業の公企業化、社會法制化といふような思想となつて現はれるが、これに對し、救助を凡て個別化する思潮が現はれてくる。救助の法制化と、その任意化との二途が協調せずして別々にその目指す方向

へ猛進して居るのが現時であるが、救助觀念明白となり、社會事業の研究方法が一層明かに分析闡明さるゝにいたれば、この二の途は一の途に歸着するであらう。若し、社會事業の研究方法が歴史的なものとなり、救助が歴史的なものに還元せらるゝことが可能たるにいたれば救助の公企業化の意味は變化するであらう。現時に於ては公企業化は集團化を意味し、概念社會事業や、社會法制や、社會政策を指示するけれども、私の如く救助形態を一切歴史的なるものとなすに於ては、それは總て統合形態に歸入するといふ思想となつて現はれよう。

そこで、一度び、極端に公企業化せし社會事業や社會政策は再び任意的意味をいれ、特志家本位のものとなり個別的のものとなり、歴史的のものとなつて、救助を物の世界より人間の世界へ移すであらう。個別化主義により院内救助は小院舍となり、小舍となり、分舍となり、更に、家庭となつて、個別化の方向をとりつゝある。かくて、家庭委托といふことも起つてきた。家庭委托は看護をなし、適當なる宿舍を供給するために固有の家庭以外の他の家庭で一時的若くは永久的保護を加ふることであるが、これによつて兒童は個別的な取扱をうくることが能きるようになる。院舍による保護は集團的であり、家庭委托制は個別的である。

社會事業の進化に於て、集團事業は慈善事業體や驗社會事業よりも高級な階段にあるものと解せられるけれども、寧ろ、その逆が正しい。集團的救助は集團的困窮に對して餘儀なく現はれたまでゝ、

個別的集團的形態の出現により、それは又再び個別化することが可能となつた。すなはち、集團的困窮を個別的に取扱ふ方法が發見せられ、集團的困窮を歴史的なものとして救助することが可能となつたのである。かくて、概念社會事業や社會法制や社會政策が個別的集團的形態によつて歴史的なものとなり、集團的救助方法も亦統合形態によつて歴史的なものとなつた。一切の社會事業及その諸形態、その救助方法は、擧げて個別的歴史的なものに歸へり、社會事業研究方法も亦從つて歴史的なものに轉化する。こゝに於て、社會事業に歴史的研究方法が導入せられる。

然らば、歴史的對象たるが如き心情社會事業に於ける法則なるものは可能なりや。社會事業の研究方法を以て歴史的であるとすれば、「歴史」といふが如き個別觀念と、「法則」といふが如き抽象的觀念との結合は果して可能であらうか。歴史は一度かぎりであるが、法則は無論繰り返へすものである。然らば、心情社會事業の如き絶えず創造し流動する一度かぎりの現象を法則に結晶沈澱することができるであらうか。心情社會事業はこれを概念化する刹那消滅するのではなからうか。

心情社會事業といふが如きものは歴史的法則とは類緣を異にするものと考へられる。歴史的社會事業(心情社會事業)は法則にまとめ得ざるものと、また、これを法則として取扱ひ、學問の對象とするものとの二に分れるであらう。

心情社會事業は偶然と創造とを固有の本質とするが故に繰り返へすといふことはない。體驗社會事

業や個人的社會事業(慈善事業)は元來繰り返へさない「全一」とか「無限の結合」とかといふことを對象とする。私の社會事業の一半は繰り返へさない本源體に關するもので、法則にまとめることが能きず、從つて、學の對象たり得ないものである。かくの如き本源體の研究をなす部分は直觀的社會事業と名付くる部門にあたり、繰り返へし法則となりうる部分は概念社會事業の部分にあたり、直觀社會事業と概念社會事業との中間に來るものは歷史的法則より成る定型(Typen)に當る社會事業の部門である。よつて、私の社會事業學は、(一)體驗社會事業(本源體による)、(二)歷史社會事業、(三)定型社會事業の三部門より成る。私の社會事業はこの部門を並せ取扱ふもので、これまで社會事業範圍として見たものよりも廣く且つ分岐してゐる。

ヘーゲルは自然は繰り返へすけれども、歷史は絕えて繰り返へさないといふ。この斷定は今に於ても破ることはできぬ。ジンメル氏は「歷史と呼ぶ現象に深く沈潛すれば、その個性は益々顯著となり、人格の全體的性質を含む幽玄なる點に達する」と言ひ、歷史は Lehre von der Vorherschat des Individuen und Singulären であるといつてゐる。ジンメル氏は歷史はその働きの多樣なるために、一義的關係を設定することはできぬとするが、歷史のうちに法則を織り込む刹那歷史たるべき本源性は死んで了ふ。歷史的法則といふが如き觀念は誤つてゐる。歷史は豫定や豫想や豫斷をいれ得るものではない。歷史は一度かぎりのもの、單獨なるものでなければならぬ。それは人格的自由と偶然とに依存するもの

で、Spontaneität を本性とするものである。人間の自由や意志や體驗を法則に固定することはできぬ。それを法則化すれば最早自由でなくなり、創造でも意志でも體驗でもなくなる。人間そのものを法則によつて固定するといふ考案が既に過誤に陷つてゐる。人格は freie zwecksetzende Wille に基くから、それは創造によつて變化する端倪すべからざるものである。人格を法則化することはできない。ウキンデルバンド氏の如く das Unfasbare der menschlichen Persönlichkeit ersheint von unserem Bewustsein als das Gefühle der Ursuchlosigkeit unseres Wesens, das heist der individuellen Freiheit といふことによつて法則に對する法則化しない無原因といふ本性が呈露し來る。それは絕對的に自由であり偶然であるが故に、一義的に法則化することが能きないのである。人格は非合理的のもので、これを合理化することはできない。それは一見無原因で、絕對的に自由であり、絕えざる創造であり、歷史的法則などゝいふ觀念とは類緣のないものである。それは一見偶然によつて支配せられて居る。歷史は偶然であり、それは豫測することもできぬような非合理性のものである。偶然なものはこれを明瞭にしこれを結合して概念化することの能きるものでなく、これを概念によつて表示する刹那、人間の非合理も自由も創造も偶然も消えて了ふ。それは絕えざる新結合であり新構成である。

體驗社會事業は本源體としての歷史によるものであり、それは全一なものとして絕えず創造し、絕えず新結合體を構成し、自由で非合理で偶然で端倪することができないものである。こゝに、眞の人

間性があり、人格がある。それは乾固し物化せし生命たる概念や法則を以て測定することのできぬものである。それ故、心情社會事業の研究方法を自然科學的なものとなし、これを量化することは絶對にできない。それは偶然と自由と非合理とをありのまゝに補捉し洞察し體驗することによつてその眞景をつくすのみである。それ故、私は社會事業に於ける女性の本質を重視する。男子の本性たる概念的なる邊よりは心情社會事業や體驗社會事業は接近することができないが、女性の直觀的なる邊より初めてそれに接近しそれを理解しうる。

この部門の社會事業は本源的意義に於ける歴史的なるものであつて、これが體驗社會事業の部門に當る。

併し、無原因な偶然的な非合理な歴史はこれを經驗的に見れば幾多の繰り返へしを發見する。經驗的な具象的な規則性といふことは否定することはできぬ。結婚率出產率死亡率といふような數字を以て表示しうる統計現象はその規則性を表示するものでなくてはならぬ。それ等の社會現象は繰り返へすところの同樣なる道程であつて、法則化することを示す。具體的規則性に對し、一般的な抽象的な關係に於ける規則性を設定することができるがこれは理念的(idealen)なもの(idealen oder abstrukten Regelmäsigkeit)である。具象的な法則は何人も日常經驗するところのもので、拒むことができないとして、理念的法則を確定することができるか。規則とはこゝに因果關係に於て言つて居るのではなく、

必然性は單に憶說として取扱つて居るに過ぎない。それ故、一定の條件があれば、一定の結果(Erfoog)があるといふに過ぎない。この一定の條件による一定の結果をつなぐものは單に經驗的に繼續するものとしての經驗的法則に止まる。これはたゞ繰り返へすことを經驗するといふだけでその間に因果的關係の進入なく、從つて、それは理念的法則を意味するのではない。理念的な歴史的法則があるかどうか。たゞ、我々は繰り返へす歴史的現象を見るのみ。こゝに經驗的法則が設定せられる。歴史的法則といふも單にかゝる經驗的のもので、理念的のものではない。理念的法則を設定することは困難であらう。そのような抽象的な Regelmäsigkeit があるかどうか。これは後に分解するとして、兎に角、經驗的には歴史的法則なるものを設定することができる。この經驗的な歴史的法則に對し歴史的社會事業なる一部門が開拓される。

歴史的社會事業は(理念によつてその法則を研究することが能きるけれども)單に經驗的に具象的な法則を定める。歴史でつかむところのものは(Geschenzuuammenhang であり得ないから、いつでも isolierten Reihen としての Teilgebiete を掴む。この範圍の系列を捉へる歴史はこれを繰り返へすところの同一なものとしてつかみ、これを Klasse として取扱ふ。歴史に於ける繰り返へす系列は人間の自由に任意に創造する有心故造のものであり、實在として體驗としての ungeordete Mannigfaltigkeit の中より自分の好むものを任意に取り出しこれを把握する。そして、これを選擇し、取捨して變形する。かく

て生じたのものが繰り返へすところの同一性であり歷史的法則である。

歷史的社會事業は繰り返へす系列を任意に切り取る。歷史社會事業は無秩序な多樣な本源體より、その好むところの系列を拔き取り、本源體の部分範圍を系列に造り上げ、これを一定の法式に結合して歷史的なる社會事業法則を編み出す。歷史に於て繰り返へす規則を設定せんとすれば、これを特定の場所に限ることはできないから、それを一國一時代より超越させ、比較宗教學、比較藝術、比較經濟學、比較法律學、比較言語學といふようにする。これと同樣に、所と時とを超越して諸國の社會事業各時代の社會事業現象を比較して社會事業法則なるものを造り出す。比較によつて歷史的定型を設定し、typologische Methode を用ゐて社會事業の定型を確定する。

かゝる方法によつて雜多な見透しがたき社會事業現象の中に系列を切り取り、定形を定め、本質的に同樣なるものを集積し、結晶し、相次いで固定する。この意味に於て、ジンメル氏の如く歷史を以て個人と孤獨との集積するものといふの說は聊か言ひ過ぎであらう。それは定型に注意を向け、それによつて、雜多、無秩序、偶然、非合理の中に統一を造り出し、歷史に法則を導入することができる。かくて、定型社會事業なるものが現はれる。

定型は純粹なるものとして存在するのではない。それ故、社會事業に於ける定型なるものもreineのものではない。それは人間の抽象して造り出すものであつて、現實としてある社會事業現象をその儘

取扱はず、これを思惟によつて einseitig なものとなし、これによつて社會事業現象を記述して行く。歷史に於ては、いつでも非分割的全體を取扱はず、その一側面を取扱ふから、歷史社會事業の取扱ふところのものも全體としてある體驗の部分を對象とするに過ぎない。ベルンハイム氏は歷史家は抽象をしないで全實在の總ての側面と總ての特徵とを記述するといふけれども、歷史は人格の全觀をつくすことができぬ。歷史は結合の中より一系列をすぐり、切取を餘儀なくさるゝから、それの終極に於ける深さによつて、Totätität der Persönlichkeit を捉へることは能きぬ。歷史家が描く歷史的事件なるものは本源體の全景をつくすものではなく、たゞ、全體の中より系列を遊離するに過ぎない。そこで、歷史社會事業なるものは本源體や體驗の不可分なる全體卽全一を對象とするものではなく、その部分を對象とするものであると言ふことになる。それ故、歷史社會事業とその研究方法によつては、あり、のまゝの惱みを感得し洞察し、ついに捕捉することは能きぬ。眞の惱みなるものは不可分のものであり、偶然なるもの、非合理的のもの、絕えず創造する生命そのものにかゝはるものである。よつて、これを系列に引き離し、これを遊離して、體驗の部分を取扱ふことに歷史の特色があるだけである。こゝに於て、歷史社會事業はありのまゝの惱みを捉へる術ではないと言はねばならぬ。この分擔は歷史社會事業より體驗社會事業へと行く。體驗社會事業に於て、始めて、自由な偶然な非合理的な絕えず創造であるところの本原體を感得し洞察し、ついに捕捉することができる。社會事業の本體に肉薄

するものとしては歴史社會事業は既に主觀と客觀との對立を含み、不可分なる本原體を離れて、物の世界に一歩足を踏み入れてゐる。それ故、最も優れたる社會事業は體驗社會事業であり、歴史社會事業これに次ぎ、混合的な統合社會事業これに從ひ、最も劣れるものとして概念社會事業が附隨するといふことになる。

歴史社會事業の對象は直接的な實在であるのではない。歴史的法則は偶然や個性や非合理に限定を與へたときに生れるだけである。レッシング氏はかくいふ。Nennen wir die Geschichte Wirklichkeitswissenschaft, so wird selbst der naivste Geschichtsgläubige das Wort Wirklichkeit nicht in dem Sinne auffassen, als ob die Wissenschaft der Geschichte das absolute lebendige Urelement des Lebens selber unmittelbar wiederspiegele, da ja schon der Stoff aller Geschichtswissenschaft das sogenannte historische Leben eine bearbeite Wirklichkeit, nämlich den Wirklichkeit genannten Inhalt menschlichen Bewsstseins bearbeitet; somit also die Anschauungs-und Bewustseinformen wo nicht menschlichen, so doch sicher, des Bewustseins überhaupt schon vorausseezt, indem Bewustsein selber mitsamt seiner ganzen welt und Wirklichkeit eben nur eine Art Darlegung des lebendigen Elements ist (Lessing, Geschichte als Sinngebung des Sinnlosen, S. 9)レッシング氏はこれによつて、具象的な人間は生命に基いて居るから、これは既に作爲を施せし歴史的人間や歴史的實在とは異ふと考へてゐる。歴史は實在を制限するところ

に生れるもので、歴史は實在の blosen Analogie として存するのみで、實在そのものであるとは考へることはできない。歴史は Sinnlosen に意味を付與するところの Sinngebung なものである。恰も自然科學に於て lebendigen Naturerlebnisse の代りに、器械的な自然研究が現はれると同一である。そこで、レッシング氏が Darum scheue ich nicht zu behaupten, das das ziel der Geschichte, dieser vermeintlichen Wirklichkeit, auf mechanik hinausläuft と言つて居る所以である。

本原體たる實在や體驗の無意味なるところに意味を付與するものが歴史であるとすれば、歴史社會事業は本原體たる實在や體驗に何の關係もないものだと言ふことが分る。偶然や非合理や創造の渦をまく實在に於て、初めて、人間の惱みは如實にその姿を現はす。これが意味を付與されて變形するに至れば、實在から歴史に轉ずるけれども、そこには、最早、實在に屬する人間の惱みは似而非なるものとなつて居る。歴史社會事業はかくの如き實在の制限せられたる定型によつてその研究を進め、その職分を全うする。歴史は人格の自由と偶然とが制限せられ、創造性が局限せらるゝことによつて現はれるものである。歴史には人格や自由や偶然や創造は殘りなく驅逐せられ、それが存在しないのではないけれども、それは歴史として成立するには制限せられなければならぬ約束のもの。天才や指導者は重要な役目をなすけれども、それはそれ自身存在するのではなくして、法則化せられて存在するにいたる。雜多や偶然は歴史的存在たることはできないが、これに einzelnen Phasen を分ち、これを

特別なる系列となすときは、人類の行動を法則化することができ、雜多を統制することが能きるようになる。雜多をKlassenにまとめる場合、初めて、偶然なる實在を捕捉し理解することができる。歷史の世界は實在に對當するのではなくein begrifflicheKollektiveinheitたるにすぎず、實在ではなくして單にein System of Beziehungenたるに外ならない。全體はこれに反省を加ふることによつて個々の要素や系列に分解せられる。雜多の相互に又交互に交錯する統一をその儘捕捉し理解することはできない。よつて、それを分離することは認識の方法論的補助手段である。Geschehenszusammenhangに於ては、それを分解することによつてのみ、これを分離し、系列となすことによつてのみ認識することができる。全體的生活は直觀せられるべくして、概括せらるべきものではない。歷史の構成と理解とも亦これに從ひ分離と分析とによつて行はれる。政治史に於ては、繰り返へしがやゝ確定せられ、これを法則にまとめることが能きるが、歷史一般にさうであると言ふことはできない。それでも、歷史は繰り返へすものだとすることが能きるから、歷史の法則性は樹立しうるわけである。カントは人間の自由を認めたけれども、歷史の法則性は容認した。人間の意志活動を全體として觀るときは、その中に規則正しき繰り返へしを認むべきで、たとへ、主觀は混雜して統一がないとしても、その中に法則性のあることは拒むことができぬ。ズベングレル氏は歷史の中に法則性を確立することには躊躇するが、それでもその中にeinergewissen organischen Periodizitätがあることだけは認めてゐる。たゝ

歷史法則は一般的普遍的であるといふことが證明せられないから、それは部分的に流通するものと考へなくてはならぬ。それ故、歷史社會事業上の法則は一と先づ確立することができるけれども、今のところ、それは普遍的であるかどうか十分明白に決定することができない。

社會事業の歷史的法則が今のところ極めて不確實のものであつても非難すべきではない。その確實性は漸次に增大すると見なければならぬ。自然とても嚴密には法則的のものではない。自然と言つても、嚴密には一度かぎりのもの、多形なものである。マッハ氏は自然は思惟經濟によつて概念的に捕捉し記述することができるけれども、かくの如くにして自然をerschöpfenすることはできぬと言つてゐる。自然は測り知るべからざるもので、これを知りつくすことはできない、認識といふことはumbildenすることであり、umbildenすることは單純化することであるが、自然と雖も嚴密に單純化することのできるものではない。自然に於ても、嚴密に同一といふようなものはない。如何なる物でもそれと全く同一なものは存在しない。一の過程に全く同一な他の過程なるものはない。自然は凡て反對に充ちてゐる。かくの如き自然の中には多樣と連續とがあるだけで、多樣なものからは法則は生れぬ。それは眞に多樣であつて、嚴密にその中一として他の物に同じものはない。然るに、多樣より連續を捉へ、これを概念化するは如何なる作用によるのであるか。實在は或は多樣であり異質であつて、一度限りのものであらうが、それは又連續するもので、そこに同樣なるものを捉へることができ

る。そこで、異質を無視して連續のみを注視する場合には對象を共同なものとして捉へることができる。かくして成立する自然科學は一般的なるもの、generalisierende なものと言はれる。自然科學は個體を種や屬に從屬せしめて普遍化する。そこで、自然科學に於ても、異質より出發すれば個人的把握となり、連續より出發すれば概念的把握となるものと解釋せられる。

歷史に於ても、一度かぎりのものとして把握することもあり得るは明白である。一度かぎりのものとしては體驗社會事業の對象となる本原體であつて、こゝには雜多と偶然とに對する individualisierenden Auffassung があるだけである。體驗社會事業の研究方法は直觀により感得し洞察し、個人的把握によつてそれに接近する。然るに、現前の社會事業的現象を一度限りのものとして捉へずして、これを一が他と關係するといふ nebeneinander の形式によつて捉へるときは、一度かぎりのものを系列や定型によつて捉へることゝなる。こゝに、定型的社會事業としての歷史社會事業が成立する。歷史社會事業の一般性は部分的なるものであらうが、それでも、Spontaneität から Allgemeinheit を區別し、歷史的な社會事業の研究を可能ならしめる。

併し、自然科學による一般性と社會事業に於ける一般性とはその性質が異つてゐる。自然科學の一般性は單に理論的なものであるが、社會事業の一般性は價値に關係してゐる。これについてリッケルト氏は wertverbindende Auffassung による一般性といつてゐる。自然科學も歷史も概念を用ゐること

は同じである。たゞ歷史の用ゐる一般性といふものは自然科學の用ゐる普遍的なものと異つてゐる。概括的把握は自然科學に於ても歷史に於ても一般的なるものに向つて行く。歷史も事實を一般的なるものとなし、個人的なるものを說明する。歷史は一般的な概念を以て個人を arbeiten する。歷史家と雖も einmalige なるものゝ雜多を悉く洞見することはできないから、これを einfachen しなければならぬ。然るに、歷史の單純化する方法は自然科學のものと異ふ。自然科學的概括は價値に關係のない無關係のものであるが、歷史に現るゝ概括は價値に關係する wertbeziehende なものである。歷史に於ては、任意な個人が問題となるのでなく、價値に關係したものだけが取り上げられる。歷史に於て本質的のものと非本質的のものとの分るゝところは價値に關係あるかどうかといふことによる。自然科學者は價値を回顧する要なく、全實在を價値に關係せしめずして普遍化することができる。これによつて、無價値な把握は自然科學のもの、價値的把握は歷史のものといふことが言はれるであらう。

實在を自然科學的に把握することは能きない。自然科學的把握としての簡單化を行ふ刹那、それは實在とは似てもつかぬ似而非なるものとなる。歷史の個人的把握の方法によるも雜多を殘りなく示現することは能きないから、この場合にも簡單化が行はれるであらう。併し、歷史に於ける簡單化は自然科學に於けるものと異ふ。歷史に於ける簡單化は自然科學に於ける無價値なるに對し、價値關係的である。歷史に於て本質的のものと非本質的のものと分つ標準は Wertgesichtspunkte である。自然科學

に於ける generalsierende といふことは此も彼も價値に關係なしとして無差別的に普遍化するものであるが、歴史に於ける個人的把捉は價値に關係させるものである。歴史的把握を以て價値的なるものとすれば、客觀的說明若くは概括といふことは可能なるかの問題が提起せられよう。これについてリッケルト氏はいふ。Wenn dennoch die Verbindung der Objekte mit Werten zun Wesen der Geschichtswissenschaft gehört, ohne ihre Objektivität zu stören, so liegt das daran, das es eine Art der Wertverbindung gibt die nicht mit einem praktischen Stellemgsnahmen und Werten zusammenfallt, das heistdaran, das man Objekte in rein theortischen Weise auf Wert beziechen kann, ohne sie damit zu werten.

これによつて、リッケルト氏は價値を純粹理論的なものとして取扱ふ場合には、價値的關係を客觀化することが能きると考へるのである。そこで、blos rein wissenschaftlichen Wertbeziehung によつて價値關係的把握を客觀として概括することが可能となるとせられる。リッケルト氏にあつては、純粹理論的價値關係と價値づけるといふことは別の觀念である。歴史家は歴史家として、その對象を價値づけはしない。歴史家は國家、經濟組織、藝術、宗教などといふものを經驗的に取扱ひうる事象として待ち、それに消極的、乃至、積極的價値判斷を下すことなく、それの價値を客觀化することができる。それ故、歴史家の價値判斷は恣意によるのではなく、一般的價値 (Allgemein Werte, d, h, als Wert allgemein anerkannt) に關係するものといふことになる。かくして、歴史的概括は價値に關係しながら

客觀的な普遍化的な把握を可能ならしむるものに轉成する。

然らばこの價値に關係しながら客觀的普遍的たる把握の本質は何であるか。リッケルト氏はこれを次の如く考へる。歴史に於ては偉人や天才は立役者であり、その指導者であるように見えるけれども、偉人天才と雖も環境より分離することのできぬもので、社會的なるものである。然るに、社會的なる偉人天才は社會的價値を實現するに參與するといふ點に於て、再び社會的である。歴史的進化を以て一般的な社會的價値卽ち文化の實現を目的とするものであると解するならば、歴史の主目的は人類の文化生活の說明となる。

これによつて、歴史には自然科學の如き價値に關係しない概括はないけれども、價値に關係しながら、これを概括することによつて、一般的法則に達することができるとする見解に達する。シタイン氏は歴史に於ける同一性は法則といふべき程のものではないが、傾向(Tendenzen)であると言ひ、更に歴史的法則を自然科學の Kausalgesetze に對して Zweckgesetze であると言つてゐる。

科學は普遍的因果必然性を究明する自然科學と、個性を對象とする歴史科學と傾向若くは定型を對象とする定型科學とに分れる。社會科學は自然科學の如く物的存在の普遍必然性を究明するものと異り心的存在の傾向又は定型を究明する。自然科學は普遍化的科學であるが、社會科學も亦心的關係若くは志向的關係の因果必然性を究明するところの普遍化科學である。自然科學は理解(Begriffen)によつ

て普遍化をなしとげ、社會科學は了解(Verstehen)によつて普遍化する。すなはち、認識の根本作用によつて、一は理解科學となり、他は了解科學となる。社會學は了解的方法によつて究明せられる。偶然と創造とに終始する複雜なる歷史現象に統一を見出すことは困難である。歷史を普遍化することは望みがないと思はるゝけれども、その中に統一の存することは否むことができない。歷史は個性に終始するのであるけれども、その間に自然科學的概念に近き一般性を見出すことができる。それは事物に共通なる觀念ではないけれども、個性にあつて明かに未だ露出顯現せざる諸要素を觀念的に高揚顯明することによつて理想的の形態を設定することができる。マックス・ウェーバア氏はこれを理念型(Idealtypus)と呼んでゐる。理念型によつて社會科學は普遍化されるものとして定立しうる。了解科學は個性化了解科學と普遍化了解科學とに分れるが、社會學や社會事業學は普遍化了解科學たらなければならぬ。因果的關係を認識する作用は理解であるが、志向的關係を認識する作用は了解である。然るに、因果的關係を理解する方法は普遍化的であるけれども、これと同時に個性化的たることをうる如く、志向的關係を了解するにも個性化的なものと普遍的なものとを分立することができる。

社會事業學は心的存在を對象とするものであり、それは了解作用を通じて志向的關係を普遍化する科學である。それは歷史の如く個性化に終始するものではなく、その普遍生活はたとへ十分明白に著明でないとするも、その中に普遍化を發見することは困難ではない。それ故、志向關係を辿り、それ

を究明することによつて、傾向又は定型を見出し傾向學若くは定型學を組織することは不可能ではない。社會事業學は定型學として存立すべく、定型の究明によつてその學的體系を樹立せんとして、これを目的として學的形體を固定する。科學は自然科學と歷史科學と定型科學との三つに分れ、定型科學は傾向又は定型を對象とすることによつて、個性化的な歷史科學と因果必然性に終始する自然科學とに對立し、その生存權を主張するにいたる。社會事業學は歷史の如く個性化に終始するものではなく、それより一歩を進め、その中間に來り、定型を設定し、定型學として組織せられんとする。それ故、社會事業學は自然科學の如く因果的必然性を究明すると同樣なる方法を採り、その形體を固定するものではないけれども、志向關係を通じ、了解の作用によつて、了解科學として、偶然と創造と變化とのうちに普遍を發見し、普遍了解學として成立せんとするものである。

五　了解社會事業

自然現象は可測的なるもので、それは Brechenbarkeit のものである。この解釋は文字通りの意義に於ては正くない。自然現象と雖も嚴密なる意味では繰り返へすことのないもので、端倪すべからざるものである。一度以上そのまゝ繰り返へすが如き自然事象なく、從つて、嚴密には自然に於ても可測性といふものはないわけである。それ故、人間の行爲及び人格はその意志の自由なるが爲、偶然と

變化と創造とに終始し、測り知るべからずといふことは誤りである。可測性に於ては自然も文化も人間の行爲及人格も差異あるものではなく、たゞ、人間及文化に於て測り知ることの能きないのは意志が自由である爲ではなく、それよりも可測性の探求が自然に於けるが如く行きわたらないからである。人間は自由に意志し、自由に行動するから、人間は凡て自由不可測性に終始し、非合理性は人間の行爲を支配するといはれるけれども、精神世界に於ける可測性の探求は未だその達すべきところに達してゐない。可測性に關しては自然と文化との差異はたゞこれだけのことである。たゞ、人間及人格の可測性の十分探求せられざる間は、それは變化と偶然と創造との支配するが如く見えるだけである。

ウエーバア氏はいふ。人の行爲に基く可測性と自然現象とのそれの間には原則上の差異といふことは認め能はぬ。人間及びその行爲の可測性は一見微弱であるようであるが、それと天氣豫報との間に於ける可測性とには區別はない。たとへば、暴風のために破碎されたる場合、その破碎の一般的傾合及び程度に關しては測り知るべく、機械的法則によつて因果的說明を下すことができるけれども、人間の行爲は無限に復雜であるから、到底これを可測性として設定することができないといふ。併し、岩石がどの程度にどれ位破碎するかはそれが無限の關係の爲に容易に測定することができない。これに對し、寧ろ人事に關しては容易に測定することができると考へらるゝであらう。人の行爲に關しては、

その行爲を了解すべき目的としての內的に追驗しうべき具體的動機を見出すべき目的をもつ。かくの如き動機によつて行爲をその動機に歸屬せしむることができ、よつて以て、行爲の了解的解釋をなし遂ぐることができるが、意味に充ちた解釋可能性の故に、人間の行爲は原則上自然現象の不可測的なるに對し、合理的で可測性に富むと思はなくてはならぬ。

自然現象は可測的のものであり、人間及びその行爲は意志の自由なるが故に不可測であるといふことは誤つてゐる。意志が自由であり、自由の度が高まるに連れて、偶然であり變化であり創造であるが故に全く不可知であり不可測であると言ふけれども、その欲する目的達成のために最も適合的手段を動かすにあたり、何等それを遮ぎる障碍たるが如き事情の生ぜざる場合には、目的と手段との間には一義的關係生じ、よつて以て、可測性を設定することができる。ウエーバア氏のいふ zweckrational とは決定せられたる行爲が十分に動機づけられたることを意味し、それが adequat Verursachung であることを指示する。十分に合目的々となれる行爲は他の事情にして同一ならば、いつでも、その表現は目的が手段に關して益々必然的となり可測しうるものとなる。かくて、完全にそれの合理的分析及それの合理的行爲の圖式へ einordnen せられる。かくの如き見地に於ては人間の行動は自然現象若くは動物の行爲よりも一義的のものとなり、一層可測性に富むと觀ることができる。

ウエーバア氏の社會學說に於て重要なる意義を有つものは意味關聯の了解であるが、氏はこれを動

機決定關聯の把握又は了解といふ。それ故、憤怒をなす場合、それが嫉妬によるか、名譽毀損によるか、その他であるとき、それ等の動機と憤怒との關聯を把握すること卽ち了解である。思はれる意味內容が他の作用を惹き起す場合、これを動機による決定といふ。それ故、動機と、これによつて惹き起されたる作用との間には意味關聯が成りたち、そこに、一が他を通じて了解されることゝなる。今の例によれば、憤怒が妬嫉のためか、名譽毀損のためなるとき、憤怒なる內的態度が妬嫉に基くとして、よつて以て、打擲するとする。然る場合には、妬嫉が打擲なる外的態度及憤怒なる內的態度の原因たる所以を明かにすること卽ち了解である。最も重要なる了解は反復的現象の理念型(純型)によつて科學的に構成せらるべき意味關聯の把握である。經濟學的理論を構成する諸々の概念や法則は純目的合理的に經過するときは、それが一定の型式に從ふことを指示する。かくの如く概念及法則が一義的に成せらるゝときに、これを理念型的概念構成と呼ぶ。人間行爲の動機決定が合理的になされ、行動が純目的合理的になされる場合、それが一般的に如何あるかを設定することができる。かくて、一義的なる理念型概念が構成せられる。理念型はユトピヤの姿態をもち、現實態の完全な描寫ではなく、文化の理念の描寫であり、更に、それは現實態の一定要素の一方的高調若くは高揚によつて成立するところのものであり、要素の一方的高調によつてそれ自體の中に相互に矛盾する要素を排去し、概念內容を一方的一義的のものとなし、更に、現實態の經驗內容の意味成分を明かにせんとする現實

態の比較測定を目標とするものである。

理念型は現實態の一定要素一定特質の一面的高調によつて構成せられるところの認識手段であり、それによつて個々具體的なる關聯の歷史的認識を遂行するのであるが、これはその一義的なることゝ意味關聯の質的顯明によるのである。理念型は一義的特性をもつが、それは又、一定の Evidenz としての顯明性をもつと思はなくてはならぬ。それに、理念型は合理的解釋に依存し、明かなる理解のためには合理性に依存する一義性によつて、個々の行爲に於ける非合理的要素の認識を可能たらしめ、よつて以て因果的歸屬を設定する。

意味を人間態度の內的方面と解し、現象を內的方面より觀察する科學は了解科學である。個人によつて思はれたる主觀意味を通じて實現せらるゝ事象は意味をもつ事象であつて、文化これに當り、個人によつて思はれたる主觀的意味を通じて實現せられざる事象は意味を有たざる事象であつて、自然これに當る。意味は心理學或は物理的過程に分解し得ざる統一的なもので、了解科學は心理物理的現象の外的觀察を行ふことを使命とするものではない。

社會事業學は了解科學であり、普遍的了解科學である。それ故、それは心理的物理的現象の外的觀察を行ふものでも、これに集中するものでもない。社會事業學の普遍化は感覺及び外的な經過に集中する單なる概化でもその一般化でもない。社會事業學は理念型概念によつて概化し一般化するところ

の普遍的了解科學である。

社會事業は研究方法より見て二の部門に分れる。歷史を對象とする歷史社會事業、定型を對象とする定型社會事業がこれである。

六　理念型概念と普遍了解的社會事業學

歷史は個性と偶然と變化と創造とに充ちてゐる。このうちより普遍的知識や普遍的法則を求むることはできぬ。自然科學はこれに對して普遍的知識や普遍的法則を設定することに興味を向け、また、これを職能とする。歷史家の求むるものは單に具體的結果を具體的原因に歸屬せしむることであるが、若し、これより一歩を進め、因果的關聯や、法則的認識を設定することができなければ、普遍的知識なるものは文化現象には現はれぬ。復雜なる文化現象のうちに普遍的知識が設定せられ、又その範圍を擴げれば擴ぐる程、一般的知識が確立するけれどもこれは自然科學的方法によつては不可能である。Regelmässigkeit を文化現象の中に確定するには、自然科學的に齊一に繰り返へすものとしてこれを設定することができないから、文化現象に於ける一般的知識、法則は理念型概念の如きものによつて成し遂げなければならぬ。個別的にのみ意味を有する歷史及文化現象にあつては、抽象的理論的方法は歷史的個別者や文化現象の因果的說明を可能ならしむる手段に過ぎぬ。それ故、理論的認識は歷史的

認識に對しては單に補助手段に過ぎない。そこで、社會法則の認識なるものも單に Regelmässigkeit を設定する意味のものに過ぎないので、それは實在認識のために利用する補助手段たるまでゝある。

歷史は理念型概念を補助手段として、文化現象を一般化し普遍化する。文化現象に於ける合則性は理念型概念によつて設定せられ、從つて、社會科學に於ける繰り返へしは理想型概念によつて造り出される。文化科學が文化現象の認識のために利用する手段卽理念型概念である。理念型概念は文化實在の一定成分の特徵の一面的高調によつて構成せられ、一義的のものとして設定せらるゝのであり、それ自體一の構想の產物であつて、現實態の完成的表現ではないところのものである。

理念型概念はその構造が純粹個別的なるか、若くは、普遍的一般的なるかによつて、或は Hypothese として看取し、或は狹義に謂ふ理念型と見る。ヒポテエゼとは思惟構成物が純粹個別的に具體的なる個々の關聯のための解釋圖式であり、理念型とは一般的特質をもつ思惟構成物である。普遍的特質を有する理念型によつて社會生活の法則を探究するものは社會科學である。從つて、歷史社會事業を越えて、定型的若くは傾向的法則によつて普遍性を確立せんとするものは、學としての社會事業である。社會事業は理念型概念によつて普遍的法則を設定することを任務とするところのものである。理念型は個別者の因果的歸屬を可能ならしむるところの概括手段である。歷史的文化の普遍化は如何にしても無意義と考へなくてはならぬが、一應理念型概念によつて、歷史的個別者を普遍化せんとする。

併し、かくして得られる理論的知識は單に文化認識の補助手段といふの外何でもない。理念型の構成及びその認識はそれ自づから目的と見做すべきものではなく、それは歷史的實在の認識への單なる補助手段であるに過ぎない。具體的文化現象の關係、因果條件の認識に於て、理念型概念は歷史的實在を認識する補助としてのみ役立つ。理念型は手段であつて目的ではない。個別的事實の文化意義を確定するにあたり、理念型によつてこれを一義的に把握し、概念構成を達成する。理念型はヴェーバア氏の解釋によれば、個別的理念型の外、一般的性質を有する理念型があり、ウェーバア氏は後者を經濟法則によつてこれを說明してゐる。理念型概念に於ては平均的若くは共通的特性を求めずして、現實態に於ける特質の一面的高調によりて概念構成をなす。文化的意義に基く人事現象の概化は理念型である。それ故、理念型によつて構成せらるゝところのものは、行爲者から理念型的に思はれたる意味、すなはち、一義的に把握せられたる動機より理解せらるゝ社會的行爲の期待しうべき經過である。この法則は理念型的に把握せらるゝ限り、嚴密に了解的であり、かつ、一義的である。

社會事業學は理念型概念を構成し、理論的知識を設定することを任務とする。それは文化的に重要なる行爲の把握を目的とする歷史と對立し、兩者は各理論的知識と具體的把握とに於て各その特徵をつくる。社會事業學は個々の關聯の因果的歸屬としての歷史に對立して、社會的行爲の普遍的知識及び事實的合則性を探究し、類似の行爲者によつて理念型的に思はれたる同質の意味に基き、繰り返へさ

るゝ行爲の經過を觀察し把握する。かくて、一般的な理論的な知識をつくり出す。社會事業學に於ては、自然科學の如く實在を法則に還元することを目的としないが、少くも、社會事業學的法則は理念型的に構成せられ、よつて以て、一般的理論的知識を設定することができる。

これに對當して、社會事業學は了解的方法を用ゐる。理念型概念は了解的方法と表裏して現はれる。それ故、私は社會事業學を普遍的なるものとして確定し、それは歷史の如く個性と偶然と變化と創造とのみに之れ依る個別的方法を用ゐるものでないとし、普遍了解科學として社會事業學を確定する方針をとる。

參考文籍

(1) 海野幸德、「社會事業概論」第二篇。
(2) 海野幸德、「貧民政策の研究」第一篇。
(3) Lessing, Geschichte als Sinngebung des Sinnlosen.
(4) Weber, Ueber einige Kategorien der verstehenden Soziologie, Logos, Bd. 4, 1913.
(5) Steffen, Die Grundlage der Soziologie.
(6) Andrei, Das Problem der Methode in der Soziologie.
(7) Harnack, Über die Sicherheit und die Grenzen der geschichtlichen Erkenntnis.
(8) Dühling, Logik und Wissenschaftstheorie.
(9) Windelband, Geschichte und Naturwissenschaft.

(10) Simmel, Probleme der Geschichtsphilosophie.
(11) Eulenberg, Neuere Geschichtsphilosophie, Archiv f. Sozialw., Bd XXV.
(12) Spengler, Untergang des Abendlandes, Bd I.
(13) Croce, Zur Theorie und Geschichte der Historiographie.
(14) Marbe, Die Gleichförmigkeit in der Welt.
(15) Rickert, Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung.
(16) Banik, Allgkmeine Ergebnisse und Probleme der Naturwissenschaft.
(17) Mach, Erkenntnis nnd Irrtum.
(18) Dithey, Aufbau der geschichtlichen Welt.
(19) Weber, Wirtschaft und Gesellschaft.
(20) Mayer, Philosophische Geschichtsauffassung.
(21) Stumpf, Zur Einleitung der Wissenschaften.
(22) Bernheim, Lehrbuch der historischen Methode.
(23) Valdour, Les methodes en science soziale.
(24) Bureau, Introduction à la Méthode sociologique.

第貳編　社會事業の形態

第一章　社會事業形態の區分

一　基本的區分

社會事業形態論なる社會事業學の一部門の研究は私獨自のものであるが、形態論に就ては、既に「社會事業とは何ぞ」第五章に精細なる最近の研究を發表して居り、更に、「社會事業概論」第貳編には形態的社會事業學論の淵源を分析闡明して居るから、本書に於ては紙數の節約上、それ以後の新研究を論述するが、その他に亙つては單に要綱の記述に止めなければならぬ。

社會事業形態の基本的區分は(一)縱斷的形態、(二)横斷的形態の二である。縱斷的形態は一切の横斷的諸形態に共通なものである。縱斷形態は關係形態に屬する諸形態、經營形態に屬する諸形態、種別形態に屬する諸形態を貫通して一なるものとして示現せられる。すなはち關係形態としての單獨形態は個別形態なるか、集團形態なるか何づれかであり、綜合形態、統合形態、融合形態、全一形態亦これに準ず。この事は經營形態としての公的經營形態、私的經營形態、公私混合經營形態、宗教的經營形

態を通じ再び同一であり、種別形態としての一般社會事業形態、保健社會事業形態、兒童保護事業形態、教化社會事業形態、經濟社會事業形態を通じ三度び同一である。

一切の社會事業形態は基本形態としての個別形態と集團形態とに要約せられる。基本形態としては個別形態と集團形態とあるのみ。

私は縱斷的形態は閉鎖的なるものとして、これ以上區分すべからざるものとして分類した。卽ち、私は縱斷形態の區分を以て完全區分であると見做す。縱斷形態の區分左の如し。

一、體驗形態
二、個人形態 } 個別形態
三、集團形態
四、統合形態

體驗形態は「全一」を對象とするもの、個人形態は「無限の結合」を對象とするものである。この兩者は個別を取扱ふことに於て相同じ。よつて、この二を個別形態に取り纏める。全一を對象とするものは體驗社會事業であり、無限の結合を對象とするものは形態論上の(普通に謂ふものにあらざる)慈善事業である。無限の結合とは個人に示現する要素的困窮と要素的福利の無限的な結合體を意味し、個々として存する要素的なものは困窮であつても福利であつても抽象的で具象的全體ではないとす

る。無限の結合は嚴密には絕對に他によつて繰り返へさゝる底のもので、特定個人の特定狀態を指すものである。全一は單なる結合的觀念より生命そのものとしての one whole の立場によるもので、茲に生命としての困窮と生命としての福祉が示現せられる。個別形態はかくの如き意味をもつ無限の結合と全一とを並せ抱擁するもの。

個別形態に對し集團形態が區別せられる。集團形態は抽象的なもの、部分的なものである。これは因果關係により成立するもので、無限の結合や全一の如き歷史的觀念ではない。よつて、集團形態は繰り返へす義によるもの。無限の結合は他によつて置き換へることはできず、全一にいたつては全く他との交渉を絕ち、獨自なものとして存するが、集團形態によるものは幾回となく繰り返へすことの可能なものである。個人に示現せらるゝ困窮や福祉は個人の生命の奧祕より特發するもので、それは如何なる個人と雖もそれと同一なものを提示することはできず、繰り返へすことは絕體に不可能である。但し、要素的困窮や要素的福利を切り離して、要素的なるものとする場合には幾回となく繰り返へすものとして人爲故造することができる。實は困窮や福祉と稱するが如きものは人爲故造するにあらずんば、繰り返へすものとして因果的範疇に收むることは全く不可能であるが、これを假象とし、要素を獨立なるものとして分離し、その存在を許容するときは、繰り返へすものとなり、同一な要素的困窮や要素的福祉が現はれる。現實としては要素的困窮だの要素的福祉だのといふようなものはな

いのであるが、假象としてこれを設定し、同一と思はるゝ要素を取りまとめて一となし、これによつて集團的現象としての困窮と福利とを造り出す。現時瀕發すると言はるゝ集團的困窮や集團的福祉はかくの如くにして發生したる假象に外ならない。現實としてはかくの如き集團的困窮も集團的福祉も存在しないのであるが、取扱ひの便宜上假りにこれを設定するのみ。

集團的困窮や集團的福祉は抽象的なものである。それは同一と思はるゝ要素を象個人より抽出し來り、同一なものとして集團的困窮にまとめることによつて成立するもの。それは又部分的なものである。個人の示現する困窮は他と係り合ひ、無限の錯綜をなすものであり、全的なものであるが、集團形態はその中の一要素を抽出し來るのであるから、それは無限の結合に對しても全一に對しても部分的である。部分的困窮に對する救助を私は「社會事業概論」に於て始めて「不完全救助」として表示した。部分的救助は要素的困窮の見地からは完全たりうることができるが、個人の見地からはその部分である。それは又有機的結合體の中より强ひて一要素を切り離して抽出したものであるから、これに對する救助は如何にしても不完全たらざるを得ない。これ不完全救助と言はるゝ所以である。

これに關しては「社會事業概論」第二編第一章「個人的困窮と集團的困窮」を參照せられたし。

かくの如き本質をもつ集團形態は明かに個人形態に對立する。基本形態としては個別形態と集團形態とは並列的なもので、彼此並列せらるゝ關係にある。然るに、統合形態にいたつてはこれと聊か趣

を異にする。統合形態はそれ自づから獨自の形態ではない。それは個別形態と集團形態とを統合することによつて生ずる形態である。詳しく言へば、それは全一形態(體驗形態)と集團形態とを統合するか、無限の結合(慈善形態)と集團形態とを統合するかによつて生ずるものである。統合形態といふが如き獨自の形態は絕えて存しない。然らば、一應統合形態は個別形態と集團形態とに並列することの能きるもの、若くは、それに對して從屬的なものと見られるであらう。但し、それはいづれの横斷形態をも貫通し、特に現時にいたり現はれ始めしもので、横斷諸形態に共通なものといふことに於ては個別形態にも集團形態にも劣るものではない。それに嚴密に個別的でもなければ嚴密に集團でもないような形態(エルバアフェルトの如く、方面委員制度の如く)が發現し、一切の横斷形態を貫通する現況に於て、これを個別的形態と集團的形態との外に區分することは如何にしても避けがたいであらう。そこで、統合形態は縱へ個別的形態と集團的形態とに並列することは能きぬものとしても、縱斷形態の一區分であるとしては特別にこれを取扱ふことは、どこまでも妥當である。そこで、私は統合形態をも略(嚴密ではないが)個別形態と集團形態と同價値のものとして併列し、縱斷形態に三區分を施したのである。

横斷的形態は(A)關係形態、(B)經營形態、(C)種別形態の三に區分せられる。

關係形態は(一)單獨形態、(二)綜合形態、(三)統合形態、(四)融合形態、(五)全一形態に再び小分する。經營

形態は(一)公的經營形態、(二)私的經營形態、(三)公私混合形態、(四)宗教的經營形態に小分する。種別形態は(一)一般社會事業形態、(二)保健社會事業形態、(三)兒童保護事業形態、(四)教化事業形態、(五)經濟社會事業形態に小分する。

これ等の諸形態については逐次説明する。

二　要素の結合による區分

要素觀念を中心として區分するときは、(一)要素觀念の現はれざる本源形態、(二)要素の有機的結合狀態、(三)要素の分離分立する狀態の三となる。

無限の結合にあつては要素は彼此有機的結合をなす。各要素は一々指呼せられ區分せられるけれども、それ等要素は有機的に結合せられ、個人として一體を成すが故に、それを分離することはできがたい。かくの如き無限有機的結合に對する救助は要素を寄せ集めることゝ、これを有機的に結合することゝの二によつて成立する。單に無限數の要素な列擧して遊離し、その一々について救助を進めても、それは集團的な部分救助の集合と同一なもので、無限結合による救助とはならない。無限の結合にあつては、無限要素の集積の外に、更に、これを一定結合形式に纏めなければならぬ。この一定結合形式は人により時により所によつて異ふものとなる。甲個人の結合樣式は乙個人とも、丙以下

の衆個人の如何なるものとも異ふ。結合樣式は個人の數だけあると見做さなければならぬ。これが獨特な個性となり人格となつて生存の價値を夫々もつ所以である。獨特なる個性を殺すような方法は如何なる場合にも眞の救助とはならない。更に、時によつて結合の樣式は異はければならぬ。優越せる、若くは、水準以上にある結合形式として生存の價値をうるには、その時に從つて適當なものとして結合しなければならぬ。所によつても結合形式は異はなければならぬ。日本と米國とに於ける適當なる結合樣式は異ふであらう。その他、一々これに類するであらう。然らば、時と所とによつて成る環境により結合樣式は異はなくてはならぬ。この故に、個性と時と所との適當なる組合せといふものは無限數に達し、個人數だけあると言ふべきであらう。更に、時を隔つれば、同一個人の結合狀態と雖も異ひ、又異はなければならぬ。嚴密には一瞬と雖も同一個人の結合形式は停滯することなく變化に變化を重ねるであらう。こゝに、無限結合の意味がある。

かくの如き性質の無限結合は有機的なものとなつて現はれる。すなはち、要素の單なる集合ではなく、それが個々人に對應して一定の形式によつて結合するもの卽ち無限の結合である。たとへば、墮落婦人の場合、墮落する現象は家庭の惡いこと、父母の貧困なること、その職業能力の低いこと、從つてその遺傳的素質の劣惡なること等から來るが、當人は更に身體的にも缺陷があり、精神薄弱として先見の明なく、又誘惑に抵抗する氣力もなく、貧困なりし爲め家庭的訓練も家政經濟の知識も授け

られず、惡友と交はる機會多く、誤樂乏しき爲これを劣情に求めるなど、一個の墮落現象はそれからそれへと無限に追及せられるが、これは特定墮落婦人に對しては特定な有機的結合をなすであらう。この有機結合がこの場合特定な墮落現象である。世に墮落婦人は極めて多い。併し、それは一々特定な結合樣式をもつものであるから、いくら墮落婦人が現はれても彼と此との區別を滅するが如きことはない。すなはち、この場合、墮落現象は一も繰り返へさずとする義によるものである。これ等の墮落現象は各特定のものに應じて有機的結合をなし、所謂千變萬化である。

要素の有機的結合がその極致に達するや、有機的結合といふよとなことでは表示することが能きなくなる。要素はこゝには彼と此とを區別することが能きないから、要素といふやうな觀念が衰敗し、ついに全一の狀態に達する。全一の狀態に於ては總てが渾然一體をなすだけで、要素といふような觀念の浸入する餘地とてはない。これが私の謂ふ本源狀態である。無限の結合は竟に本源狀態に還設歸入すべきものである。(「社會事業概論」第二編第四章「集團的困窮より個人的困窮への還元」、第五章「個人的困窮より根源的困窮への還元」參照)。

無限の結合をめぐり、有機的に結合する要素を一々遊離し、これを分立するものから獨存する形式へと移せば、抽象化の過程を經て要素の孤立狀態に達する。要素が孤立すれば同一なるものと思はるゝものを集合して集團的困窮なり集團的福祉なりを造り出す。實は集團的困窮も集團的福祉も現實の

人間には絕えて見出すことの能きるものではないが、學の便宜に從つてこれを遊離設定し、更に、これを纏めて同一範類のものとして造り出すに過ぎない。こゝに同一要素の集合を對象とする集團社會事業なるものが誕生する。集團社會事業は結局有りえないもので人造されたものではあるが、要素を遊離し分立する興味と必要とから現れて來たものである。

人間の困窮や福祉は無論有機的結合によるものであり、更に、それでも不足だとして組織によるべきものであり、更に、それでも不足だとして全一によるべきものであるとせられるから、これを因果的概念によつて集團的なものとなす場合と雖も、それは竟に人間に對應するものでないとして敗走すべきは自明である。無限の結合は集團的なものよりも一層完全に個人と個性とに對應することのできるものである。それでも、それは結合といふが如き物的なものとして人間に對應する以上、更に一進し全一に極まらなければならぬ。體驗的救助は歷史的觀念による究竟的のものであり、體驗社會事業が最後のものであるとなす義も亦こゝにある。

三　形態と發生史

形態進化の究極は體驗形態である。一切の形態は凡て體驗形態に還元せられる。集團形態といふが如き sachliche なものは人間に何の關係もないから、それは竟に menschliche な意義の復興となり、物

的な集團的形態を排除し敗走せしむるであらう。それは不完全救助につくるものであり、人間に對するものではないから、完全救助たるにいたらなければならぬとするであらう。然るに、完全救助たるには先づ無限の結合に一進しなくてはならぬ。こゝに集團形態は個人形態に還元せられる。

集團形態が死滅して個人形態たるにいたれば愛も心情も現はるゝであらう。そこには人間の感覺も現はれ、無限の結合狀態によつて救助を進むるであらう。そこに Hilfe von Mensch zu Mensch の形式を採るにいたるは必然である。無限の結合形式に於ては、身體とか、精神とか、經濟とか、倫理とかといふように區別せられるが、人間的見地に於てはさような區別は一切認められない。すべて渾然一體をなし、流れ耽るのが生命の姿である。そこに全一が現はれ、體驗的方法によつてそれを捕捉するにつとめる。但し、生命は竟に捕捉することが能きず、それを得たと感ずる刹那生命そのものはその手から免れ去るであらう。身體とか、精神とか、經濟とか、倫理とかといふような區別せらるゝ無限の結合形式はこゝまで進み來る刹那、全一に還設してその姿を止めぬであらう。こゝに個人形態は體驗形態に還元せられたのである。

この理により困窮の輕減除去と言ひ、福利の增進といふことが sachliche より menschliche の見地に轉ずる刹那、還元作用は時を移さず浸入し、その働きを開始するであらう。單に物として困窮を除去し福利を增進するといふことであつたら、集團的でも、十把一束でも、その他何でも關はぬが、それ

が人間的見地を生ずれば、忽ち眼孔一轉して無限の結合に進み、更に、全一に究まるであらう。この過程を私は「人間化的還元作用」と名づける。

人間化的還元作用は人間的見地によつて開始される。時代が物的となれば集團社會事業や社會政策の如きものは遠慮なく進出し、且つ急速に發展するが、それが人間的見地を生ずれば忽ち人間化的還元作用を起すであらう。時代が鈍にして愚なれば人間的見地は生じないであらう。單に能率と效果との問題に集中するような自然科學的なものにあつては人間化的還元作用は現はれない。たゞ、そこに愛があり、心情があり、人道的精神があり、最後に理想があるならば如何にしても人間化的還元作用が行はれざるを得ないであらう。私の社會事業學論の基調は人間的見地であるから、人間化的還元作用により一切を體驗形態に還元する試みとなつて現はれざるをえぬ。

發生史的には、初めに體驗形態が在り、次にそれより個人形態が現はれ、最後に集團形態が出現するとする。かくの如き順序により、最も物化し價値の減滅せし集團形態を進化の頂點と誤解するは、時間によつて進化の階段を定めんとする失當にして不用意なるものである。但し、時間的にも集團形態は更に人間的見地を生ずる刹那、往路を戻り、懷しき我家に復歸する作用を起し、竟に體驗形態に還元さるゝから進化的階段の頂上は再び體驗形態となる。初の體驗形態は哲學的なもの、第二のものは科學的のものである。私はこれに對し、體驗的全一と概念的全一といふことで表示してゐる。これ

については先著の關係個所を通讀せられたい。

四　集團形態の統合形態への進化

集團形態が進化の頂上であるとする集團崇拜者の見地は更に一回轉を示すを要す。時間的に見れば、集團形態よりも統合形態の方が後に現はれたもので、この方が進化の頂點に在るのかも知れぬ。個人形態と集團形態との現はれし後でなければ、これを統合する作用は無論起らない。その意味に於て、統合形態は時間的には集團形態よりも後期の出現に屬する。

併し、統合形態と雖も人間的見地を生ずれば集團形態の如く體驗形態に向つて人間化的還元作用を起す。こゝに於て、統合されたるものは再び分離せしめられ、一々集團形態に、他を個別形態に還へす。そして、個別形態は個人形態より體驗形態に移り、こゝにも亦體驗形態が最後の幕となることを示す。

更らに統合形態は既に該形態發生の理由を人間的見地に酌む。何が故に集團形態の外に統合形態なるものを生じたかと言へば、集團社會事業時期に入り弊害百出し、これを人間的なものにしなければならなかつたからである。たとへば、エルバアフェルド制度に於て、集團的な强制的貧民事業の外に個別的貧民事業を結合せし所以のものは、集團的にてありながら、能きるだけこれを個別化する用意

によつたものである。かくて、統合形態成立の動機が集團形態の個別化にあるは明かである。

統合形態の出現は偶々以て集團形態の個別形態への還元の必要を生せし所以を立證するものに外ならぬ。集團形態の個別化や統合形態の成立が集團形態の個別化にあることによつて、形態は究極何づれも體驗形態に向ふべきものたることを明知する。

參考文籍

(一) 海野幸德、「社會事業概論」第二編、第四章、第五章
(二) 海野幸德、「社會事業とは何ぞ」第五章、第一節、第二節
(三) 海野幸德、「貧民政策の研究」第一編、第一章
(四) 外國文獻は「社會事業とは何ぞ」第五章のものに同じ

第二章　横斷形態

一　關係形態

關係形態の最初の區分は單獨形態である。單獨形態とは一都市一地方の社會事業が夫々孤立し他の社會事業と連絡せず運營せらるゝものをいふ。單獨形態による經營は一都市一地方の困窮と福利とを打算しそれに於て始められたものではあるが、單に都市乃至地方の社會的需要と思はるゝものに向つて畫策施設したものであるから、果してそれが都市として地方として、乃至、國としての困窮を除去し福利を增進することが能きるかどうかは分らない。全體の需要は全體の上から決る外はない。全體を通觀して如何なる施設を要するか、その過不及なき狀態を決定しなければならぬ。たとへば、托兒所の必要なるべきは都市及地方の狀況の上から明かなりとして該計畫をたつるとせんに、都市地方を通覽する上に於て既に托兒所は過剩の程度に達し居たりとすれば、如何。然らばこの場合、托兒所の需要あるが如きも、全體の上から既に不用だと見なければならない。現時にいたるまでの社會事業は主として單獨形態によるものであつたから、社會を一體としての社會事業を經營施行することができなかつた。我國に於ては現行さるゝ社會事業は未だ單獨經營時期に彷徨し、官公團體に於ても私團體に於ても綜合の實を擧ぐるにいたつて居らぬ。こゝに於て綜合の必要が生ずる。

綜合形態については次編にいたり精細に論述するから、こゝには省略しなければならぬ。縱斷形態は閉鎖的なるものとして區分したが、それは竟に個別形態と集團形態とに要約せられる。個別形態と集團形態とは各獨立な形態として發達したもので、夫々特色をもつが、現時にいたるまで社會事業の發達に於て著明となつたことは、兩者はこれまでの如く分離して進むことが能きないこと之である。救助は質の上に於て言はるべきであるから、如何に救助の量が多くとも、通觀に於ては毫も救助たりえぬのである。然るに、救助の質とは無限の結合と全一とを表示するもので、有機的結合による全體の上に、又彼此區別し指呼することの能きぬ體驗の上に求めらるゝもので、如何にしてもそれは個別的ならなければならぬものである。個別的な救助形式は Hilfe von Mensch zu Mensch を押し進むる唯一のものではあるが、歐洲大戰前後の社會的生活は量的救助にその眼を轉向することを餘儀なくさせた。歐米諸國に於ける國別社會事業の發展については別に精細なる分析闡明を施すが、現時世界共通なものとして顯明なる現象は何處に於ても社會事業の起源が集團的困窮の出現に求めらるゝ一事である。集團的困窮の出現は世界を通じ共通な現象と見るべきものである。世界を通じて如何程の貧民あるか測り知るべからずと雖も、我國に數百萬、米國に一千二百萬（ハンタア氏の計算によ る）英國に平均一五%の貧民（ボウレイ氏の計算に據る）ありとすれば世界に於ける貧民の夥しき數に上るは一見明瞭である。その他、雜多の社會的困窮又かくの如しとすれば困窮の量の巨多なるたゞ

たゞ愕く外はないであらう。すなはち、現時に於ける困窮はその量の大なるに於て、その集團的なるに於て特徴づけられる。たとへば、米國で困窮者を總計するときは國民の十分の一に達すべしとして the submerged tenth と呼んでゐるが如き卽ちこれである。米國に於て、貧民、精神病者、精神薄弱者、疾病者、盲者、聾唖者等を合計するときは全國民の十分の一に達するといふ。但し、かの如き計算は過大なるものにあらずして寡小なるものであらう。私は「社會事件の飽和點」といふものを設定して居る。一都市一地方に於てその當時の社會經濟狀態に應じ飽和しうる社會事件は一定數ありとして設定することが能きやう。社會事件の飽和點に達するには、入念なる調査と努力とによらなければならず、又それに相應する資金を豫想するし、社會の責任觀にもよらなければならぬから、社會事件の飽和なるものはいつでも容易に實現しがたき觀念上の存在に過ぎないであらう。たとへば私が大正十二年に京都市の不良兒百六十二名なりしものを二年間の調査によつて約一千名に增加せしが如き、少年審判所開設前、大阪府の不良兒は二千名に過ぎなかつたものが、少年審判所開設後十年にして三萬に達せしが如き、如何に現時の社會經濟狀態が多數の不良兒を含みうるかを想像することができよう。それ故極めて不完全なる調査によつて知られる國民の十分の一の困窮者などゝいふ類は到底困窮者の實數を示すものではないであらう。然らば、困窮の總量は現時想像するよりも遙かに巨大なるものがあらう。それに貧民と言つても、精神薄弱者と言つても、無學者と言つても、絕對的標準に

よるものではなく、その當時の社會的標準によるものに過ぎない。それ故、標準の決定如何によつて困窮の總量も增減するを免れないし、殊に現時に於けるが如く困窮の社會的標準の變動する時期に於てその然るを覺える。

現時に於て一見困窮の增加せし所以のものは社會が複雜多岐となり、社會的標準も需要も高められたけれども、それと共に困窮を輕減除去するに足る有効な合理的手段が講ぜらるゝに至らなかつたからである。米國に於ては疾病者が三%、不健康者が三%で、全體としては不健康なるもの五—六%に上り、永久的不能者が二萬五千人、工場で傷害を受くるものが一年につき六十萬人、精神薄弱にして院舍に保護せらるゝものが五十萬人、精神病院にあるものが三十萬人といふ風で各種の社會的障害者を通算すれば實に愕くべき數に上る。この事は戰後にいたり特にさうで、歐米諸國及我國に於て一樣に巨大なる困窮者群を發生しつゝある。こゝに於て各種の集團的困窮の紛生炳焉。

この夥しき困窮に對しては米國では一年四拾億圓の巨額を投せなければならぬ事態を生じた。困窮者の上からも、その救助費の上からも容易ならぬ事態が現生したのである。Ogburn 教授の Social Change はかくの如き困窮を機緣として著作されたものであらうが、氏は夥しき困窮の原因を探明してそれを文化に求めてゐる。氏は文化は全體として變へることはできないが、一部分變へることができるとなし、社會事業の方案によつて困窮を除去することにも接近して結論を與へ、左の如く言つて

居る。However, there is evidence of a lack of harmonious adjustment detween modern culture and human nature.....On the more acute cases of maladjustment the more probable solution of the difficulty lies not in attempts to change human nature but rather in attempts to change culture..... On the other hand the nature of cultural growth and change shows that it is futile to plan any wholesale and powerful control of the course of social evolution. Directing the change of culture is much more difficult than is customarily conceived. It is, however, not necessary to change culture as a whole, for relatively minor changes may result in much better adjustments. 氏は社會改良には、兒童の保護、母親の感情の增加、性教育、社會習慣の變更、勞働時間の減少、利己心の統制、特別なる社會的方案、娛樂などを導入しなければならぬと言つてゐる。

人類社會のかくの如き窮狀に於て、如何に個別的救助が望ましとしても、これをその儘實行することの不可能なるは一見明瞭である。救助は歷史的なるもので、十抱一束といふようなことを容るゝ餘地は毫もないから、因果的に量に基き物的器械的にそれを取扱ふことは不可能である。然るに集團的に一時に大量に及ぼさなければならないのが現代の必然的要求で、如何ともなす能はざる底のものである。こゝに於て、量的でありながら質的なる方法を要する。この要求に應じて現はれ來りしもの卽ち統合社會事業である。

統合社會事業は未だ十分なる限定を加へらるゝにいたらない。素朴なものとしては在來のものを用ゐるのであるが、形態論的分析に基くものにあらざれば、眞の統合社會事業といふことは能きない。よつて私は嚴密にいふ統合社會事業を「本質的社會事業」として此と彼とを區別する。本質的統合社會事業は形態論的統合社會事業のことである。すなはち、それは形態論によつて基礎づけられたる統合社會事業の謂ひである。形態論は私獨自の研究に屬するから、統合社會事業に於ても一般に未だ形態論を基礎とするにいたらない。素朴な限定せられざる統合社會事業は私の所謂統合社會事業ではない。それは形態論的統合社會事業に達する豫備的のものであるに過ぎない。

統合社會事業に於ては個別的集團的取扱方法としてそれを限定するから、それは集團的困窮を取扱ふことが能きると共に、集團的なるものを同時に個別化することができる。如何にして集團的なるものを個別化しうるか。又個別的集團的方法と集團的個別的方法とは如何にその性質を異にするものであるかについては精細なる分析闡明を要するが、これについては節を改めて統合社會事業學論を行る折りにゆづる。

統合形態に於ては統合さるゝ機能も機關も各獨立するものと解せられ、獨立する機能と機關とが一組織內に統合せらるゝことを意味する。一組織內に獨立する機能は統制その宜敷きをうれば調和するが、然らざる場合には反撥し矛盾し衝突する。一組織內に獨立する機關は調和することもあるが、時

に兩者の權限を主張して譲らず、方針を異にし、實務の範圍を同じうして相爭ふなど、兩者は紛爭とも排擠ともなる。二の異なる機能と機關との統制は熟練にまたなければならぬが、多くの場合、好成績を擧ぐることは困難である。獨逸のヱ法は全體に於て個別的機關と集中的機關とを巧みに統合せし例證であるが、素より兩者の統合には苦き經驗を嘗めてゐる。我國の方面委員制度に於ける中央局と方面委員との統合に於ても未だ一も好成績を擧げしものはない。その最も成績優良なるものと言はるゝ某大都市の施設に於ても、方面委員の權限餘りに大にして中央機關の威令行はれず、ために都市救貧事業は支離滅裂の觀がある。若し、それ特志方面委員の活動鈍く、職責を解せざるものにあつては、萬事中央機關に於て代辨し執行せざるべからざるが故に、個別機關とその機能とは有つてもなきが如き姿態を呈する。かくて一見個別機關と集中機關との統合は困難である。

この缺陷を補正するもの卽ち融合形態である。融合形態に於ては、二として個別機關と集中機關とが存せし狀態より一として個別機關と集中機關とを併合し、二の機能を一機關の表裏關係のものとする。統合形態にあつては一組織内の二機能二機關であるが、融合形態にあつては一機關の二機能たる形をとる。一機關の二機能は一以上の形式をとることが能きるが、かくして融合されたる機能と機關とは一にして二にあらざるが故に、兩者の間に對立關係の生ずる憂はない。

融合形態には一機關内に二の機能が區別せられ組織せられるけれども、全一形態に達すれば一機關

内に個別的と集團的との二機能が再び融解して一機能となる。この一機能は個別的集團的＋集團的個別的といふことで表示せられる。統合形態は一組織内の二機能、融合形態は一機關内の二機能、全一形態は一機關内の一機能としての同時的二作用たることを表示する。これを機能より見れば統合形態は個別的集團的なるもの、融合形態は個別的＋集團的なるもの、全一形態は個別的集團的×集團的個別的なるものである。統合形態にあつては個別的と集團的とは對立關係、融合形態にあつては兩者は協調關係、全一形態にあつては兩者は同時關係である。かくて關係形態はその進化の頂點に達する。

二　經營形態

現時に於ける困窮は集團的なるものである。勞働者といふが如き具象的なものではなく、「勞働者全體」といふが如き抽象物に向つてなされ、貧民ではなく、「貧民全體」といふ觀念的存在に向つてなされる。これが現時特有の社會事業形式である。戰後歐洲諸國に於ける社會救助は公的なものとなり、益々公的なものになりつゝあるが、これ集團的困窮の發生によつてさうなつたのである。そこで、地方的な公的集團事業も國家的な公的集團事業も現はれねばならぬことになつた。機關が大となればなる程形式的となり公的となるけれども、集團的困窮が發生する限り、大なる權限と機關とをもつ國家的機關の現出を如何ともすることが能きぬ。米國の社會行政組織は分散的なものであり、個別機能を

體現するには都合のよいものであるが、集中的機能を表現するに困難を感ずる。州監督局や州管理局の出現はこの缺陷を矯むるためで、統一機關の導入の起因は Proceedings of the Annual Meeting of the National Conference of Commissioners on Uniform State Laws, Part II, Sec I によれば When these agencies for uniformity are examined in the light of the great a diversity of organization and when the cost is estimated, it becomes evident that from the point of view of need the conditions in the country as a whole calling for the creation of central unifying and standardizing authorities are similar to those in the states the led to the creation of the state boards of charities となつてゐる。この結果は地方的創意は必ずしも官僚的雰圍氣によつて窒息せしめられず、Federal Child Labour Act や、Maternity and Infancy Act にも創意を加ふることができ、國家社會法制は stimulated activity, sympathetic cooperation, variety of treatment といふことで、生氣のあるものとして現はれた。但し、いつでもかくの如き個別的なものとしてそれを體現することは性質上困難である。けれども、大なる集中機關は集團的困窮を取扱ふ上に於て生ずる必要から必ず現出しなければならぬ。かくて夥しき集團的困窮の發現によつて大小の公的社會事業が社會改良の領野の中へ出現するにいたつた。

公的社會事業として經營せらるゝものは公的經營形態である。公的經營形態は法制とか規則とかといふやうな普遍的手段によつて貧民全體とか、勞働者全體とかといふ抽象物を取扱ふものである。我

國に於ては大正七年以來、勞働者全體、貧民全體、少數同胞全體、國家的家政經濟、農民全體、國家的思想善導といふが如き集團的困窮が頻出し、これが集團的な社會事業を起す機緣となつた、我國の集團的な社會事業はかくして出現するにいたつた。これに應じて、道府縣及都市に社會課社會部社會局がつくられ、よつて公的社會事業の經營を全國にひろぐるにいたつた。こゝに於て、我國でも、公的經營形態が導入せられ確立するにいたつた。公的經營形態は集團的で、それには質の限界が附隨する。

これに對し私的經營形態は個別的で、それには量の界限がある。私的經營形態に於ては個々人の要求や境遇を一々見とゞけ、それに對應することができる。人間より人間の救助を遂行しうるものは私的經營形態の特徴である。公私混合形態はエルバアフエルド法や方面委員制度の如く公私の機能を統合するものである。公私混合形態は今後益々增加するであらうし、又增加しなくてはならぬ。今後社會事業の經營方針は大體特志家本位主義となし、集中機關はこれが機能を表現し發揮せしむる中介物たる役目をつくすものとならなければならぬ。單なる集中機關は如何にしても形式化官僚化しなければならぬから、公的經營の盛なると共に、これに私的機能を加へ、個別化する用意がいる。こゝに統合形態も公私混合形態も現はれるであらう。

宗教的形態は公的經營形體とも私的經營形態とも異なる。一見、宗教的形態は純然たる私的社會事業

に屬するが如くであるが、宗教的社會事業はそれ以上である。寺院や教會の社會事業は宗教政策の一部分である。宗教社會事業は私的なものとして個別的な救助や愛のはたらきに集中するのではなく、心靈的王國を擴張する一手段として社會事業に當るのである。寺院や教會本來の目的や使命は心靈的なものであるが、それが社會的なものたるを要するは、それが宗教政策の一部分となり、心靈的王國を擴張するはたらきをもつからである。それ故、宗教的社會事業は私的社會事業であるけれども、それは純然たる私的社會事業ではなく、一種特別な社會事業である。こゝに宗教經營形態を公的經營形態と私的形態とより區別する理由がある。

救助機能進化の見地より見れば、集團的なる公的經營形態は個別的なる私的經營形態に進まなければならず、更に、愛と心靈とによる宗教的經營形態にいたらなければならぬ。心靈化せし社會事業は最も完全なる社會事業である。社會化と心靈化とは相前後して進むが、社會事業が最後の發達を遂げんとすれば、社會的なるものはもう一度心靈化しなければならぬ。公私混合經營形態は公的經營による集團的なるものを混合形態としてこれを個別化せんとする義による。

三　種別形態

私にあつては社會事業に五分類を施し（「社會事業概論」第三版一七九―一九〇頁參照）(一)一般社會

事業（Allgemeine Wohlfahrtspflege）(二)保健社會事業、(三)兒童保護事業、(四)教化社會事業、(五)經濟保護事業の五となす。「社會事業概論」には第三編に於てこの分類に基き各論的記述を載せたが、分類は單に學の便宜に從ふ見地によるものに過ぎない。社會事業にあつては嚴密に分類することは無論できない。保健社會事業と云つても身體のみに關するものではない。身體的缺陷は精神的缺陷にも倫理的關係にも經濟的缺陷にも關係するから純粹に各論的缺陷と言ふが如きものはない。身體的缺陷は經濟的な缺陷により、それが貧乏であるといふことからも發生する。萬年夜の百軒長屋で日光も空氣も通はぬ密集生活をなすに於ては身體の缺陷は自づから發生せざるをえぬ。倫理的缺陷は又身體的缺陷へと導くであらう。性教育も行はれず、貞潔觀念も養はれず、情意的鍛練もなされないものが花柳病に罹るのは何の不思議もないであらう。又飲酒に耽るも如何ともなす能はざるべく、これ亦やがて身體的缺陷となつて現はれるであらう。然らば保健は教化社會事業にも經濟保護事業にも關係するであらう。純粹保健事業といふが如きものは單に紙の上での存在で事實としては存在しないであらう。兒童保護に於ても純粹に該部門に止まることはできぬであらう。それは教化にも保健にも關係するであらう。托兒所は兒童の生理的保護や身體の發育を計るものであるが、これは又學校教育とも混同されるであらう。獨逸の托兒所は殆んど全く前學校教育をなすところとして取扱はれ、在來の意味は喪失したが、單に兒童の惡化を防止し身體の發育を目的として始められたる勞働婦人保護機關も時を經るに從

ひこれに組織的訓練と教育とを加へんとする衝動は避けがたいであらう。かくて、兒童保護と教化とが混同されるにいたるでもあらう。それは又保健とは切り離すことの能きぬものとして發達するでもあらう。嬰兒、幼兒、少年少女及學童の保護が總べて保健と切り離すことの能きないのは自づから明ではないか。教化社會事業も經濟社會事業もかくして他の部門と關り合ひ乍ら進行する。かゝる見地に於て、純粹に保健事業、兒童事業、教化事業、經濟的保護事業として分斷さるゝようなものは現實としては存在しないことになる。

一般社會事業に至つては、それは das ganze Leben umfassend und ergreichende Fürsorge のことであるから、生活の全側面を抱擁し、その中に織り込まれたるものは、何一つとして彼此分斷することはできない。經濟的に貧民を救助するといふような形式の極めて不完全であるは言ふまでもない。自助にいたらしむるのが貧民救助の奥祕でなければならぬが、然らば、貧民救助には勞働意志を作興し、獨立自存の念を養はなければならない。よつて、貧民救助と雖も純粹經濟的なることは能きず、教化的とも倫理的ともならなければならぬ。一般社會事業は生活の總べての側面は分斷しうべからずとなし、又總べて包括する主義により全生活を抱擁し、全一的救助を以て任ずるもの。これが一般社會事業の字義の生ずる所以でもある。

種別形態は五分類として示さるゝが、それは學の便宜に從つてさうであるに過ぎない。現實としては何づれも彼此分斷することができない。種別形態は相對的區分で絶對的區分ではない。これ等種別形態一切の基本たるべきものは一般社會事業であり、これによつても社會事業對象が綜合的のものなるを知ることができる。一切は融合歸一して全一狀態に歸入すべきであるが、しばらく特殊化的側面に基づき種別によつて治療を加ふる意を明かにするに過ぎない。眞の治療は一般的のものであるから、何づれにしても、すべては一般的保護に歸へつて行くが、一般社會事業はその一種たるまでゞある。

參考文籍

(一) 海野幸德、「社會事業とは何ぞ」第五章、第三、第四章
(二) 海野幸德、「貧民政策の研究」第一編、第一章、第七、第八節
(三) 海野幸德、「社會事業概論」第二編
(四) 外國文獻は「社會事業とは何ぞ」第五章のものに同じ

第三章　社會事業形態の發生史

一　形態進化の方向

形態進化の方向は體驗的形態より個人的形態に、それより集團的形態に及び、ついに統合形態に極まと考へるであらう。但し、眞の形態的進化は斯くの如き一方的なものではない。統合的なものは再びその機能を一は個人的形態に、他は集團的形態に返へし、集團的形態は個人的形態に復歸し、個人的形態は更に體驗的形態に歸入還元するを見る。これが形態進化の方向である。單に體驗形體より集團的形態にいたるものを私は一方的進化と云ひ、それより再び體驗形體に還元するものを復合的進化といふ。

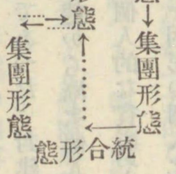
實は單一進化(一方的進化)と雖も一方的軌道を辿り、その頂點たる集團形態若くは統一形態にいたるを目的とするものではないが、たゞ一方的進化の頂點に達するに際し、小憩するから、その如き誤解を起し錯覺を生ずるのである。體驗的機能は基本的なものであるから、諸形態をこれより切り離すことは絶對に許されないが、一時の便宜に從つて全一が不完全なる無限の結合となり、更に、結合をほぐしてその要素を遊離し、その一々の上に集團形態を設定するに過ぎない。この事は、救助意識上、人間感覺上絶對に許されざるところであるから、一度び硬化してその生命を失ひし集團意識は再び大

急ぎで復路をとり、個人形態を通過して體驗形態に復歸還元するであらう。これによつて形態進化の方向は明かである。

形態進化の方向は

體驗形態→個人形態→集團形態→統合形態

の形式をとらずして、次の如き形式をとる。



前者の如き形式を以て形態進化の全程と誤解するものが多いが、形態發生の全程は後者に示す形式の如きものである。

二　形態の階段的發展

形態は(一)全一的體驗的なる階段より、(二)個人的階段に進み、それより(三)集團的階段に達する。

體驗的階段に於ては主客未分の狀態にある。助ける者、助けられるものといふ意識なく差別がない。

原始社會に於ては貧窮や疾病や老衰などは凡て部落のものと見られ、個人のものと解釋せられなかつた。個人の貧窮や疾病は部落の貧窮と疾病とであるから、助けるものと助けられるものとの對立がなく、又助けて貰う、助けてやるといふ意識がない。助け助けられる體驗が渾然一體としてあるだけである。この原始的な救助より漸次封建時代のものに推移したが、こゝでは契約による君と臣、指導者と服從者とが現はれ、一地域を劃して集團生活を營んだ。封建時代には未だ個人の解放なく、集團を生活の基準としてゐた。集團内に於ける貧窮や疾病や老衰は矢張り個人のものであるよりも集團のものであり、集團の責任であつた。封建社會に於ては大體地方的關係近隣關係に終始し、隣人の觀念が鮮明であつた。この狀態から漸次個人の解放が行はれ、個人は集團から遊離するにいたつた。かくて集團の責任にあらざる個人的な貧窮や疾病や老衰が現はれ、救助の歸屬なるものなく、困窮者は社會に放任せられた。これを困窮の個人化と云ひ、街頭化といふ。現代社會に於ける夥しき困窮はこれが歸屬を求むる能はざるにいたり現生したもので、言はゞ個人解放の結果に外ならない。

現時に於ては集團的困窮を取扱ふけれども、歐洲大戰前までは救助は隣人相互のものであつた。救助は集團に向けられず個人に向つた。これを個人的階段といふ。個人的階段は慈善事業時期に一致する。個人的階段では救助は隣人と隣人との關係であつた。それは優越な個人が低劣な個人に恩惠として雨下する形式をとるものであり、富裕なる隣人が貧窮する隣人に施與をなす形式をとるものであつ

た。個人より個人、隣人より隣人といふ形式が個人的階段の特徴である。

個人的救助形式は困窮が集團的となるに從ひ、これを用ゐることが漸く不可能となり、集團を對象とするにいたり、集團的な社會事業が現はれてきた。歐米諸國及我國に於て一樣に戰後社會事業が發達するにいたりし所以のものは戰後特に集團としての困窮が瀕出したからである。こゝに於て個人的階段は去り、集團的階段が現はれた。

但し、形態進化の方向が一方的なものでなく、更に、復歸還元の過程をとるものとすれば集團的階段は再び個人形態に歸へり、個人的階段は體驗的階段に還元されるものと解釋さるゝであらう。この場合、往路は體驗的全一より集團形態に進み、歸路はそれより概念的全一に向ふ。

三　形態の内容的發展

最初に現はるゝ救助は全一に向けられる。ganze Leben umfassende なるものが最初の救助の特徴である。個人形態の對象は無限の結合であるが、體驗形態の對象は全一である。全一的救助は概念によつて捕捉しがたきものを反省を經ずして直觀的に洞察し、直接に生ける生命としてそれを把握する。無限の結合に於ては、身體的とか、精神的とか、保健的とか、經濟的とか、倫理的とかといふものが既に分斷されて居るが、全一に於てはそれ等はいづれも融合して渾然一體をなす。そこでは無限に結合

するのではなく、總べての契機が融け合つて完全態として現はれて居る。全一による救助は主觀的とも客觀的とも名づくべからざるものであるが、無限の結合に於ては半ば主觀的半ば客觀的である。それは間接的なるよりも直接的であり、反省するよりも體驗的であり、意識的なるよりも無意識的である。

形態の原始狀態はかくの如き全一として存在するが、主觀と客觀との分裂あるや、全一として存する對象は忽ち無限結合の狀態に轉ずる。この場合、無限に結合すべき要素と有機的結合との二が指呼せられる。個人や個性を形ちづくるものは無限數の要素であるが、個人形態に於ては要素の分裂と出現とによつてそれが無限に結合する姿態を現はす。身體的なるものも、精神的なるものも、經濟的なるものも、倫理的なるものも相錯綜しながら存在する。この場合、救助はその錯綜關係の上になされるもので、或は身體的、或は精神的、或は經濟的、或は倫理的といふような分斷の見地によつてなされるものではない。個人形態に於ては人間より人間への救助形式をとるが、それは人間の一部分、その要素のあるものへ救助が向けられるのでなく、個人、個性といふが如き全的なものにそれが向けられるのである。嚴密に全的なものとしての個人や個性に向けられるものは全一でもあるが、たゞ全的なものに向けられるものは無限結合でもある。個人形態の場合には無限の結合として個人、個性に立ち向ふ。言はゞ、要素的救助が個人形態のものである。但し、個人形態に於ては要素は一般的なるものではなく、特殊的のものであり、概念的なものではなく具體的なものであり、形式的なものではな

く內容的なものである。なほ要素は全的な個人、個性に基くものであるから、それは要素であつても遊離して存在するのではなく、結合して存在するのである。それは一定の形式の下に有機的結合として存在する。

形態は全一的形態より主觀客觀の分裂により、その內容を要素として呈示し、無限結合の形式をとつて個人形態に進展する。個人形態の含む無限の要素は更に遊離分斷の過程をとるにいたり、その結合は失はれ、單に要素として取扱はるゝにいたる。要素を對象とするものは集團的社會事業である。無限の結合と言つても既に個性、個人といふが如き全的な姿と意味とを多少喪失したものであるが、集團社會事業にいたり全く個性と人格とを失ひ、個性と人格とは器械的にその構成要素にほぐされ一々要素を呼び起し、それを對象とするにいたる。要素は個性と人格とに入り込むことに於て始めて意味があるが、それと離れて一々遊離し個々の要素となるに至り全く人間的意味を喪失して物的なるものとなり、器械的なるものとなる。無限の結合は多少生命を失つたものであるが、それでも未だ人間的なものたるを失はない。集團形態にいたつては生命を構成する細胞が分離してその生命を失ひ、更に、それが細胞膜だの染色體だのといふ解剖的存在となつて全く物的なものとなるが如く、それは無限の結合より遊離して要素化し、全く生命の意義を喪失して器械的なもの物的なものとなる。

形態の內容的發展は生命としての全一より、多少生命を失つて物化の途中にある無限の結合にいた

り、竟に全く生命を失ひ人間的ではなく物の世界へ入り込んで要素化する集團形態に極まる。然るに、要素として存在する困窮は物の困窮であつても人間の困窮ではないから、それは再び生命を恢復せんとする努力となつて現はれ、集團的なるものは個人的なるものとなり、更に、個人的なるものは全一的なるものとなつてその內容的發展の全程を終る。されば內容的發展に於てもその發展は單に體驗的→個人的→集團的たるにあらずして、更に集團的→個人的→體驗的となり兩者を合してその全程をつくすものとなつて現はれる。

參考文籍

(一) 海野幸德、「社會事業概論」第二編、第一章—第五章
(二) 海野幸德、「社會事業とは何ぞ」第五章第五節
(三) 海野幸德、「貧民政策の研究」第一編、第三章—第六章
(四) 海野幸德、「方面委員制度指針」
(五) 海野幸德、「婦人方面委員の研究」
(六) 外國の參考文籍は「社會事業とは何ぞ」第五章のものに同じ

第四章　形態的定量の法則

一　形態の內包と外延

一定の社會一定の時期に於ける救助意識の總量は一定するものと見做すことができる。一定社會及一定時期に於ける救助意識の總量は增減することが能きないから、一社會一時代の救助は一定總量の意識によつて救助を遂行することゝなる。一社會一時代の救助意識を「救助意識の總量」と言ひ、その最高限度を「救助意識の界限」といふ。

體驗形態の內容は最も豐富であるが、その外延は最小である。體驗形態に於ては救助意識は悉く一個人に集まり、全一に向ふから、聊かも分裂なく、內容は最も豐富である。但し、その外延に至つては單に個人より以外には出でない。無限の結合に至つては、救助意識は要素に分斷されて分散するから、個人に向ふ意識はそれだけ外延に放散してその內容を稀薄にする。無限に結合する要素が一々救助意識を吸收する結果として、一々の要素に占斷さるゝ救助意識は時に極少である。無限の結合に於ては或は身體的或は精神的或は經濟的或は倫理的となるから、その一々に占得さるゝ量は全一の場合の如く一所に總べてを專注するが如く豐富なることはできない。

無限の結合より要素を遊離する集團形態に至つては要素を基準としてそれと同じものを際限もなく

寄せ集めるから救助意識は分散の極に達し、時に抽象の極無内容に等しき狀態となる。集團的救助が興味索然たるものであり、眞情も愛も極めて乏しき理由はこゝにある。一時に數十萬數百萬に及ぶが如き救助意識はその外延は極大であるけれども、その内容は殆んど無に等しい。これ國家乃至國際的社會事業なるものが眞情と愛とを缺き、單に政治家の器械的形式的な作業たるが如き觀あるはこれが爲めである。

形態的定量の法則より觀たる内容と外延とは反比例の關係にあり、内容豐富なれば外延狹小となり、内容稀薄となればそれだけ外延を增大す。

現時に於ける救助は集團的困窮に對するもので、それが無限の困窮者に分散する底のものであるから、その内容は極めて稀薄とならざるをえぬ。十哩離れた貧民より電話でその窮狀を聽く官吏の眞情と愛とは稀薄ならざるをえぬ。多數の困窮者を取扱ふ者が一々その窮狀に同情し共鳴するは全く不可能である。すでに多數に救助意識が分配さるゝことから困窮者の一々に對しその意識の空疎なるべきは自づから明かである。若し救助者のもつ救助意識の總量を多數の困窮者に傾注するといふことであつたら、その救助意識は涸渴するものと思はなければならぬ。最も多く最も廣く救助意識を分散せざるべからざる現時に於て救助意識の豐富なるを求むるは木によつて魚を求むる類である。現代社會事業に愛と眞情とが一見缺乏して居るが如く思はるゝはこれがためである。前代に於けるが如く隣人に應對

するものと、抽象的な幾百萬の貧民、幾十萬の勞働者に應對するものとは全く類を異にする。現代人の眞情と愛とが前代人に劣つて居るがため、かくも冷淡、かくも興味索然たる世態を現出し居るにあらずして、その表現の方法が集團的となり抽象的となつたからである。前代と現代との愛の總量を測定することは殆んど不可能である。然らば、現代の愛の總量が前代に及ばぬと斷定することも亦不可能であらう。たゞ打ち見たるところ現代人の眞情と愛情とは極めて稀薄にして空疎なものである。前代に於ける隣人は現代に於ては都市人となり、前代に於ける慈愛は現代に於ては救助の商取引となつた。救助意識の内包と外延とは反比例の關係を以て進退し、一社會一時代の救助意識の表現を左右する。

二　救助意識の純化と强度

數百萬の貧民に共通な救助意識は殆んど無内容に等しい。世界に遍在する勞働者の窮狀を思ふ意識は單に觀念的のものであるに過ぎない。かくの如き廣き範圍に及ぼす意識の强度なるものは極めて微弱である。一時に數百萬の貧民に向ふ社會政策家や政治家の慈愛なるものは、無内容に等しい。かくの如き人々は口に人類愛を說くと雖も、その意識は空疎で眼前に現はるゝ個々の困窮者に對しては冷然たるものがあらう。これに對し、個々の貧民に應對する慈善家の救助意識は强く且つ純なるものがあらう。生命そのものを抱擁する體驗的救助に至つては魂と魂とが相ふれ相打つ底のものであるから、

救助意識は極度に強くかつ純化の限りをつくすであらう。

現時出現せし社會事業は客觀的窮狀を對象とするものであるが、それは一時に多數のものに救助意識を分割するため、愛によつて愛を見失ふ結果となり、恰も國にも國際間にも愛なきが如き姿態を呈す。政治家の社會政策や國際聯盟の社會的活動は抽象的な人道であり形式的な辭令であるかの如き觀がある。如何に政治家や政策家の愛情が强盛なればとて、數人の隣人に示現しうる愛情を一國と世界とに及ぼすことはできない。全階級全國民全人類に及ぶ愛情なるものは單なる空名である外何ものでもないであらう。

現代に示現さるゝ社會事業及社會政策に於ける同情と愛とは抽象化して中性なるものとなり、人間的なるものより物の世界に入り込み物としての心情と愛となつて現はれる。德富蘇峰氏は「道端の巡査、道を聽いても碌々返事もしない。郵便局の受付、用事を賴んでも不精々々の體たらく。何處を廻つても、不親切もて鼻を突かぬところは無いかの如き狀なるは抑も何故であらう……吾人は世界の風儀が何故に斯く迄荒みつゝある乎に就て種々の疑問を持つてゐる。されど此の場合には我も人も先づ親切第一の警語に目を醒ましたいと思ふ」と言つて居られるが、これは現代人が不親切だといふよりも時代が變つたのである。親切は都會より田舍に多い。都市の生活は最早隣人の生活ではなくなつた。愛と心情との意識は時代によつてその表現を異にする。愛や心情が減り不親切になつたのではなく表現の方法が變つたのである。京都人は一度御辭儀をして別れたかと思へば又振りかへり再び向ひあつて御辭儀をする。かくすること數回にしてやうやく離れ去る。これを大阪の眞中で行つたらどうか、更に紐育や倫敦でこんな眞似ができるかどうか。巡査の不親切も郵便局員の無愛想も境遇の變化に應じて現はれたまでゝ、それ等の人々が特に不親切になつたのではない。各國各時代の心情と愛の表現は異ふ。

救助意識はその範圍の小なるに從ひ、純化してその强度を增し、範圍の大となるに從ひ、中性なるものとなり、その强度を減滅する。

三　形態間に於ける救助意識の分有

一社會一時代に共存する諸形態が救助意識を分有する程度に應じて、この社會その時代に於ける形態を異にする。若し、一時代一社會が憐人の形式で同類接觸し應對するとし、その社會その時代の意識の總量を獨占するとすれば、この社會この時代のものは個人形態であると言ひうる。

個人形態が一時代一社會の有する救助意識の總量の大部分を基準として分有するなれば、その時代その社會の形態內容は個人的である。封建社會に於ては現時の如く人口の流動はげしからず、大體、血緣關係の上に立つて居つたから、個人間の關係は親密で、相互扶助の生存形式をとつて居た。この

時代の生存形式は近隣關係であつたから、集團の生活は恰も一單位一家族の如きもので、個人はいづれも集團によつて保護せられた。かくの如き時代かくの如き社會の生活が親密であり溫情があるのは自明である。この時代には近隣に對しあらゆる愛と心情とを注ぐことが能きたから、個人間の關係は極めて親密であり人間的であつた。現時に於ける大都市の生活は器械的で人間的感覺を失ひ、物としての生活關係をとつて居るけれども、個人形態による生活は隣人愛に終始した。社會事業の目標は國民乃至全人類の福祉といふが如き範圍の大なるものであるから、個人に加へる愛と心情とは稀薄であるけれども、個人形態としての慈善事業の目標は隣人の福祉であるから個人に及ぶ愛と心情とは濃厚にして眞實に充ちて居る。社會事業は物としての特徴、慈善事業は人間としての特徴、社會事業は形であるが、慈善事業は心情である。その外、慈善事業は宗教的であり、神明の聖意として神喜び給ふ神望み給ふとして愛情を隣人に分ち與へる。慈善とは神の愛で、神の愛を隣人に分ち及ぼすものに外ならぬ。慈善は helfende Liebe であり、神に醉へる心をもち隣人に奉仕する。社會事業では物を與へることを目標とするが、慈善事業では心を與へることを目的とする。集團的救助はその範圍が廣いから心を與へることはできない。それは心情の極めて稀薄なもので、そこには器械化と物化とが現はれるから、單に形の上で助け、物として取扱ふ外はない。これに對し、慈善事業では範圍が小であるから、個々に對しあつき情と愛とを注ぐことができる。そこには人間愛と心情とがあり、金品を施與す

るといふような器械的物的な救助をなさずして心と魂とを與へる。慈善にあつては心なく情なくして施與することはこの上なき曲事であるが、社會事業では素より心もなく情もないものであるから、たゞ物を與へ形を整へれば足りる。慈善に於ける施與は善なる心情の開展であり愛の發現であるが、社會事業に於ては單に施與の故に施與をなす。慈善に於ては救助の故に救助をなし、それ以上何ものをも望まざる心境であり、神に醉へる愛、人間愛の至境にいたるをその目標とする。社會事業は愛なく外形につきるが故に、社會事業家は各種の表彰を國家や社會より期待するが、慈善家は心と情との發露が無限の報酬であり自づからなる慰藉であるとなすが故にそれによつて表彰せらるゝことを避け、これを一種の醜事であるとさへ解する。社會事業は救助の商取引であるが、慈善事業は稀有な天上界の聖事である。

個人形態がかくの如き現はれをもつ所以のものは、それは救助意識を隣人に傾注するからである。そこでは救助意識を分配する範圍も狹く、分有する救助意識は濃厚で親密で愛と心情とに終始することができる。一時代一社會の救助意識の總量若くはその大部分を個人形態が占斷すればこの社會この時代のものは個人形態をとり慈善事業時期を形づくる。中世や歐米大戰前の救助形態は大體個人形態だとすることができる。

歐洲大戰後に於ては各種の困窮が瀕出したから、この一時期の占有する救助と意識は大なる範圍に

及ぶを餘儀なくされ、かくて器械的となり物化するにいたつた。こゝにObjektive-Notständeといふが如き厭ふべき前代未聞の困窮が現はれてきた。客觀的窮狀などといふものは物に屬し、人間の世界に關係のないものである。それは抽象的で、因果的で、客觀的で、勞働者全體とか貧民全體とかいふように人間を物化して取扱ふもので人間界のものではない。勞働者全體や貧民全體に對しては心情も愛もかれはて、涙も血もない冷血そのものとなつて對應さるゝ。杓子定規だの、形式だの、冷血だのといふことにならなければ社會事業の達人たることはできない。但し、社會事業にも無論愛と心情とがあり、愛なくして社會事業を行ひ、社會事業家たるは此上もなき曲事であるが、慈善事業に比較すれば、それは杓子定規であり、形式的であり、冷血漢であつて、單に救助の商取引をなす社會的商賣人たるに過ぎないであらう。かくの如き社會的商賣人の横行する冷血なる天地が歐洲大戰以後出現したのである。

現時に於ては集團的困窮に對應して集團的形態を以て救助を進めることゝなつた。それは國家的な事と共に、時に國際的でもある。無數の國民や數限りなき世界人類に向つて分配する救助意識はそもく如何なるものであるか。到底かくの如きものに對し救助意識と名付くる價値さへあるものではないことを感ずる。集團時代には集團形態を基準となし個人形態を副とし、或はこれを排除し、體驗形態の如きは全然除外せられる。各時期の特徴に應じ、特定形態を基準とし、他の形態を副となし、若くは排除する形をとる。かくて一時代一社會の救助形相が決定せられる。現時に於ては集團形態を基準とし、個人形態を副とし、若くはそれを極力排除する形式をとつて居る。

集團形態時代にその他の形態を副とし若くは除外する所以のものは形態的定量法則の現はれであるまでゝある。一時代一社會に於ける救助意識の總量は一定して居るから集團形態を基準としてそれに獨占さるゝが如き時期に於ては、その他の形態に分配するが如き救助意識が殘り少ない。集團形態以外分配する救助意識がなく若くは乏しいといふことに於て現時に於ける救助形相が定められる。個人形態と集團形態とは平行することができない。一は他の領土を蠶食してその存在を保全するから、一が盛なれば他が衰ふといふ關係を生ずる。歐洲大戰後現はれし集團形態は日に月に個人形態を驅逐し排除し、暴威をふるひつゝあり、救助意識は硬化して器械的なものとなり、益々人間的意義を喪失しつゝある。

四　個別形態と集團形態反比例の法則

集團的形態の盛なる現時の如き時期に於ては個別形態はそれだけ減衰せざるをえない。集團形態が救助意識を吸收し分有する程度が盛なれば盛なる程それだけ個別形態は減衰しその極その存在を認められざる狀態に及ぶ。個別形態の場合もこれと同樣である。中世及近世にいたるまで隣人の相互扶助

が盛に行はれ、集團的困窮の出現なく、個々救助したから、この時代には大なる範圍に救助意識を分配する必要なく、從つて、集團形態は認められず、若くは排除されて居た。

かくて、個別形態と集團形體とは反比例の關係にあるといふ法則が設定せられる。

個別形態盛なれば集團形態衰へ、集團形態を基準とすれば個別形態副次となるといふ關係をもつ。これを公私社會事業に當て嵌めて言へば、公的社會事業盛なれば私的社會事業はそれだけ減衰するといふことになる。かくて、公私社會事業反比例の法則なるものが設定せられる。歐米及我國に於ける公私社會事業の關係については別に一々分析闡明するが、歐洲大戰後にいたり、世界を通じて公的社會事業が流行の域に入り、それだけ私的社會事業が副次となりし如き觀がある。たゞ公私社會事業の關係は兩者併立關係の一にあるが如き單純なるものではないから、兩者は再び別の法則の影響を受くが、大體大戰後歐米諸國及我國に於ける公私社會事業の關係は一が盛になれば他がそれだけ減衰するといふ關係に立つ。今や、我國の社會事業界は私的社會事業減衰の方向をとり（その數に於てその施設の種類に於て未だ減退の跡を示さないが、その價値に於て、その重要性に於て副次のものとなつた）私團體は一樣に怨聲を放ち、その維持その經營の困難なるを訴へ始めた。これ我國に於ける私的社會事業の衰徴であるが、それは貧民、勞働者等以下七種の集團的困窮の出現に對し集團事業の勃興となり、それだけ私的社會事業が排除されたことを物語るものに外ならぬ。我國將來に於ける公私社

會事業の關係はかくの如き簡單なものとして發展するとは考へられないが、一と先づ、我國に於ける公私社會事業の關係は反比例の法則に支配さるゝと見ることができるであらう。

但し、個別形態と集團形態との關係は一にあらずして、二であると考へられる。個別形態と集團形態とが路傍の人の如く彼我關せず焉と進行する場合には一が盛なれば他が衰ふといふ關係にあるけれども、兩者が各地を回顧し合つて進行すれば兩者は相反關係より補充關係に轉ずる。この場合、私はたらきかけるといふ。個別形態と集團形態とが補充するときは react とするのであつて、個別形態が集團形態に反應し、集團形態が個別形態に反應するのである。個別形態と集團形態とが反應するときは兩者は相反より補充に轉ずるから、反比例の法則より離れ去り、別の關係をとるにいたる。

五　個別形態と集團形態平行の法則

個別形態と集團形態とがはたらきあひ乍ら進行するときは兩者は補充關係にあり、一は他を率ゐ一が盛なれば他はそれだけ衰ふるといふ關係に轉ずる。一の盛衰は他の盛衰を隨伴するといふ形をとるから、個別形態と集團形態とは平行の關係にあり、この場合兩者は平行の法則に支配せられると言はれる。

これを公私社會事業に就て見るに、歐米諸國の中、公私社會事業を平行の關係によつて律せんとす

る方針を樹立するものは少くない。獨逸に於て法律により公私社會事業の補充を命令して居るが如きこれである。公私社會事業は兩者同一なことをなすのではなく、一は集團を他は個人を對象とする。その救助も亦一は集團的救助であり、他は個別的救助である。それ故、兩者は同一のことをなし相競ふのではなく、社會を全體としての見地に於ては兩々必要たるの見解に達する。如何に集團的形態の隆盛なる今日と雖も個々の貧民個々の老衰者個々の疾病者の存在をも否定することはできない。大體、集團的困窮として十把一束に扱つて行くが、個々の窮民は個々として取扱ふの外はない。そこで、社會を全體としての見地から眺むれば、集團事業も必要であれば、個別事業も必要であるといふ見解に達する。こゝに兩者の相關々係、補充關係が設定せられ、大體一が盛となり又衰ふれば、他も亦それだけ盛となり又衰ふといふ關係をとる。これ卽ち個別形態と集團形態平行の法則である。

但し、個別形態と集團形態とが如何に平行の關係にあるかに就ては兩者の界限についての認識を經なければならぬ。

六　個別形態と集團形態との界限

個別形態には量の界限があり、集團形態には質の界限がある。この二の界限によつて兩者はそれ自づから全からず獨存することの能きないものなるを知る。

集團形態は愛によつて愛を見失ふが如きものである。それは人間を救助するものとして出發して居ながら、人間を救助せずして物を救助する形式をとる。客觀的窮狀などといふが如き人間的感覺のないものに向ふ所以のものは、その形式の自づからなる發露として物化し器械化さるゝを得ないからである。こゝに救助の質は失はれる。救助とし言はるべきものは、人間的なものでなければならぬ。然るに、人間的なるものは如何にしても Hilfe von Mensch zu Mensch の形をとらざるべからざるべく集團的救助といふが如き物化せるものに對しこれを望むは全く不可能である。救助意識が「全體」だとか「多數」だとかといふ量的なものとなり、それに分配さるやうになれば意識は稀薄となり人間的感覺を喪失する。かくて人間より人間への動作は失はれる。この場合、愛、心情、人間的感覺の喪失によつて全く救助の質を失ひ、人間に對するものとしては無價値なるものとなり、又それに從つて無効なものとも言はれ、無用の長物視さるゝにいたる。集團的救助は量に奉仕しながら、質の喪失によつてその救助價値を全く減損し、亡び去るに任せなければならぬことゝなる。こゝに集團的形態の質の界限がある。

集團的形態が質の界限を認識するにいたるや、忽ちそれ自づから獨存することの能きぬものといふ自覺に達する。如何に集團的困窮が瀕出し、集團的形態萬能の觀を呈すと雖も、無價値なものは如何にしてもその生存權を主張する餘地がない。こゝに集團形態に對立する個別形態を回顧する機緣が生

ずる。卽ち、集團形態は個別形態の助けなくしては如何ともなす能はずとする認識に達する。

こゝに個別形態出動の要諦がある。但し、個別形態には別個の界限がある。卽ち、個別形態に附隨する量の界限なるものがそれである。歐洲大戰後諸國に出現せし夥しき集團としての困窮に對しては個別形態は全く無力であつた。萬事私的なものとして運營せられ、又私的なものでなければならぬとする個人本位主義に終始する英國でさへ、戰爭によつて惹き起されたる戰傷者、孤遺などに對しては官公社會事業として集團事業を動かさゞるを得なかつた。絕對的個人主義者たる英國人までが集團事業に依賴し、官公に要請せし所以のものは、個別形態には量の界限があり、集團的困窮に對しては全く無能力で如何ともなす能はざるからである。こゝに個別形態の界限がある。

集團形態には質の界限があり、個別形態には量の界限があるとすれば、質と量とを並せ求むる救助世界に於て兩者の特長を併合する案に到達するは極めて自然である。集團形態は個別形態の質によつて補充せられ、量と共に質を併せ有し、個別形態は集團形能によつて補充せられ、質と共に量を併せ有す。こゝに兩者は全く補充關係によつて各完全なものとなる。

個別形態と集團形態が react し、はたらきかけるといふことは兩者が質と量との界限を兩々認識し、對立より補充に轉ずる義に外ならぬ。個別形態と集團形態とが二の界限を認識せずば個別形態と集團形態平行の法則も亦その基礎を得ることができぬ。

七　個別的集團形態の成立

個別形態には量の界限があり、集團形態には質の界限があるとすれば、兩者が各その界限を超越せんとして補充關係に一轉しなければならぬのは自づから明かである。是に於て、個別形態を基準として集團形態を副次として統合する主義と、集團形態を基準として個別形態を副次として統合する主義とが生ずる。前者を「個別的集團的形態」と云ひ、後者を「集團的個別的形態」といふ。

現時に於ける要求は社會的にして一般的な救助方法であるから、一見集團形態を基準にしなければならぬやうに思はれる。經濟的困窮が集團的なるものとして現はるゝのみならず、精神的倫理的困窮も亦集團的なるものとして現はれてゐる。醜惡文藝や醜惡映畫の問題などは個々としてのものでなく、集團としてのものである。こゝに集團現象としての醜惡文藝だの醜惡映畫だのといふ問題が發生する。保健事業に於ても肺結核や花柳病が集團として生起しつゝある事情に顧み、それは集團的困窮として迎へられなければならぬ所以を知るであらう。これに對し、現代の救助方法は一般的規則や組織的體系や法制となつて現はれなければならぬのであつて、allgemeine といふことが現代救助の特徵であると考へらるゝであらう。これに應じ、現代に於ける救助は何づれにしても集團を基準とするものといふ斷定に達する如く思はれる。從つて、個別形態と集團形態との統合は集團基準として行はれ、

これに副次として個別形態を附加するものといふ見解に達する。然らば、集團的個別的形態が兩者統合の原則と觀らるゝであらう。

されど、集團形態といふが如き物的な非人格的な救助方法は量の大なる故に餘儀なく現はれしもので、unadvoidable のものとして一と先づ認めらるゝに過ぎない。若し、かくの如き非人間的な物的なもの除き去る工夫があればこれを除去しなければならないから、集團形態を基準として個別形態を統合することはできぬであらう。

然らば、個別形態を基準とする外はないが、素より、個別形態は人間的であり、愛と心情とによる。若し、個別形態を集團形態に添加しうるならば、集團形態によつて奪ひ去られたる人間的感覺と意義とを恢復することができる。現時に於ける集團的救助は已むをえず導入せらるゝものであるから、集團形態による質の界限を個別形態の添加によつて補正しうるならば、一と先づ集團形態にてありながら、これと同時に個別形態の價値を恢復することができる。

集團形態時期にその弊害を是正するものとして個別集團的形態として現はれしものは既に少くないが、今や、この主義と原則とは漸次全般に擴張せられんとする。エルバアフエルド法や方面委員制に於ける集團救助が個別的なる地區地域と救護委員と(Armenpfleger)方面委員とを加ふるにいたつた所以のものは集團形態をこれによつて個別化せんとするからである。ウアルネル氏は small Almshouse

principle なるものを提唱したが、小養老院は集團的なる院舍と個人との中間にあるもので、個別的意義によつて集團的弊害を緩和せんとするものである。近時、兒童を一般に家庭に於て保護することを原則として設定し、或は委托制度、或は小舍制度、或は分舍制度を採る所以のものも、能きるだけ集團形態の中へ個別化的機能を導入せんとする主義の體現である。

かくの如き個別的集團的見地はやうやく一般化の趨勢にあり、總べての集團事業を個別形態によつて緩和せんとする試みは隨所に紛生するを見る。集團化の時代に、個別化の趨勢を生ずるは一見矛盾の如く考へらるゝけれども、素より集團形態には質の界限があつて、それ自づから全からず、從つて、獨存することが能きないから、集團形態の個別形態によつての補充は自然であり當然であると言はなければならぬ。

かくて、個別形態を基準としながら集團形態を統合する學論が生ずる。私はこれに對し統合形態なる命名を與へる。統合形態は個別形態を基準としながら、集團形態を統合し、質と量とを併合せんとするものである。

八　統合基準の社會事業

個別的集團的なるものとして統合形態は集團形態の時期に出現せざるべからざるものなることは既

に明白となつた。私は「社會事業とは何ぞ」第六章に於て貧民事業を統合貧民事業として組織することを提唱し、「貧民政策の研究」一卷に於ては、それを通じて歐米諸國の救貧制度が何づれも統合貧民事業として進展しつゝある所以を如實に精細に指示した。これによつて、入念に精細に統合貧民事業の樹立しうるものなることを論理的に將又歷史的に論明することができたが、一切の社會事業に於てもこの事は繰り返へされなければならぬ。これについては、漸次その他の社會事業分枝についても精細なる分析闡明を施さなければならず、逐次その歩を進むるであらうが、今に於て私の研究の成果は終始にわたり統合社會事業學論を以て貫通しうることを見出してゐる。

將來の社會事業は必ず統合的基準によらなければならぬ。これ集團形態の隆盛なる時期に於てその弊害を最小限度に止むる用意の上から如何にしても回避しうべからざることである。それ故、現代の社會事業は迂餘曲折直線的に進行することは能きないであらうが、一切の社會事業と社會施設とは必ず統合的基準によつて改編せられ、個別的機能を鮮明にするにいたるであらうと思ふ。

併し形態の進化は體驗的形態より個人的形態に、それより集團的形態に達し、一轉して個別的集團的形態に及び、こゝに終焉に達し進化の幕を下すのではない。形態の進化は更に復路につき、統合形態をほぐして、集團的なるものと個別的なるものとに返へし、集團的なるものは個別的なるものへ戻し、こゝに一切を體驗的なるものに還元してその全程を終るから、統合基準の成立をもつて社會事

業形態進化の最終のものとなすは何づれにしても失當である。

統合的基準は集團形態隆盛時に於て unavoidable として承認せらるゝに過ぎない。但し、これより更に個人的體驗的意義を入れて、一切を體驗形態に還元することにより、社會事業の全程を完了しなければならぬ。然らば、體驗社會事業こそ始めにして又終りなるべき社會事業であると言はなければならぬ。

參考文籍

(一) 海野幸德、「社會事業とは何ぞ」第五章、第六節
(二) 海野幸德、「社會事業とは何ぞ」第六章「貧民事業と統合社會事業」
(三) 海野幸德、「貧民政策の研究」第三編
(四) 海野幸德、「方面委員制度指針」
(五) 海野幸德、「公私社會事業反此例の法則」社會事業研究、第十六卷第四號
(六) 外國の參考文籍は「社會事業とは何ぞ」第五章のものに同じ

第三編　形態の主要問題

第一章　統合社會事業

一　流動的形式と固定的形式

集團的社會事業と個別的社會事業との間には單に形體による區別の外に、機能による區別がある。兩者は量に於て異つて居るばかりでなく、質に於ても異つてゐる。バウム博士は社會事業に二種あるとなし、そのArbeitsmethodの上から、一を固定的なもの(Starre Form)他を流動的なもの(bewegliche From)としてゐる。一切の社會事業—公的社會事業と私的社會事業—は固定的部分と流動的部分とに分れる。社會事業は一方にはorganisatorische und bureaukratische Arbeitであると共に、他方では人間に交通して惱める精神に慰藉を與へ、影響を及ぼすところの流動的なものであり、そこにのみ生命の姿が窺はれる。如實な具象的な救助の行はれるにあたり、その形體が大となり、その機關が大となるに從ひ、それは一般的なものとなり、概念的形式をとり、規定だとか法規だとかといふようなものにかゝわり、固定的形式に進む。この場合、救助は器械的で抽象的であり生命を見失ふ。バウム博士は

こふ Das ist der Apparat, den jede Behörde, jeder Verein sich achaffen mus. Daneben mus sich die bewegliche Form, die eigentliche wholfahrtspflegerische Arbeit entfalten; die Berührung von Mensch zu Mensch, der persönlich erzieherische Einflus kulturell höherwertiger Schichten auf die in ihrer Entiwicklung aus irgendwelchen Gründen nocn zurückbliebenen Massen. Niemals kann das durch ein Einrichtung, einen Apparat allein erzielt werden. Unentbehrlich ist hier warmherzige und verständnisvolle Mensch…

……マール博士も同樣なる筆法によつて社會事業に二種なることを述べてゐる。社會事業の組織的部分は男子これに當り、ザロモン博士の pflegerische und fürsorgende Theil は女子これに當る。併し、固定的部分と流動的部分との存在を認識し、この二の合流と、それが合奏して諧調をつくるところに新社會事業として統合形態が現はれることを認識するにあらざれば社會事業形態論に入り込むことはできない。婦人は概念によらず、生命を直觀的に把捉し悟了する。婦人は物的なるよりも人間的であり、社會的なるよりも慈惠的である。物的なるものは固定的社會事業に、人間的なるものは流動的社會事業に、社會的なるものは固定的社會事業に、慈惠的なるものは流動的社會事業に當てはまる。一般に奉仕するよりも隣人に奉仕せんとするものが流動的社會事業であり、個々人を度外して假定的平均に奉仕せんとするものが固定的社會事業である。流動的と固定的とは相離れ相對立する場合には摩擦し合ひ損傷し合ふものであるが、接合し更に合流するにいたれば、諧調をつくつて美しい音樂となる。

これまで流動的社會事業と固定的社會事業との二の特質が十分明確に知られて居なかつたため、この二のものを合流して社會事業に一階段の上昇を促すことができなかつた。兩者の統合は精細にエルバアフエルド法を論ずる際、それを一例として分析闡明したが、未だ統合は形態的研究によつて基礎づくるにいたつて居ない。私は形態說以前の統合を單に統合社會事業と言ひ、形態論によつて基礎づけられたるものを「本質的統合社會事業」と呼び、彼と此とを區別する。形態論的研究の結果、集團的形態と個別的形態との本質が明白になり、その本質として兩者は各他を豫想してのみ存立するものなることを發見するにいたる。この發見は決して少々の出來事ではない。單に救助の便宜上若くは能率と效果との上から、これまでエ法や、マツサチユウセツト救貧法などで集團的部分と個別的部分とが統合せられたけれども、これは言はゞ偶然の統合であつてその本質の上から必然的に合流すべしとする思想によるものではなかつた。兩者が本質の上から必然的に合流するものであることに就ては形態論の研究後初めて知らるべきことである。然るに形態論は全く私獨自の研究部門であり、統合的社會事業學論は私の創始せしもの、統合的社會事業は私の設定したもので、未だ一般に形態論として流動的と固定的との關係を吟味するにいたらない。そこで私は在來の似而非なる統合社會事業と區別して私の本質によるものを「本質的統合社會事業」として表示する。

形態論的研究によつて集團形態と個別形態との本質を分析露出するにあたり、その本質の中には集

團形態には質の界限があること、個別形態には量の界限があることが含まれる。集團形態と個別形態との本質を構成するものはいくつもあるが、その中について量の界限と質の界限との認識は明かに集團社會事業と個別社會事業とをどちらからも促進して統合形態にいたらしむる契機を包藏する。私はこの場合、個別形態の見地より集團形態を統合する方針をとり、統合社會事業なる一部門を新たに設くるにいたつた。それ故、集團社會事業の見地より、それを基準として個別社會事業を統合するものは私の所謂統合社會事業ではない。私の統合社會事業なるものは個別社會事業を基準として集團社會事業を副とし統合するものを意味する。特に個別事業を機能として、集團事業を形態として統合するもの卽ち私の所謂統合社會事業である。この場合、基準たるべきものはどこまでも個別的なものである。明かに私の學論を反映するものではないが、個別的なるものを主として集團的なるものを從とする意味はハインツ・マアル博士の學論にも現はれてゐる。マ氏はこれについていふ Noch weniger vermag eine echte Frau aber doch in der Fürsorgepraxis auf die Dauer Ressortmensch zu sein. Widerstrebt nicht das Spezialistentum, das sie auf bestimmte „Materien" beschränkt, schon ihrem eingeborenen mütterlichen Sinne, der doch stets das beseelte Ganze, eben den Menschen selbst ergreifen möchte? Und liegt hier nicht am Ende auch der Grund dafür, das gerade tüchtige, innerlich reiche Frauen an der „Front" oft schell ermüden? Das so viele den zentralen Bürodienst für etwas Besseres, Höheres

halten als du „Kleinarbeit" treppauf treppab? マ氏の思想は明かに個別的基準論である。かくの如き思想より出發する統合論はいづれにしても個別社會事業を基準として集團社會事業を統合する主義となつて現はれる。

現今の社會事業は集團的なるものであるから、Gesamtwohl を目標となし、總和に對して企畫するものであり、隣人を忘れ去り個々人の運命に關與せざるものである。かくの如き Arbeitsmethode が果して集團それ自づからを救ふ所以であるか否か未だ學論に於ても確定することができず、從つて、現業に於ては純粹集團的なるものとして進む外なき狀態である。方法論の研究が尙一階段の上昇をなすにいたれば、蓋し、私の如く集團の困窮を救助する途は先づ個人を通じてゞあり、これを集團に結合する形式卽ち本質的統合社會事業によつてなされるといふ思想に到達するであらう。一般的救助としての Gemeinwohl を目標とする方法は集團を Selbstzweck とするもので、元來個々人の運命を目的とするものたる基本思想を忘れ果てゝゐる。これは非人格的な集團を基準として、凡ゆの範圍にわたり集團を强調する時代精神の表現たるまでゝあらう。マアル博士は集團基準時代を批評して Aber eben in ihr verrät sich doch das, was ich die maskuline Tendenz nannte; jene Flucht von dem Menschlichen ins Sachliche, jene Veräserlichung und Mechanisierung des Helfens, die spezifisch-weibliche Graben nicht zur rechten Entfaltung kommen läst と言つてゐる。なほ、マアル氏は女子の特質を蔑視するのは時代

精神が非人格で集團を崇拜するからであると附け加へてゐる。

人間の救助は一般的であり抽象的であるよりも、隣人に依り個人に依る。隣人と個人とを無視して社會的に救助を擴張せんとするにあたり純眞なる人間的救助は逸脱して了ふ。救助は能率とか効果とかいふ外的なものに關するものであるよりも、内的狀態に關するもので、いたるところ人間的といふこで表示される。物的な集團的救助は ein starres Mosaikbild der bewegten Wirklichkeit und ihres beseelten unteilbaren zusammenhangs たるのみである。物的な非人格的な能率と効果とに集中する社會的救助(soziale Fürsorge)としての集團的救助は人間に立ち向ふ方法ではないから人間に對する救助としては個別的方法による外はない。こゝに個人的方法を基準として集團的方法を統合する思想が現はれる。

個人的方法により、無限の結合によるか、全一によるか、たゞこの二の途を通じてのみ人間的感覺をもつ人間的救助が進められる。この人間的救助は全一の上に全き魂によつて當るものであり、生命に肉薄するものであるから單なる學習や概念的方法を以て近接することができるものでない。社會事業が單なる知識であるよりも、魂であり生命であるといふ義はこゝに現はれる。學校に於ける學習は單に社會事業に一定の用意を與へるだけで、社會事業の堂奥に入るには魂と生命との全景を把捉しなければならず、體驗に還設歸入しなければならぬ。この場合、集團的意義をもつ單なる學習は社會事業の外壁を見まわすだけで、その中に入り、眞の光景に接することはできぬ。社會事業は全的な生命

の把捉であり中心的な性格造成であつて單なる學習ではつくされぬ。之についてマール博士は熱筆をふるつて Sie hat die schwierige Aufgabe, die uralten, unvergänglichen, aber heute unverstandenen Werte der Karitas in neues Licht zu rückeu und zeitgemäs zu formen. Sie soll also Gesinnungsschule, nicht Wissens-und Fachschule sein. Ja sie mus eigentlich derartige Fachschulen und nicht minder eine sehr ernsthafte fürsorgerische Praxis varaussezen. Denn qualifizierte überschauende Fürsorgerinnen erwarten wir von ihr,——Helferinnen an der Front, keineswegs blos Organisiener, wie sie jezt auf den Universitäten ohnehin auch in weiblicher Auflage massenweise fabriziert werden. Doch die Überschau, wie wir sie meinen, wird nicht schon geboten durch ein notwendig flüchtiges Vielerlei von Wissenschaft, das eher eine charakterschädigende Halbbildungbegünstigt, sondern durch eine geschlossene Lebensauffassung, durch zentrale Charaketerbildung. Die Menschenseele in der Tat, sowohl die Seele des Bedürftigen als die Fürsorgers, ist „das Thema" der allgemeinen Frauensschule! と言つてゐる。人間の腦みは生命の貫徹する全的なものとして存するのであるから、これを取扱ふには概念とか、集團とか、効果とかといふことでは如何ともすることができない。これが取扱方法としては心情によるものでなければならず、全人格的な感動と、全き獻心とによつて、その魂と生命との内祕に入り込むものでなければならぬ。單に外形や外廓に彷徨するが如き集團的方法を以てしては魂や生命の内陣や内祕

を窺うことができない。集團的方法は魂や生命の苦痛と歡喜とに何の關係をも持たぬものである。それが魂と生命との苦痛と歡喜とに參與しうるものたるには個別的方法により、それに結合する形をとる一途あるのみであるが、これ卽統合社會事業に外ならぬ。純眞なる社會事業は外より發見することはできず、それは必ず內より發見しなければならぬ。

二　個別的と集團的との統合

統合社會事業が個別的を基準として、集團的に統合すべきことに就ては既に明かにせられた。集團的方法は單に個別的方法の機能を顯彰する役割をもつに過ぎないから、それは外的な「形態」としてそれに結合するをうるが、個別的方法はそれ自づから基本たらなければならぬから、內的な「機能」によつて立たなければならぬ。これ統合形態は機能としての個別的と、形態としての集團的との統合であると言はれる所以である。

他で集中的と分散的とがヱ法に統合する所以を示したが獨逸では集中的と分散的とを統合する實驗は所々積まれてゐる。(1)Lankkreis Düsserdorf. (2)Landkreis Mettmann. (3) Landkreis Solingen (4) Kreis Grevenbroich などに於ては集中的機關たる中央局と分散的機關たる地區組織とを併合し、これを統合することによつて、統合社會事業に關する實驗を試みてゐる。

個別的なるものを基本として統合形態を構成する主義に於ては分散的機關と分散的機能とを基本としなければならぬ。言はゞ分散的なるものに十分その機能を發揮せしめ、その目的を達せしむる爲に、集團的なるものが結合協力する義による。特志家、女子、私的社會事業はいづれも分散的機能の上に立つ。よつて、統合にあたつて、私的社會事業を萎微せしめ、特志家を斥け、女子を無視するが如き統合方法は絕對に排斥し去らなければならぬ。官公社會事業や集團社會事業の全盛は正當なる社會事業學論がその羽翼を張るにいたるまで一時的存在を保ち、その勢威を振ふに過ぎぬものである。官公社會事業や集團社會事業は凡べて手段であり、私的社會事業と特志家と女とが寧ろ目的である。個別的方法を基準として統合する主義を採るものは私以外にも多少はある。たとへば、バウム博士の如し。バウム氏は個別的機能を基調として集中機關と併合しなければならぬ意を明かにして Einheitlichkeit ist stets nur von formalen Wert, niemales Selbstzweck であると云ひ、この自明なる公理が知れわたらぬので困ると嘆じてゐる（私に於ても然り）ボ氏は、更に Aber, ich sagte es schom oben, deise organisatorische Vereinfachung und Vereinheitlichung ist niemals Selbstzweck, sie ist auch niemals Erfüllung, stets nur Mittel とゐへ言つてゐる。統一卽ち統合は手段であつて目的ではない。統合することは個別的方法を活かし使ふ所以であり、集團的困窮の發現する時期にこれ以外の方法がないとして餘儀なくそれを導入するまでゝある。言はゞ統合形態は必ず無からざるべからざるものではないが

（目的として存するのではないが）個別的方法を活かし動かす上に成立するものである。それは現代的意義と思潮との上に導入せらるゝ餘儀なき方法たるまでゞある。

集團的といふが如き乾固して血と涙とのないやうな社會事業は人間的な文化的作業としての社會事業たることはできない。文化作業としては人間をつくり、その生命を擴張しなければならぬ。流動的な慈善（形態論上の）はこの際何よりも必要である。心情と愛とによつて人間の惱みも喜びも取扱はれるのであつて、この途よりのみ人類の文化的貢獻と文化的作業とが積まれる。乾固して似而非なる社會的救助（soziale Fürsorge）や社會政策の如きものは眞の救助とは言ひがたい。これ等の形式は集團時代假象として現はれ來り、個人的方法を援助し、その使命をつくさしむる職能をもつだけである。然るに手段としての集團社會事業や社會政策が目的と見らるゝにいたり、思想の混亂を生じ、客は主に取つて代り、主客顚倒の時代を顯出したのである。

流動的形式と固定的形式とは併合しなければならぬ。生命に肉薄し、その內祕に入りこむには流動的形式による外はないが、集團的困窮の瀕出にあたり、餘儀なくこれに固定的形式を加へ助勢せしむる機運を生じてきた。エルバアフエルド法はかくの如き統合的使命を帶びて現はれて來りしものである。エ法には多くの缺陷がありその儘その形式によつて統合社會事業を進むることはできぬが、それが統合形態の一形式だと見るには何の差閊へもない。たゞその精神として主義として存する個別的方

法と集團的方法との併合と、個別的方法を本位とする思想は死滅してはならない。現時に於ける歷史社會事業學論としての米國を主流とする個別事業はこの思想と主義と精神とを標榜し、やがて社會事業の形勢を一變せんとする使命をもつものである。

規定だの法規だのといふ形をとり、固定的形式が敏昌するけれども、この形式は益々器械化するばかり、非人格的なものとなるばかりである。よつて、社會法制による方法は一度び流動的形式によつてこれを柔げ、再び、流動的形式を基本として運營の精神と主義とに轉換を行はなければならぬ。バウム女博士はこの義を明かにして Neben diesem in Formen genossenen Kern mus sich das enthalten, was ich die „bewegliche Form" der wohlfahrtspflegegerischen Arbeit nannte; die Berührung von Mensch zu Mensch, der persönliche erzieherische Einflus kulturell höherwertiger Schichten auf die in ihrer Entwicklung aus irgendwelchen Gründen noch zurückgeliebenen Massen. Niemals kann das durch eine, „Einrichtung," einen „Apparat" allein erzielt werden; unentbehrlich ist hier der warmherzige und verständnisvolle Mensch, der sei es in amtlicher, sei es in caritativer Thätigkeit, es vermittels seiner verfeinerten Kultur und Wesensartversteht, das anderer Not zu einer „Nummer" einen blosen „Fall" erstarrt と言つてゐる。集團的方法は現代工業の精神であり主義である。現時の大工業は一切を數に換算するが、この器械的な非人格的方法は凡ゆる方面に暴威を振つて居る。社會事業といふが如き